

日本キリスト改革派教会 大会教育委員会

教会学校 教案誌



church school curriculum

あなただたは皆、信仰により、
キリスト・イエスに結ばれて
神の子なのです。

ガラテヤの信徒への手紙 3章 2 6 節

vol. **57**

2015年 4~6月

「子どもと親のカテキズム」
に基づく二年サイクル 第1年

- 【巻頭説教】カテキズム説教と講解説教の狭間で 岩崎 謙
カテキズムカリキュラムのオリエンテーション 相馬伸郎
子どもと親のカテキズムについて (3) 牧田吉和

【教会学校教師のための神学講座】
全生活にわたる感謝 ～十戒を生きる 吉田 隆

【日曜学校・教会学校訪問】関キリスト教会のご紹介

2015年4～6月カリキュラム（第57号）

—『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル 第1年—

月 日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
4月5日 復活祭	復活されたキリスト	問30	ウ小30
		マタイ28:1～10	マタイ28:18～20
	永遠に共におられる復活のキリストを信じ、その力ある要求に応答しよう。		
12日	一番大切なこと・ 神さまと共に歩む	問1	—
		ヨハネ12:27～36	エフェソ5:8
	人生の目的は、神と共に歩むこと。信仰生活の恵みを感謝しよう。		
19日	一番大切なこと・ 神の子とされて	問1	—
		ルカ19:1～10	ルカ19:9
	人生の目的は、神の子として生きること。神の子とされていることを感謝しよう。		
26日	神を知り、 栄光をあらわす	問2	—
		ヨハネ4:7～26	コリントー10:31
	人生の目的は、神を知り、その栄光をたたえること。あるがままの姿で主に従おう。		
5月3日	神を喜び、仕えて	問2	—
		ヨハネ4:31～42	ヨハネ4:36
	人生の目的は、神を喜び、神に仕えて歩むこと。あるがままの姿で主に仕えよう。		
10日	信じる喜び	問3	ウ小30, 86、ハイデ20, 21
		ルカ24:28～43	ローマ3:23
	神はキリストによって和解してくださった。信じるだけで救われる幸いを覚えよう。		
17日	神の子とされた喜び	問3	ウ小33, 34
		ルカ15:11～24	ルカ15:20
	神の子とされ、神の子として歩むことこそ人生のすべて。神の子の自覚を深めよう。		
24日 聖霊降臨祭	キリストの教会のはじめ	問12, 34, 35, 48	—
		使徒2:37～42	使徒2:42
	約束の聖霊降臨と使徒たちの力強い説教はここに。聖霊の力を求めて生きよう。		
31日	信仰生活・ 主日礼拝式	問4	ウ小88、ハイデ65～67
		使徒2:41～47	使徒2:42
	神と共に歩むとは、信仰共同体と歩むこと。教会なくして救いなし。主日を大切に。		
6月7日	信仰生活・ 送り出されて生きる	問4	ハイデ86～91
		ルカ10:38～42	マタイ28:18, 19
	神と共に歩むとは、神の国を前進させるために派遣されること。伝道、奉仕、証に生きよう。		
14日	愛に生きる	問5	ウ小39, 88、ハイデ86
		ルカ10:25～37	ヨハネ15:12
	神は愛であるので、人は神と隣人を愛することが本来の姿。神の愛を感謝して。		
21日	祈りに生きる	問5	ウ小39, 88、ハイデ86
		マルコ1:35～39	テサロニケー5:17
	愛に生きるためには、日々、神の愛に満たされることが必要。祈りなくして力なし。祈りを大切に。		
28日	聖書・神の御言葉	問6	ウ小2, 3、ウ信1章
		ペトロ二1:16～21	詩編119:105
	聖書なくして神とその御心は分からず、信仰もない。聖書の尊さを知ろう。		

も く じ

2015年4・5・6月カリキュラム

まえがき	芦田 高之	4
巻頭説教	岩崎 謙	5
カテキズムカリキュラムのオリエンテーション	相馬 伸夫	9
救済史カリキュラムについての説明	長田 詠喜	12
「子どもと親のカテキズムについて」(3)	牧田 吉和	13
日曜学校・教会学校訪問 関キリスト教会のご紹介		
関キリスト教会日曜学校教師会		19
絵本に心を耕されて		
「少年の木 希望のものがたり」	望月 鈴子	24
教会学校教師のための神学講座		
全生活に渡る感謝～「十戒」を生きる(1)	吉田 隆	26
副読本のご案内		31
自由募金のお願い		32

聖書黙想・説教展開例・分級展開例

4月 5日	34
4月12日	40
4月19日	46
4月26日	52
5月 3日	58
5月10日	64
5月17日	70
5月24日	76
5月31日	82
6月 7日	88
6月14日	94
6月21日	100
6月28日	106

2015年7・8・9月カリキュラム	112
2015年度年間カリキュラム	113
救済史に基づく二年サイクル	115
執筆者よりひとこと・あとがき	118

まえがき

芦田高之（新浦安教会牧師）

【感謝】

2014年秋、日本キリスト改革派教会大会定期会にて、『教会学校教案誌』を中部中会日曜学校委員会発行から、大会教育委員会発行への移行が決議されました。長年にわたって教案誌作成発行に尽力されてきた中部中会日曜学校委員会と、その働きを支えて来てくださった多くの皆様方に、改めて感謝御礼申し上げます。

大会教育委員会発行になりますが、これまでどおり中部中会の多くの皆様方のご尽力によって、毎回の教案誌は編集、作成、発行されています。今後とも、よろしくお願いいたします。

【日曜学校か教会学校か】

日曜朝、主日の朝礼拝の前、子どもたちのために開かれる「礼拝と教育」については、教会によって、「日曜学校」「教会学校」「子どもの教会」と呼ばれます。名称は各個教会の伝統に即して様々です。

いずれにせよ、子どもたちのための礼拝とキリスト教教育が地域伝道につながっている場合と、各個教会の契約の子たちの信仰教育にほぼ限定されているか、その両方が射程に入っているか。大別するとその三者だと思えます。

【地域伝道としての日曜学校】

日本の状況は、キリスト教未伝の地ではないとしても、「宣教地」であることは確かです。日曜学校は、主イエス・キリストとその救いを世の人々に伝えるための、大きな手段です。今から数十年前までは、首都圏においては、どの教会・伝道所も、日曜学校に100名前後の子どもたちが集まっていました。そうした教会のいくつかは、今では日曜学校の閉鎖の危機に見舞われています。

私たちの教会は新浦安地域にありますので、町に子どもたちが居ないわけではありません。教会の隣地は、水泳教室を含む大型スポーツ・ジムです。複数台のバスで送迎をし、毎日、大勢の子どもたちを、そのジムは集めます。「水泳を習うためなら、お金を出してでも子どもたちは来るのに……」と、つぶやきながら、教会前を通るバスを毎日、私は横目で眺めています。

【この町にはわたしの子どもたちが大勢いる】

なかなか町の子どもたちが教会に来ない。いずれの町でも大差ないでしょう。でも、同じ改革派教会のなかでも、地道に学校前で子どもたちにチラシを配り続けている教会や、あの手この手で、地域に住む子どもたちを教会にお誘いしている教会があります。主イエス・キリストは、「この町には、わたしの子どもたちが大勢いる」とおっしゃっています。地道な昔ながらの方法であれ、現代的手法を用いてであれ、何とかして、一人でも多くの子どもたちを得たいものです。「福音のためなら何でもする」と言った、パウロのごとく、「何とかして……」です。

【今いる子どもたちを】

一方では、教会の外に出て行って、子どもたちを教会に招き続けることが大切です。他方、今来ている子どもたちの魂に（契約の子たちであれ、数少ない「町の子どもたち」であれ）、懇ろに、イエス・キリストの福音を刻み込んでいくことも大切です。

そのために、この教案誌が、「わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることがおできになる方」によって、大きくまた着実に、神の子どもたちの信仰教育のために用いられますように。

カテキズム説教と講解説教の狭間で

岩崎 謙（神港教会牧師）

〈まえがき〉

大会教育委員会から『子どもと親のカテキズム』（以下：新カテキズム）が出版され、教案誌の発行母体が中部中会から大会教育委員会に変わりました。この二つの出来事は、実は一つの事柄です。今後、大会教育委員会による教案誌においては、新カテキズムに基づく説教がなされることとなります。これにより、霊の豊かな実りが将来の教会にもたらされますように、祈っています。

新カテキズムの特質は、第二部を「教会と共に歩む道」とし、信じ感謝して歩む道が教会の中にあることを、そのカテキズムの構造（目次）において明らかにしている点です。ウ小教理があるのにあえて新カテキズムが作成されましたのは、教会の大切さを幼い時より教えたいという願いに導かれてのことと理解しています。この視点は、子どものためだけにあるのではなく、成人教育を含め、ウ小教理問答・ハイデルベルク等を用いて行うすべての教会教育の現場において、いつも自覚されるべきものです。また、カテキズムの骨格は、いうまでもなく、昔から、使徒信条、十戒、主の祈り、です。神港教会では、毎主日、この三つは朝拝において用いられます。新カテキズムは、これらに導かれる信仰生活を、「神さまと共に歩む道」、「信じて歩む道」、「教会と共に歩む道」、「感謝しつつ歩む道」と、「道を歩む」というイメージでとらえています。使徒信条と十戒と主の祈りは、それを用いる者に、信仰者として歩むべき道を指し示します。何を学んだかは、常に、どのように生きるかと結びついています。

さて、新カテキズムの解説や分析をこれ以上

書いても、それは巻頭言であっても、巻頭説教にはなりません。そうこう思っている内に、締切日が迫ってきました。そのような中で恐縮ですが、2014年のクリスマス礼拝メッセージをそのままの形で提出させていただくことにしました。この説教は、使徒信条の「おとめマリアより生まれ」を解き明かし、当日、出席していた中高生を意識して語られたものだからです。神港教会では、中高生と求道者のために説教レジメを作っています。今回の原稿は、クリスマス礼拝でしたのでいつものレジメより丁寧で、後から少し手をいれましたが、実際に配られたものです。簡単なテーマではありませんが、中高生の方々に「処女（おとめ）マリア」のことを心に留めてもらい、中高生も出席者の大半を占める大人も皆で、おとめマリアが歩んだ道を共に歩みたい、という願いをもって、この説教はなされました。ここに、新カテキズムと共鳴するものがあれば、幸いです。

今回の説教は、12月にルカによる福音書1章からなされた一連の説教の一つです。聖句を一節一節、順を追って語るのではなく、処女降誕の教理的説明に向かうでもなく、救い主を産む処女マリアの出来事に的を絞り、ルカの聖句が解き明かされています。もし、新カテキズムに基づく説教であるなら、「聖霊によっておとめマリアより罪のない方として生まれ」（問26）を丁寧に扱う必要があります。その場合は、「聖霊によっておとめマリアより」という修飾句は、「罪のない方として生まれ」に係っていますので、キリストの無罪性を語らねばなりません。しかし、そこには踏み込んでいません。ところで、新カテキズムの同箇所の引証聖句は、マタ

1:20、ルカ1:35、ヘブ7:26です。前者二つが、「聖霊によっておとめマリアより」の引証聖句で、ヘブライが「罪のない方」の引証聖句です。この説教は、「聖霊によっておとめマリアより」という使徒信条・カテキズムの言葉を、ルカ（福音書と使徒言行録）の文脈の中でだけで、思い巡らしたものです。この説教を分類するなら、カテキズム説教というより、主題的な講解説教でしょうか。

神港教会は、これまで中部中会発行の教案誌を用いてきました。聖書学校の教師会において、次月に行う教案誌の説教をいつも皆で学びます。その時、カテキズムを解き明かす説教か、カテキズムの引証聖句を語る説教かが、しばしば、問題として取り上げられました。一回の説教で両者を同時に行うとすると、メッセージが拡散する場合があります。目指すべきは、一つのメッセージに絞り込まれた内容で、かつ、カテキズムと聖句とが相互に支え合い、補い合う説教です。教理説教を行う際、すべての教師がこの難しさと直面しておられることと存じます。

今回は、この両者の関わりを考える上で参考になればと思い、実際に行った説教を提出しました。模索中ですので、ご批判、ご質問があればお寄せください。改革派教会では、以前、教理説教がよくなされていたそうです。昨今は、講解説教が主流となっています。そのような中で、大会教育委員会によるカテキズム説教は、教理説教の重要性に改めて着目するものです。そしてこれから、カテキズム説教とは何か、新たな問いとなって立ち上がってくることでしょう。御言葉に裏打ちされた教理説教の確かさと教理に支えられた講解説教の豊かさを身につけ、最良のものを、子どもたちにささげたいと切に願います。

〈説教〉

ルカ1:26～38「クリスマスの驚き」

2014年12月21日（クリスマス礼拝）

クリスマスは、「不思議だなあ」と驚くときです。驚かなくてもすむような理屈をひねりだすのではなく、毎年「不思議だなあ」と驚き続けることが信仰生活です。今年のクリスマスは、使徒信条では「処女」と書いて「おとめ」と読んでいるマリアによる処女降誕に思いを向けます。人間の通常の感性や理性では把握できないことですが、御言葉に導かれ、礼拝で歌われる「マリアの賛歌」にアーメン（本当です）と心から応答できればと願います。

まず、よくある誤解を解かねばなりません。生まれる子は、「いと高き方の子」、「聖なる者、神の子」と呼ばれる、と天使は伝えます。主イエス・キリストの誕生は、まさに神の御子の誕生です。ここにおいて、神がヨセフの代わりにマリアの夫になったのではありません。お母さんがマリアで、お父さんが神さまではありません。処女降誕とは、神と人間の間にできた、半分が神、半分が人間、というような誕生ではありません。主イエスは、ヨセフの関与なしに、聖霊により誕生された、真の神であり、真の人です。

また、神の子という称号は、サムエル記下7章14節の「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる」というダビデ契約の中で理解される言葉で、ヤコブの家を復興させる真の救い主という意味です。この神の子という言葉から、神が、父となり、人間の女性を介して、神の子を世に生まれさせる、と信じていたユダヤ人は、当時、誰もいません。ですから、主イエスを神の子と呼ぶ教会の信仰が、処女降誕という神話を生み出したというような説明は、聖書的にも、歴史的にも、全く根拠がありません。

言うまでもないことですが、処女降誕は、実験による再現可能性に基づく科学では、決して捉えることができない出来事です。現代人だけ

でなく、古代の人でも、男性の介在なしに処女が身ごもるとは、誰も信じることはできませんでした。では、どうして、聖書は、この物語を語るのでしょうか。処女降誕物語成立は、一重に、マリアの証言にかかっています。この事実、マリアの証言を通して、教会に伝えられました。洗礼者ヨハネの誕生の物語をザカリアとエリサベトを通して受け入れた教会は、救い主イエスの誕生の物語をマリアの証言に基づいて受け入れました。このような証言者の証言なくして、物語になり得なかった出来事です。

では、マリアの体験を聖書から辿って、考えて参りましょう。天使ガブリエルは、既に年をとっているマリアの親戚のエリサベトに洗礼者ヨハネの誕生を告げ、神はお言葉どおりに、彼女の胎に新しい命を与えてくださいました。夫婦による自然な誕生であっても、これは、神のお働きなくしては決してあり得ないものでした。きょうの聖書箇所(26節～38節)は、26節と36節の「六ヶ月」という言葉で囲まれています。これは、エリサベトの胎に命が宿ってから六ヶ月という意味です。処女降誕は、高齢出産を超える奇跡です。神は、人間にはできないことも神にはできるという真理を、マリアの傍らで指し示す人としてエリサベトを備えておられたのです。

天使ガブリエルは、「神にできないことは何一つない」とマリアに語ります(37節)。この言葉は、「神の言葉には不可能はない」という意味をもっています。神が言葉を語られると、必ず、その言葉のとおりになる、という励ましです。天地創造のはじめに神が「光あれ」と語られると、光があったように、神がおとめマリアに「男の子を産む」と語られると、その言葉どおりに、マリアは御子の母親になります。マリアは、天使の励ましを受け、おとめである自分にはできるはずはない、という自らの思いを心から閉め出し、自分に語られた神の言葉には不可能はないという天使の言葉を、心に受け入

れました。

また、天使は、「聖霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む」と語りました。ルカによる福音書における聖霊の強調は、使徒言行録における聖霊の強調と結びついています。「聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、中略、地の果てに至るまでわたしの証人になる」と。聖霊によって復活の主の証人になった教会は、聖霊によって御子を身ごもったという母マリアの証言の受取人になりました。聖霊の力が如何に絶大であるかを知っている者なら、処女降誕の物語を受容できます。きょうは、この後に洗礼式と加入式が行われ、同じ誓約がなされます。その第四項は、「あなたは今、聖霊の恵みに謙虚に信頼し、キリストの僕としてふさわしく生きることを決心し、約束しますか」です。マリアに働きかけ、初代教会に働きかけた聖霊が、今日も一人一人に働きかけておられます。

ここで、もう一度、処女降誕の神秘に思いを馳せましょう。マリアは、将来の夫になるヨセフのために、処女であることを保たねばならない婚約の時を過ごしていました。その時に、ヨセフのためではなく、ヨセフとの結婚という自分の幸せのためでもなく、神のために自分の体を用いていただける道が突然、開かれました。そして、御言葉に励まされたマリアは、「お言葉どおり、この身に成りますように」と自らのすべてを神に委ねました。

若い方々は、どうか、将来のために、自分の体を大切にしてください。そして、自分のために生きるのではなく、神のために用いられる可能性が自分にも開かれていることを、若いときから思い描いてください。人生を長く生きてこられた方が自分をおとめマリアに重ねることは、容易でないかもしれません。しかし、ここで、「お言葉どおり、この身に成りますように」というマリアの応答に心を向けましょう。マリアはこう答えて、御子の母になる道を自ら選びと

りました。信仰とは、マリアのように、自分を明け渡すことを選びとることです。この選びは、自分の意志による決心だけではありません。自分を委ねることができるほど確かな御言葉が、今自分に語られているという驚きに促されてなされます。

すべての人が、自分の体を、また自分の人生

を、自分だけで使いきることはできません。自分の人生は、他者のために、そして、神にささげるべきものです。誰もが、マリアの体験を通してこの人生に招かれています。主イエスを聖霊により心に宿す人は、自分のため生きるありきたりの人生ではなく、神のため、隣人のために生きる驚きの人生へと歩み出します。



カテキズムカリキュラムのオリエンテーション

相馬伸郎（編集長）

これから2年間、「子どもと親のカテキズム」によるカリキュラムに従って、子どもの教会の営みがなされてまいります。皆さまのお手元には、すでに新しいカテキズムが届いていることと思います。契約の子らには、ひとり一冊、持たせてあげてくださるようお願いいたします。大人になってからも、自分の古びた「カテキズム」への愛着がわくような祝福された家庭と教会における信仰生活が営まれますようにと心から祈ります。

〈教理説教について〉

これから始められるカテキズム説教（教理説教）は、どのようなものであり、どうあるべきでしょうか……。14年の歩みのなかで、既に大勢の教師方が執筆してくださいました。しかし、カテキズム説教は、いかにあるべきかをきちんと確認したことはありません。それぞれのスタイルがあることが分かります。

子どもの礼拝式の説教奉仕において最大の課題、そして説教者である私どもの最大の喜び、醍醐味はどこにあるのでしょうか。それは、神からのメッセージ（神の語り、神からの宣言）をはっきり心と魂に届けること、届けられたときだと思えます。聖霊なる神が、彼らの前に共にいてくださる主イエス・キリストを描き出してください、子どもたちが主イエスを近くに覚えて愛し、祈りうつ主イエスと共に歩んでくれることです。

子どもの教会の説教者である教師の皆さまの基本を改めてここに確認しておきましょう。まず、聖書テキストを繰り返し読み、問答を繰り返して読んでみることです。問答の引証（証拠）聖句も時間の許す限りお読みください。もしか

するとそこから語りたい、メッセージを受けたと導きをお受けになれるかもしれません。そうであれば、説教者のその導きは大切にされてよいと、筆者（弊誌）は考えます。つまり、展開例や聖書箇所縛られず、説教者自身が選択したテキストにから語る自由は担保されてもよいのです。もとより、各教会、教師会の合意が必要です。

御言葉の黙想と共に、説教者の目の前にいる現実の子どもたちを黙想することも不可欠のことです。彼らの現実を知ることが、その意味でも分級の営みが重みをもつこととなるはずで

す。さて、ここで改めて確認します。弊誌の説教展開例は、どこまでも一例に過ぎません。弊誌創刊号で、この「教案誌」とは、教師の準備時間を少なくさせるための安直な種本ではないとの主旨を語りました。時間をかけて準備することが大切です。そもそも、子どもたちのために執り成し祈ることなしに、彼らの前に説教者として立つことはできないはずで

す。いずれにしろ、ご自分なりの準備をなさった後に、あるいは並行して、カテキズムおよび聖書黙想の欄をお読み頂き、次に、説教展開例で説教者のその釈義（解釈）と黙想がどのように説教に結実したのかをご確認ください。黙想原稿の掲載の大きな狙いは、その流れを共有していただくことにあります。

〈カテキズムの暗唱について〉

「はじめに」と小見出しに記された問1から問5までは、このカテキズムの全体構造を示しています。つまり、問1～問97の要約です。その意味で、少なくともこの箇所の問答は、子

もたちと共に覚えていただきたいと願います。小さな子らには、ここだけを繰り返し教えてもよいほどです。カリキュラムでも二回連続で扱いますが、それは、丁寧に語る必要があるのと同時に暗唱できるようになってほしいからでもあります。

筆者の仕える教会では、毎主日、「今日のカテキズム」をみんなで唱えます。時に、司会者の裁量で暗唱できるように、暗記の時間をとったり、少しずつ繰り返し覚えさせたりします。さらに、カテキズムを要約した言葉を「大きな栗の木の下で」のメロディーに合わせて歌います。輪唱すると楽しくなります。このカテキズムも、「できる限り短い文章に」と、精魂傾けたつもりですが、なお、後半は長くなります。その意味でも、園児から小学校低学年の子どもたちには、替え歌版の短い文章に要約することは、極めて有効だと思います。

〈カテキズムの構造略解〉

問1～問5までは、カテキズムの「目次」ともなっています。問1は、神の子である私たちの人生の目的、言い換えれば「一番大切なこと」を明示します。これ以降のすべての問答は、ここで描かれた信仰の世界、真理の丁寧な解説となって行きます。

冒頭、一番大切なこととして、自分とは誰か、何者かをはっきりと自覚させられる言葉が記されます。それが、「神さまの子ども」です。この言葉は、ただ、子どものためのカテキズムだからという理由で記されているわけではありません。子も親も、すべてのキリスト者とは、神の子であるということです。神の子であるという自覚に生きることが、人生の究極の喜びなのです。そして、神は、神の子たちを、永遠のいのちの祝福つまり、永遠の愛の交わりの内に生かそうと決意し、主イエス・キリストにおいて決定的に実行されました。その救いの恵みの内に生きる、生かされることが、神と共に歩むこ

とです。神は、神の子と共に歩んでくださいます。同時に、神の子たちは神と共に歩む志に生きて行くのです。

問2は、「信じて歩む道」です。これは、問3と合わせて、第一部を構成します。そこではまず、信じて従うべき内容が記された神の啓示である聖書について語られます。そして三位一体、父なる神、人間、子なる神、そして聖霊なる神が扱われます。教理の心臓部分です。

問3は、神を信じ、神と共に歩むことができない罪人を救ってくださるイエスさまに焦点が当てられます。このカテキズムが強調するのは、救いです。そのためには、罪人であることの深い自覚を促します。また、このカテキズムは、成人求道者を信仰へと促すためにも編まれています。ちなみに、「あなたは、罪人ですか」との問いを扱うそのとき、カテキスト（カテキズム教育を施す人）は、その方に対する愛と祈りをどれほど積んでいなければならないかを思いいます。

問4は、「教会と共に歩む道」で、第二部を構成します。ウェストミンスター小教理問答では、扱われない部分で、その意味で、このカテキズムが特に強調する部分の一つです。子どもたちに、神と共に歩む道が教会（員）の交わりの内に歩むこと、教会なくして信仰に生きる道がないことを肌身で覚えてもらい、その感謝と喜びの内に、交わりを築いて行く使命を自覚させたいと思います。

問5は、「感謝しつつ歩む道」で、第三部を要約します。このカテキズムがまさにユニークなものとなっている点の一つです。神の子の歩み、信仰の行いとは、受けている恵みへの感謝の応答のみに規定されることが明示されます。「救いは、恵みのみ」「行いは、感謝のみ」です。赦されてなお、私たちにこびりついている律法主義的思考方を克服し、あるいは赦された者の怠惰や自己義認の誘惑に抵抗するためにも、第一部、第二部の学びが大切です。

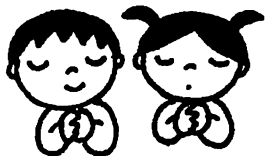
同時に、そのためにも信仰による行いを扱う第三部を丁寧に学び続けることが大切です。ここでは、「愛に生きる道」において「十戒」を学びます。そこでこそ、十戒の意味や主要な目的は、明瞭にされると思います。十戒は、キリストの律法、福音の掟、神の愛への招きなのです。最後に「祈りに生きる道」で「主の祈り」を学びます。信じること、信じて生きることは、祈ること、祈りに生きることです。その歩みは、本カテキズムが特に強調する、神と隣人に仕える（ギリシャ語動詞・ディアコニー 名詞ディアコニア）こと。さらに、神さまがつくられたものを大切にすること、つまり、被造世界・環境を守ることが学ばれます。

〈食卓の友〉

これから、二年をかけて学んでまいります。皆様には、この書を団らんの場に置いて、子どもたちとともに、この書とその言葉になじんでいただきくことを心からお勧め致します。このようにして家庭におけるカテキズム教育に弊誌（教会）のカリキュラム（カテキズム教育）が組み合わされるところで、神は豊かな実りを結ばせてくださると考えています。

子どもたちの信仰告白をめざし、その全生涯が神の栄光をあらわすものとされるために。

（相馬伸郎）



救済史カリキュラムについての説明

長田詠喜（新所沢伝道所宣教教師）

既にご案内の通り、本号より『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル」のカリキュラムが始まります。

教案誌は従来より「カテキズムに基づく二年サイクル」と「救済史に基づく二年サイクル」を交互に繰り返し、四年間で両方のカリキュラムを網羅して扱うことができるようにしてきました。これに対して、ご利用くださっている皆様よりさまざまなご意見をいただきました。特にカテキズムに基づくカリキュラムだけで二年間のプログラムを組むことが、全ての年齢の子どもに一律に適したものになりにくいとの、貴重なご指摘をいただいております。

このご指摘について、大会教育委員会及び教案誌編集部で検討を加えました結果、暫定的ではありますが、今号から始まる「カテキズムに基づく二年サイクル」のカリキュラムに、「救済史に基づく二年サイクル」のカリキュラムを併記することといたしました。これによって、年齢など対象となる子どもの違いや、それぞれの教会学校の選択によって、「救済史に基づく二年サイクル」のカリキュラムも選択することが可能になります。並行カリキュラムの聖書箇所についての具体的な説教展開例や分級例については、過去の教案誌の掲載箇所がある場合には、当該箇所を記載いたしますので、ぜひそちらをご参照ください。

いくつかの箇所は「カテキズムに基づく二年サイクル」と同じ聖書箇所を選んでいきます。学年別のクラス等で別のプログラムで礼拝を守ったり、分級を展開したりする場合にご利用いただく他、メインのカリキュラムでの説教作りの参考にもお役立てくださり、多面的重層的なメッセージの黙想に資することができればと願っています。

編集部では、更に様々な角度からカテキズムについて深めるカリキュラムや、救済史の多様な展開を網羅するカリキュラムを展開していこうと願っています。教案誌が号を重ねる毎に、聖書全体からより豊かなメッセージを紡ぎ出すことができるように編集に取り組んでいきますので、ぜひそれぞれの教会で、それぞれの現場に合わせて色々な利用を試みてくださり、成果や課題などを編集部までお寄せくださると幸いです。

編集部では、教案誌が手軽なツールとしてではなく、教会学校スタッフの研鑽と工夫を促すきっかけとなることを願っています。ぜひチャレンジいただき、その実りを分かち合ってくださいませよう、お願いいたします。

※救済史に基づく二年サイクルの教案は、本誌115～116ページに掲載されています。

「子どもと親のカテキズム」について (3)

牧田吉和 (山田教会牧師)

これまで2回にわたって「子どもと親のカテキズム」について解説してきました。

第1回目では、「子どもと親のカテキズム」の成立までの経緯と背景、さらには作成の実践的な狙いについて記させていただきました。

第2回目では、「子どもと親のカテキズム」を理解する上で鍵となる、このカテキズムの基本的特質を中心にして説明をさせていただきました。

今回の第3回目と最終回の第4回目では、このカテキズムの内容の要点と意図、他のカテキズムと比べた場合の特色などを明らかにしたいと思います。しかし、個々の問答の詳細な内容や聖書的な基礎づけは、出版予定のこのカテキズムの解説書に譲ることにします。

1. 「はじめに 神さまと共に歩む道」(問1～5) ～全体的構造の予備的提示～

冒頭の「はじめに」の部分はこのカテキズム全体に対する「序論」に当たる部分です。序論の部分は問1～5から成り立っていますが、ここではこのカテキズム全体の基本構造が示されています。それによって、カテキズムを学ぶに当たって全体的見通しを得ることができるように意図されています。基本構造は以下の通りです。

1. 「一番大切なこと」(問1) ～中核テーマの提示～

どのカテキズムにとっても第1問は非常に重要です。私たちのカテキズムは、「私たちにとって一番大切なことは何ですか」という問いで始まっています。これに対し、「神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです」というの

が答えです。この答えの持っている意味については前回の解説ですでに説明しましたので、繰り返しません。問1は、子どもたちに最初に覚えて欲しいことであり、このカテキズムの中核概念の提示でもあります。

2. 「信じて歩む道」(問2～3) ～第一部の内容の予備的提示～

問2～3は、序論に続いて問6～41で展開される「第一部 信じて歩む道」の予備的提示です。

問2では「神さまと共に歩むとは、どのようなことですか」という問いに対して、「まことの神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜び、神さまと人に仕えて歩むことです」と答えています。この答えは人間の本来のあり方を明らかにしています。内容的には、「ジュネーブ教会信仰問答」の問1「人生の目的は何ですか」に対する答え「神を知ることであります」、および「ウェストミンスター小教理問答」問1「人の主な目的は何ですか」に対する答え「神の栄光を現し、永遠に神を喜ぶことです」を踏まえています。しかし、両問答書とも問1の答は、垂直的な神との関係性に焦点が当てられています。一方、「子どもと親のカテキズム」では、第1問は、神との契約関係すなわち「神との交わりの中で神と共に歩む生活」を内容としています。それは静的な概念ではなく、「動的な概念」です。ただ垂直的な神との静的な関係性だけではなく、歴史の中で神と共に歩む方向性を打ち出しています。この契約的方向付けの中で、「神さまと人に仕えて歩む」という言葉も付け加えられています。

問3では「神さまと共に歩むために、罪人である私たちに必要なことは何ですか。」という

問い対して、「イエス・キリストを信じ、救われて、神さまの子どもとされることです」と答えています。この答えは、創造の状態から墮落した人間の罪と悲慘の現実を踏まえ、イエス・キリストを信じて救われ、神さまの子どもとして歩むべきことの大切さを示しています。

以上のように問2～3では、やがて問6～41で展開される「第一部 信じて歩む道」、すなわち「創造→墮落→救済→終末的完成までの“キリスト教信仰の内容”」が予備的に示されています。

3. 教会と共に歩む道（問4）～第二部の内容の予備的提示～

次の問4ですが、ここでは問42～55で展開される「第二部 教会と共に歩む道」の予備的提示です。「信じて歩む道」は「教会として歩む道」であることをあらかじめ明らかにし、教会論的展開を示唆しています。この教会論の部分は「ウェストミンスター小教理問答」では欠けている部分であり、この問答では創立20周年記念宣言などを踏まえて、比較的丁寧に扱っています。

4. 感謝しつつ歩む道（問5）～第三部の内容の予備的提示

問5では「神さまが私たちに求めておられることは何ですか」という問いに対して、「神さまを愛し、家族や友だちを愛し、神さまが造られたものを大切に、祈りつつ歩むことです」という答えです。この答えの「神さまを愛し、家族や友だちを愛し、神さまが造られたものを大切に」までが「十戒」論（「愛に生きる道」：問58～83）に関係し、続いて語られる「祈りつつ歩むことです」は「主の祈り」論（「祈りに生きる道」：問84～97）に関係しています。つまり、この部分では、救われて神さまの子どもとされた者たちの感謝の契約的応答として、「十戒」に従い、「主の祈り」を祈りつつ歩む生

活を扱っています。従って、問5は「十戒」論、「主の祈り」論を含む「第三部 感謝しつつ歩む道」の予備的提示です。

以上の序論的部分を全体としてまとめるならば、このカテキズムは、三位一体の神の存在を踏まえ、歴史全体において父が子を通して聖霊においてなさる働き、つまり神の創造と救いと完成への働き、神のその働きの中での教会とその生活、さらにはその教会生活を基盤とした「感謝しつつ歩む道」、すなわち終末的神の国に向けた「十戒に従った生活」と「主の祈りに導かれた祈りの生活」という叙述の基本構造をもっていることが示されています。

II. 第一部「信じて歩む道」（問6～25）の内容骨子

上記の「はじめに」（問1～5）の序論的部分における予備的提示に従い、問6～25は本論の第一部です。この第一部「信じて歩む道」では「キリスト教信仰の内容」が扱われます。

1. 道の光としての聖書（問6～7）

第一部の冒頭の問6～7では、「一 道の光としての聖書」において聖書論が扱われます。基本的には、「ウェストミンスター小教理問答」問3を下敷きにしています。

2. 三位一体の神さま（問8～12）

問8～12では、「二 三位一体の神さま」が扱われます。

問8では、聖書が啓示するまことの神について扱っています。問8は、「ウェストミンスター小教理問答」問4を参考にしていますが、そこでの神の定義に見られる「神は霊であられ……」という表現は日本のような宗教的環境では誤解される恐れがあります。このため、このカテキズムではまことの神さまについて「目には見えない霊なる方で、『あなた』と呼んで、お話しできる神さまです」というように聖書の

人格的神を表現し直す工夫がなされています。

さらに問9では聖書の示す神は唯一の、生きたまことの神であることを示しつつ、それとの対比で問10では日本の多神教的偶像の世界を念頭に置いて「偶像礼拝」の問題を扱っています。このカテキズムの特徴の一つは、この問10に見られるように、日本の宗教的状況を意識した問や答があちこちに散りばめられている点です。この点で、身近に見られる宗教的な事柄を手がかりにして子どもと親の対話が成り立つように工夫されています。

次に、問11～12では、生きたまことの神に關係して「三位一体の神さま」について扱っています。問11では三位一体の神について、「ウェストミンスター小教理問答」問6を下敷きにして、被造物にいっさい依存せず、ご自身でまったく満ちたり、永遠から永遠に存在しておられる三位一体の神（これを「存在的三位一体の神」と呼びます）を示しています。文章的には教理的用語を使用せざるを得ませんが、子どもたちにもなんとか理解できるように表現を工夫しています。問12では、同じく三位一体の神を扱っていますが、三位一体の神が私たちの救いのためにどのように歴史の中で働かれるのかという角度から、三位一体の神の働きを扱っています（これを「経綸的三位一体」と呼びます）。

三位一体の神について、問11と問12と並べて扱っているカテキズムは歴史的に見ても稀な例です。しかし、三位一体の神を抽象的にはではなく、具体的に理解できるためには問11と問12と並べ、重ね合わせて教えることが大切です。このカテキズムは「神さまと共に歩む」という契約的概念が中心的役割を果たしていることを考えてくださるならば、問11を孤立して扱わず、問12を一体的に扱うことの大切さをより適切に理解していただけるでしょう。子どもたちに教える場合にも、順序としては逆転するのですが、問12の三位一体の神の救いの働きを教えつつ、問11の三位一体の神の存在を

示すならば、キリスト教信仰における三位一体の神の重要性が理解しやすくなるはずです。

3. 父なる神さま（問13～16）

問12で提示された、歴史における三位一体の神の救いの働きの秩序にしたがって、「父なる神」、「子なる神」、「聖霊なる神」のそれぞれの枠組みの中で、それぞれの存在と働きが扱われることになります。

問13はまず「父なる神さま」について扱っています。この問への答えとして重要なポイントは、父なる神をイエス・キリストの父なる神であり、キリストにあって神の子どもたちの父でもあると表現している点です（参照「ハイデルベルグ信仰問答」問26）。ここにはキリスト教的「父なる神」論の中核があります。また、この表現によって父との関係における独り子としての特別な意味でのキリストの神の子性、そのキリストにあって人が神の子として回復され、「アッパ、父よ」と呼ぶに至る方向がすでに示されています。

問14～15では主として父の業に帰される「創造」（問14）と「摂理」（問15）が扱われます。問14では、「何もないところから天と地とそこにあるすべてのものを、きわめて良いものとして造られた」とあるように、創造の働きにおける「無から創造」と同時に、「良き創造」が強調されています。「無からの創造」は偶像礼拝との戦いにおいて重要な意味を持ち、「良き創造」は改革派信仰における有神的人生観・世界観に關係する「文化命令」の展開の基盤としての意味を持ちます。

問15の「摂理」では「ハイデルベルグ信仰問答」の問26～28の摂理論が反映しています。特にこのカテキズムでは問16で、日本の状況を考えて「運やうらないやあたり」の問題にも触れています。ここでも問13で語られた「キリストの父である神さま」が重要な役割を果たし、そこから「子どもである私たちを愛し、い

つも守ってくださいます」、さらには「すべてのことが 私たちの役に立つように導いてくださいます」というキリスト教的摂理論の慰めが語られることになります。

4. 人間 (問17～25)

問17～19では、神のかたちに似せて創造された人間の問題が扱われています。

問17では、神の姿に似せて創造された人間について語られ、問1に登場する「神の子どもとして神さまと共に歩む」ことが創造に基礎を置く、人間の存在の本来的・根本規定であることが明らかにされています。

問18では神さまの姿に創造された人間がどのように歩むべきなのかが扱われています。その答えとして、「神さまを礼拝し、神さまを喜び、家族や友達を愛し、神さまがお造りになったものを大切に、神さまにつかえて歩む」ことが語られています。神の似姿論が、対神、対人、対世界とのそれぞれの関係において語られています。特に「神さまがお造りになったものを大切に、神さまに仕えて歩みます」という対世界との関係における要素は、改革派信仰における有神的世界観・人生観の主張にとって重要な意味を持っています。

問19は、人類の父祖アダムとエバの最初の背きと罪の問題が扱われ、問20はその関連で罪とは何かについて明らかにしています。

問21では、特に対神関係における罪を犯した人間の罪性とその人間に対する神の怒りと裁きが語られています。

問22では墮落した人間の状態を記しています。このカテキズムの特色として、墮落した人間について対神関係、対人関係、対世界関係における倒錯した姿に言及している点が挙げられます。すなわち、「心が曲がって、偶像を拝むようになってしまいました。他の人を愛さないで、にくみ、いじめたりするようになってしまいました」(対神対人関係)だけではなく、「……

神さまがお造りになったものを大切にせず、自分勝手に用いるようになってしまいました」(対世界関係)と指摘する点です。ここには「神さまがお造りになったものを大切に、神さまに仕えて歩みます」という本来の対世界関係の倒錯した姿が示されています。これは創立宣言の第一点の展開上の問題点を意識して触れられています。

問23～25は罪の問題を扱いながら、人間の全的墮落と救いへの無能力、そのような罪人に対する神の救いのご計画に触れられています。この意味において、問25は、この後続く、神の救いの働きに関する布石としての役割を果たしています。

5. 子なる神さま (問26～33)

問26～33は、「子なる神さま」の枠組みの中で、キリストの二性一人格論(問26～28)、二状態論(問30)、三職論(問29, 31～33)が展開されています。

問26では、イエス・キリストが救い主としてまことの神であり、まことの人であることが扱われます。問27の「どうして救い主はまことの神でなければならないのですか」に対する答え、および問28の「どうして救い主はまことの人でなければならないのですか」の答えは、前者は「ハイデルベルク信仰問答」問16、後者は同問答の問17を下敷きにしています。

問29はイエス・キリストが預言者・祭司・王として救い主のつとめを果たされることが語られていますが、そのそれぞれの職務における働きに関しては問31(預言者)、問32(祭司)、問33(王)において扱われています。「ウェストミンスター小教理問答」も、このカテキズムの問30と同様に、「キリストの低い状態と高い状態」という二状態論と「預言者・祭司・王」という三職論に言及していますが、説明的な取り扱いにおいては三職論を先に扱い(問24～26)、続いて二状態論(問27～28)を扱ってい

ます。しかし、このカテキズムでは、二状態論(問30)を先に扱い、続いて三職論(問31~33)を扱う形になっています。このことには、救いの歴史をより前面に押し出した上で、救い主としての三職の働きを扱いたいという狙いがあります。このカテキズムは「神と共に歩む」という歴史性を強く打ち出しています。従って、キリストの救い主の働きに関しても低い状態から高い状態へという救いの歴史の展開を前面に打ち出して、その中で救い主の働きをとらえ、それと一体的に神の子たちのキリストにある歩みと結びつけたいという狙いがあります。この点は、問31~33におけるキリストの三職の取り扱い方にも現われています。そこでは高く上げられた状態の預言者、祭司、王としての職務がより強調されています。しかもそれぞれの答えの最後にその三職にそれぞれ対応して、「ですから、私たちは心をこめてキリストの御言葉をききます」、「ですから、私たちは、キリストの名によって心をこめてお祈りします」、「ですから、私たちは心をこめてキリストにしたがいます」と神の子どもたちの契約的応答性が強調され、最後に「したがいいます」という言葉によってキリストに結びあわされて、キリストと共に歩むという動的方向性が強調されています。

6. 聖霊なる神さま (問34~41)

「聖霊なる神さま」(問34~41)の枠の中で、イエス・キリストのよってなし遂げられた贖いの業の聖霊による適用の問題が扱われます(問34)。贖いの業の聖霊による適用の働きとして、「有効召命」(問35)、それによる祝福としての「義認」(問36)と「子とされること」(問36)と「聖とされること」(問37)が扱われています。

問36における「義認」については、言い方を少し変えて「無罪と宣言する」という表現になっています。少しでも子どもたちに理解できるようにという配慮がなされています。また、「ウェストミンスター小教理問答」では、「義認」

(問33)、「子とされること」(問34)、「聖化」(問35)はそれぞれ別個に扱われていますが、このカテキズムでは「義認」を語ることで、「子とされること」も扱っています。このことは、「子とされること」が軽視されていることを意味しません。それどころか、このカテキズムでは「子とされること」、つまり神の子論は重要な意味を持っています。この重要性の反映は、カテキズムの第一問「神さまの子どもとして、神と共に歩む」という表現にも現われています。救済における「子とされること」は、人間の創造論的根本規定である「神の子ども性」がイエス・キリストによって回復されることを意味します。したがって、「聖化」も「神さまの子どもとされた私たちは、私たちのうちに働く聖霊によって、ますますよくされて、神さまの御子イエスさまの姿に似せられていきます」(問37)というように、「神の子」性を軸に展開されています。従って、この「神の子ども性」は、終末的神の国において「イエスさまの栄光の体と同じ姿に変えられ……完成された御国で、完全な祝福を受け、永遠に神さまをほめたたえ、神さまを喜ぶ」(問41)ことで完成されます。つまり創造における根本的規定としての「神のこども性」が、墮落を経て、キリストにあって聖霊によって回復され、そして聖化の業を通して終末において完成に至るという一貫性の中で考えられていることがわかります。

このカテキズムは、「聖徒の堅忍」についても「聖化」に続いて問38で扱っています。この問答の特色は、「聖徒の堅忍」における神の側での保持の働きを、一つは天上における「キリストの執り成し」、もう一つは私たちの内での「聖霊の執り成し」という二つの側面から明らかにしている点です。聖徒の堅忍との関係でこの両方を同時に明確な形で直接的に語っている歴史的信仰問答は見当たらないように思います。この聖徒の堅忍の理解が終末に向けての神と共に歩む、神の子どもたちの歩みを強く励ま

してくれることになるでしょう。

問39～41では終末論が扱われています。問39は通常「一般的終末論」と呼ばれているキリストの再臨、最後の審判、新天新地と神の国の完成などが扱われています。

問40～41は、「個人的終末論」と呼ばれているもので、人間の死と死後の問題（問40）、さらには終末における体の復活の問題（問41）が扱われています。通常に取り扱いは、「ウェストミンスター小教理問答」の場合もそうですが、同問答37では死と死後の問題、問38では体の復活の問題が扱われ、一般的終末論が扱う新天新地や栄光の神の国のことには言及されていません。この問題は宗教改革以来の終末論の問題点であり、終末論が個人的終末論に傾く傾向にあります。この問題点を克服するためには、

人間の死と死後の問題もむしろ終末における神の国の完成という一般的終末論の光の下で取り扱う方が健全な理解が得られると考えられます。このため、このカテキズムではむしろ一般的終末論を先行的に扱い、視野を拡大した上で、その視野の下で人間の死と死後の問題、体の復活の問題も扱っています。一般的終末論を重視することは、有神論的人生観・世界観の確立という改革派信仰を考える上でもキー・ポイントになります。また、この一般的終末論の重要性の認識は、創立60周年記念宣言としての「終末の希望についての信仰の宣言」にも明確に告白されており、このカテキズムにはその宣言の告白が反映されています。

（以下次号に続く）



関キリスト教会のご紹介

関キリスト教会日曜学校教師会

岐阜県関市は、人口約9万人で、岐阜市に隣接、名古屋市から約40km の距離にあり、日本のほぼ真ん中に位置します。

関キリスト教会は、1891 年、濃尾震災をきっかけに、米国南長老教会のカミング宣教師によって福音宣教が開始されました。伝道123年を迎え、現住陪餐会員125名、礼拝出席は80名程度です。

日曜学校は、現在、教師9名、生徒は幼稚科から高校科までレギュラーメンバー約10名、行事メンバー約15名、それ以外に名簿に名前を載せて連絡を取ったり祈りに覚えている子どもたちが20名以上います。ほとんどが会員の子どもや孫たちと、その友だちです。たくさんの子もたちが託されていることを感謝しつつ、名簿以外の教会にまだ来たことのない地域の子もたちへの伝道の働きを視野に入れながら、日曜学校の奉仕を続けています。

毎主日の日曜学校は、9時から10時です。幼稚科と小学科は前半30分が礼拝、後半は分級に分かれて製作や学びをしています。中高科は1時間で分級を行います。毎月第2主日は幼稚科から中高科まで合同礼拝を行います。テキストは全学年本誌を使っています。

礼拝プログラム

開会祈祷(司会者)

賛美歌

主の祈り

十戒

こどもカテキズム

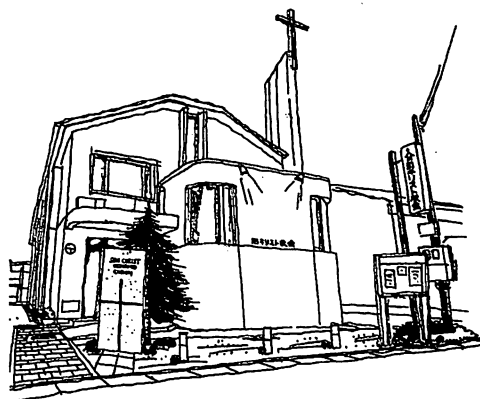
聖書

お話

暗唱聖句

献金・感謝の祈祷

報告



幼稚科では、ぬりえや工作をしています。子どもたちは赤ちゃんの頃から出席し、日々の成長に感謝しています。

小学科は、元気いっぱい的一年生の男子たちと、おしゃまな2年生のお姉さんがメインです。お祈りも聖書音読も暗唱も讃美もダンスも大得意のお姉さんと、まだ文字の読み書きもたどたどしい1年生男子たちとがいっしょに活動するために、若い教師が奮闘しています。

中高科は、中学生の出席がなく、高校生3人で学びを続けています。部活やテストで休むことも多々ありますが、教会行事や学校行事、それぞれの進路について、お互いに祈り合うことができています。

2014年の年間行事は以下のようなものでした。

・1月12日 カルタ取り大会

聖書カルタで遊びました。

2015年

おもちつき大会

2月22日(日)
午後1時半開始

関キリスト教会
ぶどうの木ハウス



参加費不要だよ

みんなきてね!

日本キリスト改革派
関キリスト教会
日曜学校

・2月23日 おもちつき大会

臼と杵でお餅をつきました。地域の方も参加してくださり、6升のお餅と豚汁でお腹いっぱい

日本キリスト改革派 関キリスト教会 日曜学校

遠足のお知らせ

日時: 5月10日(土)
午前10時~午後3時

場所: 県営各務原公園
各務原市鶴沼大安寺1-84

(雨天: ぶどうの木ハウス)

持物: お弁当・水筒・お菓子・数物・ゴミ袋
帽子・ハンカチ・ティッシュ



プログラム

10時	: 開教会集合
11時	: 公園到着 遊具で遊ぶ
12時30分	: お弁当
13時30分	: 宝探し
14時30分	: 公園出発
15時	: 教会解散

申し込み・問い合わせ: 関市美和町8 関キリスト教会 TEL 0575-22-0096

牧師 横谷英彰
教会学校校長 鈴木直康

☆小学校一年生以下の方は保護者の付き添いをお願いします。
☆遠足保険に入ります。5月4日までに申込書を出してください。

お名前

名前 _____ 男・女 _____ 年 _____ 月 _____ 日 _____

住所

住所 _____ TEL _____

い。子どもたちは小さなビニール袋で押し餅を作り、お土産に持って帰りました。

・4月6日 進級式

・4月20日 イースター

教会から美しくラッピングした卵のプレゼントをいただきました。

・5月10日 春の遠足

各務原公園で、遊具で遊んだり、宝探しをしたり。もらった宝物(百円均一のおもちゃ)で遊びました。シャボン玉とボール遊びが人気でした。

・6月22日 花の日訪問。

二つのグループホームで、歌と手遊び。「茶摘み」は子どもと手を合わせて遊ぶので、おじいさんやおばあさんに喜んでもらえました。



6月22日 花の日訪問

・7月26日 夏のお楽しみ会

バルーンアート。流しそうめん。プール。スイカ割り。

・9月14日 高齢者を覚える日

歌とプレゼント渡し。ジュニアサマーキャンプで覚えた「人間をとる漁師」(福音子ども讃美歌)を力強く歌って踊って、信仰の先輩達に大喜びしていただきました。

・12月14日 クリスマス祝会

礼拝、聖誕劇、サキちゃんの腹話術、ゲーム、にこにこインタビュー、歌。

礼拝の司会は小学科の子どもたちが、祝会の司会では中高科の高校生達が担当しました。

日本キリスト改宗派 関教会 日曜学校

夏のお楽しみ会

日時: 7月26日(土)
午前10時～午後4時

場所: 関教会
時: 坂野町民ふれあいプール
由: かわくさプラザ
持物: 参加費・プール道具
着: 浴衣・帽子・ハンカチ

プログラム

10時	: 受付開始
10時15分	: 開会礼拝
10時45分	: バルーンアート
12時	: 流しそうめん
13時	: プール
15時30分	: スイカ割り
16時	: 解散

費用	大人	小中学生	本館学児
昼食	100円	100円	100円
プール	500円	200円	無料

申し込み・問い合わせ: 関市美布町8 関キリスト教会 Tel. 0575-22-0096
牧師 橋谷英徳 教会学校校長 鈴木重康

☆申し込み締め切り: 7月20日(朝拝後CS教師会まで)
イベント保険に入ります。
CS教師会で打ち合わせをするので、必ず提出してください。

名前 _____ 男・女 _____ 年 月 日生
住所 _____ 区 _____



7月26日 夏のお楽しみ会 スイカ割り

マイクなしで会堂に朗々と響きわたる2年生の声に、初めて教会に来た子どもたちも背筋をぴんと伸ばして礼拝を守ることができました。

高校生のお兄さんとお姉さんが司会する祝会は、まず幼稚科と小学科の聖誕劇。幼稚科の子ども達が着ているのは、今高3のお姉さんが赤ちゃんの時から代々使われている「羊の着ぐるみ」です。関教会の契約の子どもたちは、ほぼ全員が羊でステージデビューし、天使、羊飼い、東の国の博士とランクアップしていきます。まれに幼子イエスさま役でデビューする子もいますが、次は羊です。女の子には年長さんか小学校1年生でマリアというソロ役があります。



7月26日 夏のお楽しみ会 バルーンアート



7月26日 夏のお楽しみ会 流しそうめん



12月14日 クリスマス祝会 聖誕劇

クリスマス祝会のご案内

日時：2014年12月14日(日)

午後1時30分より受付、2時開始、4時頃終了

場所：関キリスト教会 礼拝堂

内容：礼拝・劇・腹話術・ダンス・ゲーム・プレゼント

持物：献金 (いくらでもいいです)

病弱や病えて困っているアフリカの子どもたち (ガンビア国字学校
(国際児童救済機構) のために献けます。

☆お家の方もこいっしょに、ぜひご参加ください。



関市美和町8 関キリスト教会 TEL 0575-22-0096

牧師：橋谷英徳 教会学校校長：鈴木重康



アドベントカレンダーをつくらう

<よういするもの>

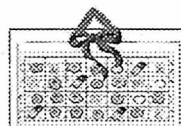
・キャンディ(24こ) ・あつまみ
・のり ・セロテープ
・ハビタ ・リボン

<つくりかた>

①あつまみに、カレンダー(このチラシのうら)をのりではる。

②ひづけのマスにセロテープをはる。③セロテープを「わ」にして、キャンディにつける。

④ひづけのマスに、1こずつキャンディをつける。⑤⑥⑦であなをあげ、リボンをむすぶ。



★アドベント 2014 カレンダー★

日	月	火	水	木	金	土
11/30 これあげる~	12/1 なにこれ?	2 「アドベント」って どういう意味なの?	3 「来る」って 意味だよ	4 「来る」って 意味だよ	5 きて!	6 はい! サンタクロース!
7 わかった! イエスキスね!	8 世いかーい! イエスキスが きます!	9 またまた しつもん! クリスマス って なんの日?	10 イエスキスの おたんじょうび!	11 せいかい! アドベントは イエスキスが うまれて 来るのを まつ期間なの	12 それとね イエスキスの 降臨も まっている んだよ	13 さいりん? 再び降る もういちど 来るって ことだよ
14 イエスキスがね また地上にもどって いらっしやるんだよー!	15 イエスキスって 十字架にかかって 死んだんでしょ?	16 うん! わたしたちの罪を つぐなうために 死んでくださった んだよー!	17 イエスキスはね なくなった 3日後に よみがえったの!	18 そのあと 天にのぼられたの!	19 わかった! またもどって くるのが 降臨ね!	20 それって いつなんだ? ??
21 うーんとね それはだれにも わからないの	22 でもそれは いざいとき なんだよ	23 そうだよー! だから おいしくするの!	24 そっか! はやく来ると いいな!	25 メリークリスマス!	神は、その独り子をお与えになったほどに 世を愛された。独り子を信じる者が一人も 滅びないで、永遠の命を得るためである。 (ヨハネ 3:16)	

劇は「おめでどう恵まれた方」という天使の歌から始まります。それから、マリアが「わが心は」(讃美歌98)を踊ります。場面変わって、羊と羊飼いが野宿する場面では「わたしはよい

羊飼い」のダンスをし、天使の御告げを聞いて「さあでかけよう」(All my lovingの替え歌)を踊りながら客席の間を一周します。今年は博士達の年齢の子どもがいなかったため、その場

面はカット。フィナーレの馬小屋のシーン（写真）では「この日がクリスマス」を全員で歌います。高校生もバックコーラスとして加わっています。

次はサキちゃんの腹話術。毎年クリスマスにしか会うことのできないサキちゃんに、子どもたちはわくわくです。その年の流行語大賞の言葉を必ず入れて、聖書の話も分かりやすく話してくれます。今年は、

サキちゃん「嘘ついても、いいじゃないの～」

腹話術師「だめよ、だめだめ」

をイントロに、ザアカイさんのお話をしてくれました。そして、最後に歌を歌ってくれるのですが、

サキちゃん「サキちゃん、第一がいい」

腹話術師「第一って、どんな讃美歌？」

と、サキちゃん歌い出したのは、『妖怪体操第一』でした。もちろん、ちゃんと『荒野の果てに』を歌ってくれたサキちゃんに、拍手喝采でした。

それから、会場の大人も子どもと一緒に、王様じゃんけんをしました。手ではなく、体全体を使ってじゃんけんをするので、みんなノリノリでした。

そして、にこにこインタビュー。インタビューの様子を iPhone を通じて前面のスクリーンに映し出します。インタビューアーもカメラマンもちろん高校生。大写真になる自分の姿に照れながらも元気に答えてくれた子どもたち。それを見て嬉しくなる大人達。会場が一体となりました。インタビューで、「ぬいぐるみがしゃべるということを今日始めて知りました！」と答えた子がいて、ぬいぐるみじゃなくて人形だよ、しゃべってないから腹話術だから、と心の中で突っ込みながらも、みんな思わず納得してしまいました。

次に行った「もうじゅうがり」のゲームは、

子どもたちだけの参加でしたが、これもスクリーンに映し出したので、後ろで見ていた大人達も大いに楽しめました。

盛り上がった子どもたちを着席させ、中高科の讃美「世界ではじめのクリスマス」（山内修）を聞いてもらいました。アカペラの歌声が流れると共に、会場がシンと静かになりました。

日曜学校校長が教会の案内と最後のお祈りをして、祝会を閉じました。

帰りには、ケーキと教会員手作りのプレゼント。このプレゼントは日曜学校からお願いしているものではなく、会員の方が自発的にボランティアで作ってくださるプレゼントで、毎年何がもらえるのか、子どもたちだけでなく日曜学校教師も楽しみにしています。

「おめでとう恵まれた方」「わたしはよい羊飼い」「この日がクリスマス」は関教会会員によるオリジナルソングです。今年カットされた「東の国の博士」の曲もあり、全てにダンスの振り付けがあります。

関教会には、様々な賜物を発揮する会員が多く、日曜学校もそういった方達に支えられていることを感謝しています。

翌週のクリスマス記念礼拝では、一人の高校生が信仰告白の恵みに与りました。午後からのクリスマス祝会では、高校生たちが堂々と司会を勤め、教会員に喜びと励ましを与えてくれました。

毎週の日曜学校を通して、また一年間の行事を通して、子どもたちと共に神様を讃美し、子どもたちがその賜物を教会の中で発揮する会員に育つよう、祈りつつ励んでいます。

会堂の隣の「ぶどうの木ハウス」には、チャーチカフェとキッズルームが、駐車場にはサッカーゴールがあり、地域の子子どもたちが大勢遊びに来てくれています。この子どもたちが日曜学校につながりますようにお祈りください。

絵本に心を耕されて

「少年の木 希望のものがたり」

(マイケル・フォアマン＝作・絵／柳田邦夫＝訳／岩崎書店)

望月鈴子（浜松伝道所会員）

主なる神さまの創造のお働きによって誕生したこの世界は、「見よ、それは極めて良かった。」という世界でした。「極めて良い」というのは、単に創られた自然が美しい、食べ物がおいしく豊かにある、創造された動物や人間たちが仲良く過ごしている、争いがないなどというだけのことでなく、何よりも創られた〈人〉が心を神さまに向けて神さまに信頼し、神さまとの関係が「極めて良かった」ことにより、神さまと〈人〉との関係が「平和」で穏やかであった、神さまの祝福をいただくに相応しい関係であったということだと思います。

しかし、「極めて良かった」世界は、今や大変な危機的状況にあるように思われます。様々な理由のもとに世界のあちこちで戦いが起こり、多くの人々の命が失われています。国々の土地、自然は破壊され、難民と言われる人々は増加しています。一つの重大な病気を克服したかと思えると、更にまた次のもっと手におえないような病気が現れてきます。地球温暖化が叫ばれて久しく、世界の各地で想定外の災害が発生し慌てふためきます。富める者と貧しい者との格差の拡大、人間の手でコントロールできないものを生み出して引き返そうとしない人間の欲望と驕り、いじめや虐待、異質な者を排除しようとする論理と力、ヘイトスピーチ、様々な差別等々……。特に飢餓にあえぐ子供たち、虐待を受ける子どもたちはいのちの危機にあります。世界中の多くの人々の心がささくれだっているのが今の状況であるのかもしれませんが。それは、この世界の主であるお方、創造主



を忘れたために、人が生きるこの世の「平和」が覆い隠されてしまっている姿ということではないかと思います。世界に神さまの警告の声が響いているはずなのに、その声を聞こうとしない人間の罪の愚かしさが浮き彫りになっているように思えます。

絵本「少年の木 希望のものがたり」をご紹介します。この絵本の作者マイケル・フォアマン、幼少期は第二次世界大戦のさなかでした。イギリスを代表する絵本作家となり、いろいろなテーマの本をたくさん書いてきたが、一貫して変わらない大事なテーマは、「平和」だということです。

「少年の木」、いまでも戦争が続く地域に生きるひとりの少年の物語。少年が住み、遊んでいた街は破壊され、がれきの山になり、廃墟のようになりました。少年は、夜どうし降った雨のあがったある朝、がれきの山の片すみに、ちいさな緑の葉が土から顔を出して、太陽の光に向かって伸びはじめているのをみつけました。少年はそれが一生懸命生きようとしていることが

わかったので、がれきを取り除き、日よけを作り、水をやり、大切に丁寧に育てました。それはブドウの木でした。やがてそれは張り巡らされている鉄条網を覆い、大きく日陰を作るほどに成長して、たくさんの蝶や小鳥たちが飛び交い友だちがやってきて、そこは子どもたちの緑の遊園地になったのです。ところが、鉄条網の向こうの兵士がブドウの木を引き抜き、溝に放り込んでしまいました。少年は悲しくて悲しくて胸がはりさけそうでした。

遅い春がめぐってきて長雨の続く季節に入ったある朝、鉄条網の向こうの溝に小さな緑の葉がたくさん出ているのを少年は見つけました。少女が世話をしていました。少年の側にも緑の葉が芽生えてきました。「みんな来て！見てごらんよ！ぼくのブドウの木が生き返ったんだ！」少年はさげびます。鉄条網のこちら側と向こう側から伸びてきたブドウの木は手を結び、葉を茂らせ、実を結び鉄条網を見えなくしてしまいました。緑の木々はふたたび小鳥や蝶たちの楽しい我が家になりました。兵隊たちもどってきてもだいじょうぶ、少年はそう思いました。ブドウの木たちは、いまや深く根を張り、種を広くまきちらしているのですもの《いつの日か 鉄条網なんか 永久に なくなり、だれでも 自由に あの丘に 登れるようになる日が きっと来る。少年は そう信じるのです》。

鉄条網は、この世界に満ちている紛争、戦争、差別、偏見など石のように頑なな人間の心、隔ての中垣でしょうか。そして、がれきの中に芽生えたちいさな緑の葉を丁寧に大切に育てる少年と少女の柔らかな心、ホッとするようなやさしさ、一途さは、その隔てや敵意、偏見などを

取り除く鍵と言えるのかもしれません。読む者に〈希望〉の広がりを感じさせます。絵本「少年の木」の副題は～希望のものがたり～。

2014年度のノーベル平和賞は「1人の子供、1人の教師、1冊の本、そして1本のペンが、世界を変えられる」と訴え続けたパキスタンの17歳の少女マララ・ユスフザイさんに授与されました。また全国の絵本店員がお薦めする「第7回 MOE 絵本屋さん大賞」の第1位に、絵本「へいわってすてきだね」が選ばれました。この絵本は、2013年沖縄戦全戦没者追悼式で読み上げられた小学2年生の少年の詩に、絵本作家の長谷川義史さんが絵をつけた本です《やさしいところがにじになる。へいわっていいね。へいわってうれしいね。みんなのころから、へいわがうまれるんだね》。子どもたちの心の畑が硬くならないうちに、いろいろな教えをスポンジのように吸い込む力のある柔らかなうちに、イエス・キリストにある本当の平和を繰り返し語り、教えることがどんなに大切であるかを深く深く感じています。

日曜学校は子どもたちの柔らかな心に、「キリストの平和」の幸いを繰り返し語り、教えることが出来る大切な場所。無牧、子どもがいない、来ない等で、日曜学校を休止中の教会・伝道所もあるようですが、日曜学校の働きをやめてはいけないと思っています。いつ子どもが来ても日曜学校はできますよと、スタッフ・奉仕者を備えておく、「日曜学校しています」の案内チラシを配り続ける、それが教会として大切なことだと思っています。この姿勢はひとえに、終末・主の再臨を待ち望む姿勢そのものであると考えています。教会全体で、日曜学校のために祈り続けましょう。（望月鈴子）

全生活にわたる感謝～「十戒」を生きる (1)

吉田 隆 (甲子園教会牧師・神戸改革派神学校校長)

1. キリスト者と「善き生活」 はじめに

「一つ善き生活とは何ぞ。我らは律法主義者にあらず、また律法廃棄論者にあらず。キリストによる贖罪に基きて聖霊なる神の我らの内に恵みたもう聖化は信仰者の必ず熱心に祈りて求むべきものなり。完全聖化は地上においては与えられず、我らは日ごとに己の罪の赦しを求め、また己に罪を犯す者の罪を赦さざるべからずといえども、聖霊に感じて互いに兄弟の罪を戒むるはキリストにある者の為すべき事なり。宗教改革運動の主潮流たる改革派教会最大の指導者ジョン・カルヴィンの働きしジュネーヴの教会が信仰生活の訓練に関して模範的実績を示せしは周知の事実なりとす」。

少々長くなりましたが、私たちの『日本基督教改革派創立宣言』より引用しました（旧字体は読みやすく改めた）。「善き生活」についての改革派教会の神学的・実践的立場を簡潔に言い表した優れた告白です。とりわけ、「我らは律法主義者にあらず、また律法廃棄論者にあらず」という冒頭の言葉は重要で、これを正しく理解することが全聖書66巻を「信仰と生活の唯一の基準」として持つためのカギとなります。

今年度の成人科では、「善き生活」ということをテーマに、私たちがキリスト者として今日の社会で神の律法、とりわけ「十戒」を生きるとはどういうことなのかを学んでまいりたいと思います。この学びを通して、私たちが、今の世から逃避するのもも妥協するのもなく、「むしろ、心を新たにしてお自分を立てていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえる

ように」になって（ロマ12:2）、力強くかつ晴れやかに生きて行くことができるようになれば、と願っています。

命の道

創世1,2章、ハイデルベルク問6、詩編1:1～3、申命記30:16、詩編19:8～11、ローマ7:12～14。

万物は、混沌とした闇から神の御命令によって命にあふれた秩序ある世界へと創造されました。同様に、神のかたちに創造された人間もまた、神の戒めによって初めて秩序ある生活を営むことができるようにされたのです。それはとりもなおさず、人が神との幸いな命の交わりの中で生きるための神の御配慮なのでした。

ですから、神の御意志の啓示である律法は、本来、霊的なものであって、聖であり善いものです。またそれは、その本質において、人を創造された御父の愛の言葉であり、人を真に生かす命の道だということをまず理解しましょう。

愛の律法

申命記6:5、サムエル上15:22、詩編119:97、ローマ13:8～10、ウ大99:2、マタイ22:37～40。

律法が神の愛の表明であるならば、従う者もまた、全身全霊をもって主を愛することが求められます。主に聞き従うことはいけにえにまさる、と言われるのはそのためです。実際、旧約の信仰者たちは、しばしばこの律法への愛をあらわしました。神の御旨を尊ぶことと神を愛することは、一つのことだからです。

神を愛することはまた、隣人を愛することで

もあります。なぜなら、神は隣人の主でもあられ、私たちと同様、隣人も神によって創られ、神のかたちを宿しているからです。

したがって律法全体は、主イエス御自身がおまとめになったように、次の二つの愛にまとめられ、これら二つは切り離すことができません。

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。」

「隣人を自分のように愛しなさい。」

律法の完成者キリスト

マタイ 5:17、ローマ 10:4、ガラテヤ 3:13、2:20, 21。

「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである」。

主イエス・キリストこそ、律法の完成者であり目標です。なぜなら、キリストは神の義と愛の完全な現われだからです。

主イエスは、地上での御生涯を通して、律法の真の意味を明らかにされたばかりか、人として果たすべき律法のすべての要求を完全に実現されました。それは、私たちの罪のゆえに呪いとなってしまった律法から私たちを解放するために、罪のない方が呪いとなるためでした。こうして主は、十字架上で死によって私たちを贖い、律法によらない命の道を開いてくださったのです。

したがって、私たちはもはや自分自身のものではなく、キリストのものです。私たちが神の御心になんて生きる道は、キリストに結び合わされる以外にありません。

自由の律法

コリント二 5:17、エフェソ 2:10、ウ告白 9:4、ローマ 12:1, 2、ウ告白 15:6、16:2, 3、ヤコブ 2:26、ガラテヤ 5:6、ハイデルベルク問 86、60周年記念宣言、マタイ 5:16。

私たちを律法の呪いから解放してくださった

キリストは、御自身の霊によって、私たちを生まれ変わらせてもくださいます。キリストに結び合わされた私たちは、善い業をするように命の御霊によって新しく創造された者なのです。

ですから私たちは、強いられてではなく、御国の子らとして、今や全く自由に神に仕える者とされています。私たちは、ただ主に対する感謝の思いから、御霊によって何が神に喜ばれることかをわきまえ知り、自分のすべてを自ら捧げて主を愛します。

行いを伴わない信仰は、死んだも同然です。私たちは、与えられた神の恵みをいっそうかきたて、主の律法に従う生活によって福音の告白を飾り、隣人もキリストにある命の喜びへと招くのです。それは、私たちを通して御国の栄光が現され、ただ天の父の御名があがめられるためです。

十字架の道

マタイ 16:24、ウ告白 15:2, 6、ガラテヤ 4:19、ヨハネー 1:9、4:12、ガラテヤ 5:14、フィリピ 2:1～9。

キリスト者の生活は、しかし、十字架の道です。私たちは世にある間、自分自身の罪と弱さ、世の誘惑や悪と戦わなければなりません。私たちは、主の憐れみを祈りつつ、ますます自分に死んで、キリストに生きることを学ぶのです。キリストが内に形づくられるまで、キリスト者の一生は悔い改めの生涯です。私たちは、神の御前に自分の罪を認めて告白し赦しを乞うと同時に、すべての罪から離れて神に立ち返り、神と共に歩むことを決意しなければなりません。私たちはまた、自分の罪で傷つけた隣人に対しても心からの赦しを乞い、悔い改めを明らかにする必要があります。そうして互いに赦し合い受け入れ合うことによって、悔い改めは真実なものとなります。神への愛は、隣人愛によって全うされるからです。

このようにして私たちが打ち砕かれて行くこ

とが、イエスの命を帯びることであり、とりもなおさず福音を帯びることなのです。私たちは、キリストの徹底的なへりくだりに倣うことを通して、キリストに似る者となりその栄光にあずかります。

天を目指して

ハイデルベルク問 114、60 周年記念宣言、マタイ 6:19、フィリピ 3:14、1:6、ハイデルベルク問 115、ヨハネ 3:2。

この世においては、最も聖なる業も罪を免れません。にもかかわらず、どのような奉仕の業も無駄にはならず、栄光の御国において永遠の意味を持ちます。私たちは、この世にあらながら、神の国を現実に生き始めているからです。私たちは、この世の富や名誉や幸福を求めることなく、朽ちることのない天上の命を慕い求めます。それは、キリストとともにある永遠の命です。地上の生活のすべては、この目標に向かう中においてのみ、正しく意味づけられ整えられるのです。

私たちの内に始められた善い業は、やがて、この生涯の後に、完成という目標に到達します。私たちは、主イエスに全く似た者へときよめられ、御心を完全に行う者として、栄光の御国へと迎え入れられるのです。

2. 感謝の生活の基準（十戒序文）

十戒序文

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隸の家から導き出した神である」。

キリスト教会と十戒

キリスト教会は昔から、善き業の基準としての「十戒」を重んじてきました。それは、何よりもまず、主イエス・キリスト御自身が十戒を前提とし（マタイ 19:18, 19）、むしろその霊的本質を明らかにされたからであり（マタイ

5:21, 27）、パウロなどもそれを継承したからです（ローマ 7:7、13:9）。もちろん、キリスト者の生活ということから言えば他にもたくさん教えがありますが、やはり十の戒めにまとめられている点が、「使徒信条」や「主の祈り」と同様、覚える上でも教える上でも便利であったという実際的理由もあるのでしょう。

十戒の区分

「十戒」（申命 4:13、10:4）という言葉は、文字通りには「十の言葉」という意味で、そこから Decalogue（デカログ）という呼び名が生まれました。シナイ山で神によって告げられた数ある戒めの中で、ユダヤ教とキリスト教は出エジプト記 20 章（2～17 節）と申命記 5 章（6～21 節）にある戒めを伝統的に「十戒」と呼んできました。とはいえ、もともとそれぞれの戒めに番号が振られていたわけでもなく、二枚の石の板にどのように刻まれていたのかもわかりません。そこから、内容はともかく、十戒の数え方や構造の理解にいくつかのバラエティーが生じるようになりました。

戒めの数え方は大きく二つの伝統が、キリスト教の初期から存在してきました。一つは、ローマ・カトリック教会などで伝統的に受け継がれてきた数え方で、私たちの数え方で言うところの第一戒と第二戒とを合わせて第一戒とし、以下順次繰り下がって最後の第十戒を二つに分けて数を十にするというやり方です。これは、アウグスティヌス以来の伝統で、ルターとルター派教会でも採用されました。もう一つの数え方は、イエス時代のユダヤ教に端を発し、主としてギリシャ教父やヒエロニムスなどによって受け継がれ、カルヴァンや改革派・英国国教会などで採用された数え方です（ただし多くの場合、序文は第一戒に含まれます）。

十戒は神に関する戒めと隣人に関する戒めからなっており、前者の数え方では三つと七つという完全数によって分けられ、後者では四つと

六つに分けられます。いずれの場合でも、内容そのものには変わりはありません。

十戒の普遍性

ウ告白 19:2～5、エフェソ 4:14、ハイデルベルク問 91。

「1. キリスト者と『善き生活』で学んだとおり、神の律法である十戒は、永遠に変わることのない神の御意思の表明です。ですからそれは、時代によって変わるような人間の教えや思いつきとは異なり、その本質において、いつの時代にもあてはまる恒久的・普遍的な規範なのです。それはまた、造り主なる神の戒めですから、私たち人間のあるべき姿を根本的に規定し方向付ける言葉でもあります。諸々のルールを守ることで社会の営みがスムーズに行くように、創造者のお定めになったルールに従うことが人間にとって最も安全かつ幸いな道なのです。

十戒の性質

ウ大 99、ヨハネー 4:7, 8、マタイ 5:21～47。

十の戒めは、一人の神の御心であるがゆえに、互いに関連し合い、有機的に結びついています。つまり、一つの戒めは全体に、全体は一つに関わっているのです。神を愛することなく隣人を真に愛することはできず、隣人を愛さずに神を真に愛することもできません。

各々の戒めには積極的な面と消極的な面の双方があり、禁じられている場合は反対のことが命じられており、命じられている場合には反対の罪が禁じられています。しかし、禁止にはより恐れおののき、命令にはより従順であることが求められていることも真実です。

私たちは、かつて始祖が犯した過ちを繰り返す事のないよう、戒めに表された神の愛の御旨を深く求め、これに謙遜に従う必要があります。何より主イエスの御教えと御生涯が、律法の完全な意味であり模範であることを心に留め

ましょう。

感謝の生活の基準～序文の意義

ウ大 97、ハイデルベルク問 86、ウ大 101、ヨハネー 4:10、申命記 27:9, 10、ヨハネ 20:28、ジュネーブ 129、ハイデルベルク問 91、ウ告白 16:1, 2、ウ大 91、ウ小 2:39、I ペト 2:9, 10。

十戒は、すべての人に対する普遍的基準であると同時に、とりわけ神によって救い出された人々の感謝の生活の基準であり指針です。このことをよく表しているのが、十戒の序文です。「エジプトの国、奴隷の家」とは、この世の力や罪の力にがんじがらめになった人間の状態、とすることができるとでしょう。出エジプトに現された神の救いの御業は、やがて十字架上で成し遂げられる主イエス・キリストの救いの予型です。罪の奴隷状態からの解放とは、まさに私たちに実現した神の救いの出来事なのです。

そうして、万物の主・全能の神であるお方が、私たちの主また神となりました。これはただ一方的な驚くべき神の恵み・神の愛のなせる業です。私たちはこの神の御業を深く心に刻みつつ、私たちの主となってくださった方の御意思を一言もおろそかにしないようにと励むのです。

神と私たちとのこのような関係を、恵みの契約と呼ぶ事ができます。私たちが行うより先に、神の真実な恵みがこの関係を支えているからです。それ故、十戒のすべての戒めは、この神の恵みという視点から理解されなければならないでしょう。

全生活にわたる感謝

ルカ 17:11～19、テサロニケー 5:18、エフェソ 5:20、ジュネーブ 128～130、ハイデルベルク 2, 86, 90、ウ告白 16:2、ウ大 97、ヨハネー 3:16、ルカ 7:47、ウ告白 20:1, 2、テサロニケー 5:18、コロサイ 3:16、フィリピ 4:6、

エフェソ 5:4。

「ただ恩恵のみ」の救いに対する最もふさわしい応答は、「ただ感謝のみ」です。神がお求めになるのは、私たちが救われるために何かをすることではありません。むしろ、その救いを感謝し大喜びする心なのです。

神の救いの恵みに、いつでも感謝できることはキリスト者の特権です。墮落以前の人間も、自ら進んで御心に従っていたかもしれません。けれども、神がどれほど忍耐強くどれほど深く私たちを愛して赦すお方であるかは知りませんでした。

神の無償の救い・キリストの赦しの愛を知った私たちは、誰から強制されることもなく、恐れることもなく、御父への感謝に満ちた心に促されて、全く自由に自発的に応答するのです。多く赦された者は、多く愛するからです。

主にある感謝は、私たちの思い煩いや悪い思いに打ち勝つ力ともなります。御自身の体と魂を捧げて私たちをお救いくださった主に、全身

全霊をお捧げして全生活にわたる感謝を現すことが、キリスト者の生きる力なのです。

私たちの感謝・わたしの感謝

ロマ 14:1～10, 17、エフェソ 4:16。

神の救いの恵みが一人一人にふさわしく与えられるように、感謝のかたちもまた人によって多様です。ですから、私たちは、互いの奉仕や生活の優劣を比較したり、ましてそれらを侮るべきではありません。神の国は平和と喜びの国です。皆の感謝を寄せ集め、互いに支え合い補い合って、愛の内に成長して行くことが、キリストの教会の建て方なのです。

感謝の生活の基準としての十戒は、ですから、贖われた神の民の道標であると同時に、その御旨は一人一人に告げられてもいるのです。私たちは、世にある間、自分自身に与えられた状況の中で、与えられた賜物をもって、具体的な御教えを一つ一つ真剣にしかし喜ばしい希望をもって生き抜いて行くのです。



副読本のご案内

『主は羊飼―中高生のための教理入門―』

価 格 800円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師)

ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

① 人生の目的——神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に通い始められた方と聖書の学びをしていたことです。そのときたまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました「わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのとでは、やはり生きかたが大きくことになってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬间にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを棒にふることもあります。熱烈な恋愛もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きていくことができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手になるジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身の何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに14年目に入り、第57号まで発行して参りました。中部中会ではほとんどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ70教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

このお願いは、中部中会日曜学校委員会からの最後のお願いとなります。それは「自由募金のお願い」の終りではありません。大会教育委員会発行となる次号からも、文面を変えて「自由募金のお願い」は続きます。ご購入と自由募金という、子どもたちの信仰教育への志によって、この後も教案誌を支えてくださいますよう、お願い申し上げます。

目標金額

30万円／年

送 金 先

郵便振替 伊藤治郎

00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書默想・説教展開例・分級展開例

テキスト

マタイによる福音書 28章1～10節

子どもと親のカテキズム 問30

参照教理問答

ウェストミンスター小教理問答 問28

〈キリスト復活の証人たち〉

イースター記念礼拝は、最も古い時代のキリスト教礼拝を再現するものです。初代のキリスト教会は、主イエスの復活を記念する礼拝を捧げていたと考えられます。最初の福音宣教が、キリスト復活の使信を語り伝えることにあったからです。聖霊降臨と共に主の復活の証人として召された使徒ペトロは、キリスト復活を証言するため、主イエスの言と業、ご生涯全体を物語りました。使徒2章22節以下「イスラエルの人たち、これから話すことを聞いてください。ナザレの人イエスこそ、神から遣わされた方です。神は、イエスを通してあなたがたの間で行われた奇跡と、不思議な業と、しるしとによって、そのことをあなたがたに証明なさいました。(略) このイエスを、神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。(略) 神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です」。同3章13節以下「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、わたしたちの先祖の神は、その僕イエスに栄光をお与えになりました。ところが、あなたがたはこのイエスを引き渡し、ピラトが釈放しようと決めていたのに、その面前でこの方を拒みしました。聖なる正しい方を拒んで、人殺しの男を赦すように要求したのです。あなたがたは命への導き手である方を殺してしまいましたが、神はこの方を死者の中から復活させてくださいました。私たちはこのことの証人です」。同4章10節以下「あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人、イエス・キリ

ストの名によるものです。(略)他の誰によっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです」。同10章36節以下「神がイエス・キリストによって、——この方こそ、すべての人の主です——平和を告げ知らせて、イスラエルの子らに送ってくださった御言葉を、あなたがたはご存じでしょう。ヨハネが洗礼を宣べ伝えた後に、ガリラヤから始まってユダヤ全土に起きた出来事です。つまり、ナザレのイエスのことです。神は、聖霊と力によってこの方を油注がれた者となさいました。イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをすべていやされたのですが、それは、神が御一緒だったからです。わたしたちは、イエスがユダヤ人の住む地方、特にエルサレムでなさったことすべての証人です。人々はイエスを木にかけて殺してしまいましたが、神はこのイエスを三日目に復活させ、人々の前に現してくださいました」。

復活の主イエスに出会って迫害者から伝道者へ転身した使徒パウロも、異口同音に語りました。使徒13章27節以下「エルサレムに住む人々やその指導者たちは、イエスを認めず、また安息日ごとに読まれる預言者の言葉を理解せず、イエスを罪に定めることによって、その言葉を実現させたのです。そして、死に当たる理由は何も見出せなかったのに、イエスを死刑にするようにピラトに求めました。こうして、イエスについて書かれていることがすべて実現した後、人々はイエスを木から降ろし、墓に葬りました。しかし、神はイエスを死者の中から復活させてくださったのです。このイエスは、御自分と一緒にガリラヤからエルサレムに上った人々に、幾日にもわたって姿を現わされました。その人たちは今、民に対してイエスの証人になっています」。

ペトロが言う「わたしたち」とは、パウロによ

れば十二使徒団に限られず、「イエスと一緒にガリラヤからエルサレムに上った人々」であって、イエス一行と行動をともにした女性たちも復活の証人に含まれていたと考えられます。

〈マタイ福音書が伝える復活証言〉

使徒ペトロの説教を、通訳のマルコが記録して最初の福音書を書いたあと、これを下敷きに、他のさまざまな伝承と共に編集して書かれたのがマタイ福音書です。この福音書が伝える復活証言に、ペトロが語らなかった伝承があるとすれば、それはペトロ以外の誰かによるものでしょう。

復活の証人を名指しするマタイ28章1節の「マグダラのマリアともう一人のマリア」という謎めいた記述は、読者を当然「もう一人のマリア」に注目させます。このマリアは、マグダラのマリアと共に、イエス埋葬の目撃者でもありました（同27章61節）。イエスの十字架の死を見届けた人びとについては、同27章55節以下でこう伝えます。「そこでは、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母がいた」。もう一人のマリアが「ヤコブとヨセフの母マリア」と言い換えられているととるのが自然でしょう。すると同13章55節の「この人（イエス）は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか」という証言により、「イエスの母マリア」であることは間違いないでしょう。同1章16節「このマリアからメシア（キリスト）と呼ばれるイエスがお生まれになった」のです。東方の博士（占星術の学者）たちが同2章11節「ひれ伏して幼子（イエス）を拝み、黄金・乳香・没薬を贈り物として献げた」のを目撃したのが母マリア、ガリラヤ伝道を開始した息子イエスを彼の弟妹とともに訪問した（同12章46節）のも母マリアでした。彼女がイエスの死と埋葬と復活の証人にもなったことは、御子イエスの父なる神のご配剤としか言いようがありません。イエスの母だからこそ証言できる復活の伝承を、マタイ福音書は私たちに伝えているのです。

同28章2節「主の天使が天から降って近寄る」

光景は、イエスの母マリアにとっては初めてではありません（同1章18節）。幼少から聞いてきた息子イエスの『おはよう＝平安あれ＝シャローム』（同28章9節）を聞き違わずありません。その意味で、母マリアの復活証言は、その真実性と現実味において際立っています。

〈子どもたちに伝える復活証言〉

日曜学校の生徒らにキリスト復活の証言を伝えることは、決定的に重要です。それはキリスト教会の宣教内容の根幹であると共に、信仰告白の不可欠な要素だからです。ローマ10章9節以下「口で『イエスは主である』と公に言い表し、心で『神がイエスを死者の中から復活させられた』と信じるなら、あなたは救われるからです。実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです」。

日曜学校の教師が、キリスト復活の証人となるためには、平素の祈りの生活において、復活昇天された受肉者にして受難者イエスとの霊的な交わりが、真実性と現実味のあるものとなっているかどうかにかかっています。確かに主は生きておられ、共に祈ってください、それを父の御心に適って成就してくださいます。

ウェストミンスター大教理52「キリストは、その復活において、次のようにして高く挙げられました。すなわち、キリストは、死において朽ち果てず、彼が死に支配されたままにいることはあり得ませんでした。また、彼が受難したまさにその体が、その本質的な属性を持ちつつ、この世の命に属する死滅性と他の共通の弱さを持たずに、彼の魂に真に結合されて、御自身の力により、三日目に死者の中から甦られました。それによってキリストは、御自分が神の御子であること、神の義を満足させたこと、死と死の力を持つ者に勝利したこと、生者と死者の主であること、を宣言されたのです。これらすべてをキリストは、公人、すなわち彼の教会の頭として、彼らを義とし、恵みによって生かし、もろもろの敵から守るため、また、終わりの日に彼らが死者の中から復活することを彼らに確約するたけになさいました」。

（二宮 創）

テキスト

マタイによる福音書 28章1～10節

子どもと親のカテキズム 問30

〔単元のねらい〕

日曜学校の生徒らに、キリスト復活の証言を語り伝えましょう。マタイ福音書に基づいて、母マリアの復活証言の真実性と現実味を伝えることができるよう、祈り備えましょう。教師自身の祈りの生活、復活の主イエスとの霊的な交わりにおける真実性と現実味とともに証しすることができたら幸いです。この展開例は、児童説教の見本ではありません。同労諸兄弟のために説教の素材を提供するものです。

神の子の復活の証人

マタイ福音書28章1節に「安息日が終わって」とあります。安息日とは、天地万物を創造された神が、その御業を完成された第七の日に、ご自分の業を離れて安息なさり、その日を祝福して聖別された土曜日のことです。この安息日が暮れて、「週の初めの日の明け方（日曜日の早朝）、マグダラのマリアともう一人のマリアが、墓を見に行った」と続きます。この二人のマリアは、特別な絆に結ばれていました。

同27章57節以下「（安息日の前日）夕方になると、アリマタヤ出身の金持ちでヨセフという人が来た。この人もイエスの弟子であった。この人がピラトのところに行って、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出た。そこでピラトは、渡すようにと命じた。ヨセフはイエスの遺体を受け取ると、きれいな亜麻布に包み、岩に掘った自分の新しい墓の中に納め、墓の入り口には大きな石を転がしておいて立ち去った。マグダラのマリアともう一人のマリアとはそこに残り、墓の方を向いて座っていた」。二人のマリアは、主イエスの死と埋葬の目撃者でもありました。「もう一人のマリア」とは、いったい誰のことでしょうか。

同27章55節以下「大勢の女性たちが遠くから（イエスの十字架の死を）見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。その中には、マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベダイの子らの母がいた」。ここでは「もう一人のマリア」

は「ヤコブとヨセフの母マリア」と呼ばれます。ナザレの村人たちからよく知られていた女性です。同13章55節「この人（イエス）は大工の息子ではないか。母親はマリアといい、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか」と言われるところから、「もう一人のマリア」とは「イエスの母マリア」のことだと分かります。

彼女は息子イエスのお働きを、最初から理解し協力した人ではありませんでした。ある時から、恐らくイエスさまが伝道旅行中に一時里帰りした頃から、マグダラのマリアやゼベダイの子らの母と共に、イエス一行に同行して、奉仕する人になったと思われます。イエスの母マリアは、ガリラヤ伝道に奉仕し、エルサレムへの旅に同行しました。主イエスの弟子となって、御言葉を聴き、御業を仰いだのです。力ある御言葉によって、目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。5つのパンと2匹の魚で五千人が養われた。7つのパンと小さな魚で四千人が養われた。人間業ではなく神の業を見、人間の言葉ではなく神の言葉を聞いて、母マリアは心に刻みました。旅の先々でイエスの身の回りの世話をし、毎朝「シャーローム（おはよう）」と挨拶してくれる息子に、母としての喜びを味わっていたことでしょう。その喜びと共に、彼女には不安もありました。

同16章21節「イエスは、御自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている」。この受難予告を二度・三度と弟子たちから漏れ聞いたであろう母マリアの不安は、現実となってしまいます。エルサレムへ入城し、神殿で説教し、弟子たちと最後の晚餐を囲んだ主イエスは、金曜日の明け方、まだ薄暗いうちに逮捕されてしまいます。総督ピラトの裁判によって、罪なき神の子は罪深い人間たちの手に引き渡されてしまうのです。十字架を担がされ、ゴルゴタの丘で釘付けにされたのが朝9時。夜のような闇に包まれたのが昼12時。息を引き取られたのが午後3時。安息日の始まる日没前に、ご遺体は布に巻かれただけで、両手・両足・脇腹・背中は傷だらけのまま、岩穴の墓に葬られ、大きな石の蓋が閉められました。母マリアは為す術もなく、呆然と見守るほかありませんでした。自分の息子が目の前で殺され、他人の手によって葬られた。あまりの出来事を受け留めることなど、できたはずはありません。金曜の夜から土曜の夜まで、重苦しい安息日を過ごす中で、彼女は悶々と考えたに違いありません。

同28章1節以下「安息日が終わって、週の初めの日の明け方に、マグダラのマリアと、もう一人のマリアが墓を見に行った。すると、大きな地震が起こった。主の天使が天から降って近寄り、石をわきへ転がし、その上に座ったのである。(略)天使は婦人たちに言った。『恐れることはない。十字架につけられたイエスを捜しているのだろうが、あの方はここにはおられない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。「あの方は死者の中から復活された。そして、あなた方より先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる……』』」。

二人のマリアは、恐れつつも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走り出します。驚くべき御業を成し遂げられた神への恐れを抱きながら、イエスの御言葉がアーメン！本当にそのとおり！実現した喜びにあふれて走るのです。走りながら、母マリアはきっと思い起こしたでしょう。かつて彼女に「あなたは男の子を産む、その子をイエス（主は救い）と名付けなさい」と告げた、あの天使の言葉を。

同28章9節「すると、イエスが行く手に立っていて、『おはよう』と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した(礼拝した)」。見紛うはずはない顔、聞き違うはずはない声。「おはよう」と毎朝挨拶なさった主イエスが復活して、目の前に現れたのです。「おはよう」と訳された言葉は、「大いに喜べ」とも訳せます。母マリアの喜びは、聖霊によって神の子を身ごもり、産みの苦しみの後に息子の顔を見た、あの日を思い起こさせる喜びだったでしょう。疑うことなく主イエスの足元にひれ伏した二人のマリアの姿は、幼子イエスにひれ伏して礼拝した東方の博士たちと瓜二つでした。

同28章10節「イエスは言われた。『恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちに、ガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる』」。主イエスの言葉は、天使の告げた通りでした。二人のマリアの喜びは、確信となりました。「主イエスは復活なさった！受難のキリストは死者の中から復活なさった！」。母マリアは、主イエスが誕生から死に至るまで、罪なき神の子であったことの生き証人ですから、心のうちにこう叫んだでしょう。「罪なき神の子は、罪を滅ぼし、死に打ち勝って復活されました。父なる神がわたしの愛する息子イエスを復活させてくださいました」と。息子の死を見なければならなかった母が、神の子の復活の証人となる。これが父なる神の御心でした。

(二宮 創)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 28章18～20節

「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。

だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。

彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

〈ねらい〉

子どもたちがキリストの復活を喜ぶこと。また、今回は特に母マリアを通してイースターを学ぶこと。

〈展開例〉

Q：おはようございます。今日はさて、何の日だったでしょう？

A：イースターで、イエス様が復活された日。

Q：そうそう。わたしたちは「イエス様が復活した」ことを、ずっとお話で聞いてきたし、もちろん信じているんだけど、実はこれってすごいことだよな？ イエス様が復活したとき、どんな様子だったか、聖書をもう一度読んでみましょう。（マタイ28：1～10）だれが登場しましたか？

A：マグダラのマリアともう一人のマリア（1節）。

Q：「もう一人のマリア」って、ちょっと変わった呼び方だけど、一体だれだろう？

A：（考える）

Q：実は、今日読んだところよりもう少し前に、ヒントが隠されているんだよ。聖書を見てみよ。（マタイ27：55,56）。

A：マグダラのマリアと、ヤコブとヨセフの母マリアって書いてあるね。

Q：そう！ そうすると次は、ヤコブとヨセフって誰？ ってなるんだけど、もう一度聖書を開いてみよう。これは、イエス様の教えに驚いた人々が言った言葉です。（マタイ13：55）どういうことだろう？

A：イエス様は大工の息子で、母がマリアで、兄弟の名前が4人書いてあるね。さっき出てきたヤコブとヨセフもある。

Q：その通り！ つまり、復活のイエス様に最初に会った「もう一人のマリア」という人は、実

は、イエス様のお母さんのマリアさんなんだね。イエス様のお母さんのマリアさんも、途中からイエス様の伝道の旅に参加したんだって。

ということは、お母さんのマリアさんは、イエス様が逮捕されたり、十字架につけられたり、お墓に葬られたりしたことも、傍で見ていたと考えられるんだ。マリアさん、どんな気持ちだっただろうね？

A：悲しい、つらい、こわい、いやだ etc.

Q：そうだね。考えるだけでもつらいことですね。マリアさんは、イエス様に最後に何かできないかと考えて、この日、イエス様のお墓に行ったんだ。マリアさんたちがお墓に行ったとき、どんなことが起きたんだって？

A：大きな地震が起こり、天使が現れた（2節）。天使にイエス様の復活を告げられた（5節）。そして、復活したイエス様と再会した（9節）。

Q：そうです。ここでイエス様は「おはよう」とマリアさんたちに挨拶をされていますね。これは「喜びなさい」とも訳される言葉です。十字架で確かに死なれたはずのイエス様が、自分の目の前に立って、うれしい挨拶をしてくれている……。お母さんのマリアさんはとても嬉しかったでしょうね。これは、マリアさんだけの喜びではなくて、イエス様を信じるわたしたちみんなの喜びです。

聖書を何度も開けて読むのが難しいこどもがいる場合、こちらで説明して、残り時間でイースターのカードの工作をするのもオススメです。

分級の時間は限られているので、あらかじめ台紙を切っておいたり、モチーフ（たまご、ウサギ、花 etc）の紙やシールなどを用意しておく、手軽に作ることができます。

カードを作ったら、教会に来ていない家族や、友だちにプレゼントしてもいいかもしれません。

【目標】

復活とは何かを知る。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 改めて御言葉に取り組む**①復活の事実性**

復活はおとぎ話や空想の類ではなく、歴史的事実である。主イエスは復活され。事実として、十字架にかかった三日後に、聖書が記しているように「週の初めの日の明け方」、この日曜日の朝に、復活された。今朝の礼拝は、その復活を記念するイースター礼拝であり、多くの教会では今日の午後に、皆で墓地に行き、墓前礼拝を行う。お墓の前に立つときなどには本当に改めて、そのイースターの驚きを感じる。一度完全に死んだ人が、それも一度死んでお墓に葬られるまでした人が、しかしそこから甦るということは、本当に夢のようなことである。けれども、その復活が主イエスという方において、本当に起こった。

②復活の驚き

この世界と、この世の中には、たくさんの、驚くべきこと、これはすごいなと思うことがあるが、その中で、間違いなく一番物凄いこと、恐るべきこと、この世界の歴史の中で、もっとも驚異的かつ衝撃的な事柄とは、主イエス・キリストの復活である。これ以上すごいことは、ほかにどこを探しても見つけれられない。イエス・キリストの復活によって、死が滅ばされる。死が突き破られて、命が死に勝ってしまうという、まったく新しいことが起こった。死からの復活という、絶対にありえなかった、起こりえなかったこと、全く新しいことを、主イエスは、私たちに与えてくださった。

③もし復活がなかったら？

もし復活がなかったら、死が全ての終わりであり終局である。せいぜい100年ばかりのこの命が費えたら、その先はなくなる。新しい命が生まれるということは、今日もこの世界に起こっている希望であるが、しかし死が全ての終わりなら、その赤ちゃんも、やがてやってくる死のために、死ぬために生まれるということになってしまう。死が最終的な勝利者ならば、そこに希望はない。もし復活がなかったら、命が生まれてくるということの意義さえも損なわれてしまう。

④復活の希望と救い

聖書は、大胆に、死は乗り越えられない問題ではないと語る。私たちの間には、癒されない病があり、死そのものの痛みがある。さらに、この日本という国の、国難と呼んでも良いようなびつさがあり、希望が見つけにくい状況もある。人生の中に、もう事柄が詰んでしまって、先が無いと思われる状況もあるかもしれない。けれども、私たちには、その先に、復活へとつながる線があるということが見える。復活は、たとえ行き詰まりを迎えても、それによって希望を完全に失うまでには至らないための根拠であり、また復活は、死という最悪の事態をも、乗り越えることを可能にする、最強の救いである。私たちが拠って立つことのできる希望は、死は乗り越えることができるということであり、死を乗り越えられて復活された主イエス・キリストの救いを、私たちが今、携えているということである。

3. 生徒と一緒に考える

教師自身にとって、復活とはどんな意味を持つのか？ それを生徒と分かち合う。

Q：疑問は解けましたか？

Q：復活とは何ですか？

Q：これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

4月12日 一番大切なこと・神さまと共に歩む 聖書黙想

テキスト

ヨハネによる福音書 12章27～36節

子どもと親のカテキズム 問1

※今回の黙想は、問1を二回に分けて扱います。
ぜひ、19日分と合わせてお読みください。

〈神さまと共に歩む道〉

「子どもと親のカテキズム」には、副題が付けられました。「神さまと共に歩む道」です。それは、信仰生活とは、人生の一部ではなく、人生のすべて、人生そのものだからです。そのような歩みは、何といっても私たちの神さまと共に歩む生涯と言えるでしょう。子どもたちの現実においては、おそらく自分のそばにいて、いつも、特に苦しい時や、悲しい時に具体的に自分を守って助けてくださる神さまです。彼らが、自分を中心において神を考えまたイメージすることは発達段階から言って当然のことです。しかし、その歩みを重ねるなかで、やがて神さまを中心にして自分を見つめ直し、教会や世界を考え、神さまを信じて従っていくという成熟した歩みへと導かれていくはずです。教師である私たちは、この歩みの素晴らしさ、楽しさを礼拝式や説教、分級や交わりをとおして、彼らに感じ取ってもらえればどれほど幸いでしょうか。そのために、回り道のようにですが、教師自身の教会生活、信仰生活が楽しいものとなる必要があります。子どもの教会の奉仕が楽しい、うれしいという姿、教師会の交わりや教会員どうしの交わりがうれしいという思いを伝えたいと思います。神さまと共に歩む道は、教会の仲間たちと共に歩む道であり、その幸いに生きることが、カテキズム教育の土台となるはずです。

〈一番大切なことは教えられるのか〉

問1は、人生の目的を明らかに、教えます。まず、教師である私どもがわきまえておきたいことはこの「教える」ことの大切さです。人間にとってもっとも大切なことは、おそらく教えることができない事柄だと思います。優れた教師であれば、この世の科学的真理、学問上の真理であれば丁寧に説

明し、理解させることは難しいことではないと思います。ただし、人間そのものにかかわる真理、生きる真理、人生の真理などは、おそらく誰も教えられないはずです。まさに、当事者である生徒たち自身が自分で発見し、自分で苦しむ中で捉える、気づく以外にないものです。親も教師も誰一人として、その子の心、魂の深みに入っていくことはできません。真理を知るには、いわば究極の孤独の中、自分ひとりで掘り下げるそのような内なる戦いが必要です。まして、神の真理や救いの真理であればなおさらです。ただし、そこに寄り添う人、つまり善き教師、指導者がいれば、真理に至る道は、はるかによく整えられ、深められてゆくはずです。

したがって、カテキスト（英：カテキズム教育を施す人）である教師の私たちは、まさに聖霊の導きをひたすら祈り求めつつ、筋道を立てて教える必要があり、責任があります。教えられないことを教えるという、ただ聖霊の可能性の中でしか成り立ちません。しかし、私たちは確信してよいのです。教えることを求め、お命じになられる神ご自身が必ず共に働いてくださり、真理体得へとカテキスト自身と子どもたちとを等しく導いてくださることをです。

教えられない事柄、その側面を、いささか強調しすぎたかもしれません。これは、今日の教育学、教育論のひとつの大きな実りだと思ひます。現代の教育方法の潮流は、暗記教育等に象徴される教師から生徒への一方的な教授法の批判にあります。ただし、信仰の真理、啓示の真理こそ、まさに絶対的に他者、外からの声を響かせることによってしか始まりません。決して人間が自らを掘り下げることによって到達する真理ではないからです。たとえば、赤ちゃんが、徹底的に自分の名を呼ばれることによって自分を認識していくことに似ています。人間は、神から呼ばれること、それに気づき応答する以外に、まことの自分を発見

し、まして確立することはできません。カテキストの役目とは、神の代理として、神の声を子どもたちに響かせること、届けることです。徹底的に一番大切なことである神さまを教えることです。それを通して自分自身が誰であるかを教えることです。その結論として人生の目的は明らかにされます。教える以外の方法で、分かるはずがありません。信仰が始まり、歩みを続けることができるはずがありません。まさに、信仰とは聞くことから、神の言葉を聞くことから始まるのです。(ローマの信徒への手紙10章17節を参照)

〈一番大切なこととは 事柄の相互関係〉

問1から問5は、このカテキズムの要約またあらすじ、目次であると「コラム」(p10を参照)に記しています。しかし、問1だけは、まさにここだけしかない設問です。つまり、このカテキズム全体の要約であるということです。

問1 私たちにとって一番大切なことは何ですか。

答 神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです。

この短い問答を分解すれば、「神」・「神の子」・「神と歩む」という言葉がすぐに見えてきます。一つひとつの事柄を明らかにすることは、これ以降の問答で十分に果たされていきます。その意味で、ここで最も大切なことは、これらの相互関係を明確にすることです。

一番大切なこととは何か。それに対して示された事柄は一つだけではありません。第一に、神ご自身のことであり、第二に、私たちが神の子であることです。最後に、この二つの相互関係を映し出すために用いられた概念である「歩む」ことです。この言葉こそ、カテキズム全体を彩る、いわば動的な概念です。その意味で、問1を扱う第一回目の説教の焦点、ポイントは「歩む」ことにおかれます。

〈信仰によって歩む〉

ここでは、スペースその他の関係で、「歩む」ことだけを論じます。コンコルダンス(辞書)で、「歩む」を調べれば、実に多くの御言葉が出てき

ます。「目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいるからです」(Ⅱコリ5:7)。「なぜなら、わたしたちは神に造られたもの。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです」(エフェ2:10)。「あなたがたも愛によって歩みなさい」(エフェ5:2)。「神に喜ばれるためにどのように歩むべきか」(Ⅰテサ4:1)。そして、暗唱聖句として選んだ、「光の子として歩みなさい」(エフェ5:8)。等など、です。併せて、使徒パウロが「走る」という言葉を多用していることをお調べくださるとさらに深い学びができます。(「目標を目指してひたすら走ることです」フィリ3:14)。信仰とは、明確な目標を目指して歩き続けること、光の子つまり神の子として成長しながら前進すること、「動く」ことです。このカテキズムがはるかに目指し、願うのは、「信じて動く神の子の像」が全信徒に結ばれていくことです。

〈テキストの黙想 文脈〉

この御言葉は、主イエスのエルサレム入城後のことです。何人かの異邦人がエルサレム神殿で礼拝するために来て、しかも、弟子のフィリポにイエスさまにお会いしたいと頼んだときのことで。それを聞かれた主イエスが、語られた御言葉の後半、結びの部分が今朝の説教のメッセージの中心です。問1の教えからのメッセージともなります。「光のあるうちに歩きなさい」。光とは、イエスさまのことです。弟子たちにご自身の十字架の死が迫っていることを受け、ご自身が共にいる間、主イエスを信じて歩くことによって光の子として救われなさいと促されたのです。これは、私たちにも、主イエスを信じ、光の源を目指して主イエスと共に進む信仰生活を促す御言葉です。

〈子どもたちに対して〉

映画、となりのトトロの主題歌のさんばに「歩こう、歩こう、わたしは元気、歩くの大好き、どんどん行こう」とあります。同時に、一人でお使いに行くとき、不安になったことのある子どももいるでしょう。主イエスと共に歩く人生を、具体的な歩くことに置き換えて、説くとイメージしやすいでしょう。(相馬伸郎)

4月12日 一番大切なこと・神と共に歩む 説教展開例

テキスト

ヨハネによる福音書 12章27～36節

子どもと親のカテキズム 問1

〔単元のねらい〕

問1からの説教の一回目は、一番大切なこととして「神と共に歩む」ことを主題とします。「子どもと親のカテキズム」は、信仰とその生活を「歩む、歩み」として表現しました。この概念は、カテキズム全体を規定し、支配しています。その意味では、この一回の説教だけで、語りつくそうと力む必要はありません。問1全体に触れながら、しかし、子どもたちに、信じること、信じて生きることが、神（天国）を目指した嬉しく楽しい歩みであり、心強く確かな歩み、何よりも人間らしい歩みとしてただ一つの歩みであることを、まさに喜びと感謝と確信をもって教え、示したいと思います。

イエスさまと一緒に目標めざして歩こう ――うさぎとカメ――

先週は、イエスさまのご復活を喜びました。今朝も、イエスさまは、僕たち私たちと一緒にいてくださいます。この礼拝堂には、目には見えませんが、聖霊なる神さまによってイエスさまがいてくださいます。私たちを元気にして、優しい子どもたちにしてください。心から感謝して、礼拝しましょう。

さて、今朝から、2年間、子どもの教会では、新しいカテキズムを用いて礼拝を捧げます。そのカテキズムの名前は「子どもと親のカテキズム」です。自分の名前を書いて、教会に来るときには、いつもカバンに入れて来てください。

今日は、その第1問を覚えました。来週も、第1問を暗唱しますから、みんなでスラスラ覚えれるようにと願っています。

皆さんは、歩くことが好きですか。今朝の賛美は、となりのトトロの主題歌のメロディーで、替え歌を歌いましたね。「歩こう、歩こう、主イエスの道を。イエスさま大好き、どんどん行こう～」これを歌うと先生は、どうしてもメイちゃんが、歩く映画のシーンを思い出してしまいます。皆さんも、歩くのが好きだと思います。元気の証拠です。大人の人たちは、自分の健康のためには歩きますが、楽しんで歩く人は少ないかもしれません。でも、歩くのが好きな子どもたちも、ずっと歩く

となると、疲れて嫌になるはずですが。何より、これは、先生の小学生の頃の記憶ですが、一人でお使いに行きました。お小遣いが欲しかったからです。日が暮れてしまった後に行くとき、とても怖かったことを覚えています。帰り道は、途中、走ることもありました。中学生になっても、昔のことですからどこにでも街灯があるわけではありません。近道をするとき、車の道路ではないところを通らなければなりません。ほんの数十メートルでしたが、周りは木が茂っていて、本当に怖かったです。夏など、幽霊の話などを思い出したときには、もう、大変でした。皆さんは、そんな怖い思いをしたことがありますか。

さて、今朝のカテキズムは、「私たちにとって一番大切なことは何ですか」とありました。答えは、「神さまの子どもとして、神さまと共に歩むこと」です。僕たち私たちにとって、僕たち私たちが生きていくうえで、一番、大切なことは何か。神さまと共に歩むことだと言うのです。歩くのが楽しいのは、おそらく一人で歩くのではなく、好きな友達やお母さんやお父さん、兄弟と一緒に歩くからではないですか。学校から家まで、一人で歩くと長い道のりも、友達とおしゃべりしてたらあっという間についてしまうということもあるかもしれません。

でも、いつも好きな誰かと一緒に歩けるというわけにはいきませんね。

でも、僕たち私たちはそんな時こそ、思い出したいのです。先週は、イースターでしたね。ご復活されてイエスさまは、いつでもどこでも弟子たちと共にいてくださるのです。イエスさまは、そう約束されました。ですから、教会の礼拝式はもちろん、教会から帰っていくときも、イエスさまと一緒に歩いてくださいます。

今朝、聖書からイエスさまの御言葉を聴きました。イエスさまはこうおっしゃいました。「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい」。

光とは、イエスさまのことです。つまり、イエスさまは、僕たち私たちにこうおっしゃっておられるのです。「わたしはあなたがたと一緒にいるよ。だから、わたしと一緒に歩きなさい。暗闇の中では、どちらに行けばよいのか、まったく分からないし、歩くことはできません。暗闇の中に落ち込まないようにいつもわたしを見ていなさい。わたしの背中をちゃんと見て、ついてきてごらん。わたしと一緒に歩きなさい。一緒に天国を目指して歩きましょう」。

最初にこれを聞いたお弟子さんたちは、イエスさまについて行くことに失敗してしまいました。イエスさまから離れて、ペトロやヨハネさんたちは暗闇の中に落ち込んでしまいました。しかし、お甦りになられたイエスさまが、彼らの心を明るく照らして下さったのです。こうして、弟子たちは、イエスさまと一緒にもう一度、歩き始めるようになりました。時には、走るような勢いでイエスさまのために、イエスさまと共に働いたのです。こうして、弟子たちは歩き続け、歩き続け、イエスさまの教えを他の国にも伝えました。次にそのバトンを渡された人たちも歩きました。どん

どん進んでいきました。こうしてついに、僕たち私たちのところまで、イエスさまを信じた人たちが歩いてきてくれました。そして今、僕たち私たちがここにいます。

そして、みんなでイエスさまを見つめながらどんどん歩いているわけです。

イソップのお話の中に、ウサギとカメのお話があります。ウサギとカメが競争するお話です。どちらが勝ったか、知っていますか。カメです。どうして勝ったのかというと、ウサギは、のろのろ歩くカメを追い越して、昼寝をしてしまったからです。カメは、ゆっくりでしたが、休まず歩いたので、先にゴールにつきました。

何故、カメは勝てたのでしょうか。先生の解釈は、こうです。カメは、ウサギを見ないでゴールを見ていたからです。反対に、ウサギはカメを見て、自分と比べたら勝てるはずがありません。競争する前から負けです。しかし、カメは、自分のペースでゴールを目指したのです。ここで、先生が皆さんに伝えたいのは、僕たち私たちの人生の目的、目標をしっかりと見てほしいということです。どこに向かって歩いているのか、それが分からなければ、元気に走ることはできません。ゴールは、どこですか。それは、天国です。今、イエスさまが戻られた父なる神さまがいらっしゃる場所です。そこを目指して、生きていくこと、それこそが、人間にとって一番、大切なことです。先生が一番、皆さんに知ってほしいことは、そのことです。そして、そのような人生こそ、人間にとってもっともうれしく、楽しい歩みなのです。ゴールを見るということは、イエスさまを見ることと全く同じです。イエスさまは、わたしを見ながら、わたしと一緒に歩いてゆこうと、招いてくださいます。賛美を歌いつつ、お祈りしつつ、イエスさまと一緒に、みんなと一緒に歩いていきましょう。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] エフェソの信徒への手紙 第5章8節

あなたがたは、以前には暗闇でしたが、今は主に結ばれて、光となっています。

光の子として歩みなさい。

〈ねらい〉

子どもたちが神さまと共に歩むことを、できるだけ具体的に思い描き、実践すること。

〈展開例〉

Q：みんなが大切にしているものって何かある？

A：家族、命、ペット、友だち、お金…etc。

Q：確かにどれも大切だね。でも今日は、聖書はなんと言っているか、見ていこう。こどもカテキズムが新バージョンになったことに気づいていたかな？今日からこれをみんなで一緒に学んでいきたいと思います。では、問1 私たちにとって一番大切なことは何ですか。

A：神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです。

Q：はい、よくできました。今日は、この「神さまと共に歩むこと」について、みんなで考えてみよう！「共に」というのは「一緒に」という意味だね。「神さまと一緒に歩く」ってどういうことだろう？

A：（考える）

Q：みんなはよく、どんな人と一緒に歩くかな？

A：お母さん、友だち、兄弟……etc。

Q：そうだね。それはみんなにとって、どんな存在だろう？

A：好き、頼りにしている、一緒にいたい……etc。

Q：うんうん。わたしたちにとって、神さまが一番そんな存在なんじゃないかな。神さまのことが大好きで、頼りにしていて、これからも一緒にいたいなあ……そうしていくことが、わたしたちにとって「一番大切なこと」だと教えられ

ているね。

Q：では、「歩く」というのは、どういうことだろう？ みんなは歩いてどこへ行く？

A：学校、家、公園……etc

Q：そうだね。歩くというのは、どこか目標があって、そこに向かって進んでいくイメージだね。わたしたちはどこに向かって進んでいくのかな？

A：イエスさま、天国……etc。

Q：わたしたちは「信仰」という長い道を歩いているんだね。長い道だから、その間には、きっといろんなものがあります。

A：落とし穴とか？

Q：そう、落とし穴とか。茨の道とか。分かれ道とか。神さまは近くにいてくれているのに、それに気づかなくなってしまうくらい、悲しいことがあるかもしれない（FootPrint という詩がありますね）。

Q：だけどそういうときはお祈りしてみよう。何かに迷ったら「神さまはどっちが喜ぶだろう？」「こんなとき、イエスさまならどうしたかな？」そんなことを考えてみてください。「神さま、教えてください。助けてください」そう言ってみてください。神さまは、あなたと一緒に歩いてくださっています。

今日の聖書

ヨハネによる福音書12:35

ホワイトボードに聖句を書いて、みんなで音読する。少しずつ言葉を消していき、空欄をつくり、覚えながらみんなで音読する。

【目標】

神様と共に歩むことについて知る。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 改めて御言葉に取り組む

①すべての人を引き寄せる主イエスの磁力

ヨハネによる福音書12章32節で、主イエスは、「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」と語られた。これは主イエスの復活と昇天を指し示す言葉。主イエスは十字架で、裁きを御自分に引き受けられ、罪と死を体もろとも十字架に貼り付けにされ、そして赦しと命の実りを与え、さらに復活して、天に昇られる。それも、主イエスはその際、一人で昇られるのではなく、そこで私たちを引き寄せて一緒に昇ってくださる。19世紀のイギリスで活躍したスボルジョンという有名な説教者は、この箇所の説教題として「マーベヴェラス、マグネット」という説教題をつけた。「驚くべき磁石」という説教題の説教で、彼は、「主イエスは、私たちを天国へと救い上げる、驚くべき磁石のようだ」と言う。この主イエスの強い磁力が、私たちの慰めとなる。その主イエスの愛の磁力は、死の力よりも強く、私たちを捉えて決して離さない磁力である。

②光を信じ、光を信頼して歩む

ヨハネによる福音書12章35,36節で、主イエスは、「光は、いましばらく、あなたがたの間にある。暗闇に追いつかれないように、光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からない。光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい」と言われた。「光あ

るうちに、光を信じなさい」と言われ、「光あるうちに、光の中を歩みなさい」とは言われなかった。「光あるうちに、光を信じなさい」とは、この主イエスに向き合っているこの今という時に、主イエスを信じることへの招き。そして、主イエスを信じるとは、自分を信じて、自分の力で道を切り開いていくことではなく、罪の赦し、永遠の命という実りを、御自分の死をもって実らせてくださった主イエスに、自分を信じる以上の全幅の信頼を寄せて歩むこと。

③神様と共に歩むとは？

信仰を持って、神様と共に歩むとは、「もうなんの問題も悩みもなくなりました。すべては解決されました。全く幸せになりました」と言って生きることではない。気になることは依然としてある。自分の心が動揺するような問題も普通に起こる。けれどもその中であっても、すべてが神様の御手の中で起きていることだと知って生きること。たとえ自分に、どんな動揺が起こり、自分のこの命が費えてしまう時がいつに來るとしても、しかしそこに、死の力よりも、もっと強い主イエス・キリストの磁力が働いていて、必ず自分を支え、この方が必ずこのわたしを引き寄せてくださる。このことを信じて、この神様を、自分以上に、自分の人生の中心に据えて生きる、力強い生き方。詩編の作者はこのことを、「神はわたしの避けどころ、砦、依り頼む方」と表現した。神様がそのような方であるからこそ、ごの方の守りを信じ、この方に守られて、この週も神様と共に歩むことができる。

3. 生徒と一緒に考える

教師自身にとって、神様と共に歩むことは、どのようなことなのか？ それを生徒と分かち合う。

Q：疑問は解けましたか？

Q：これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト ルカによる福音書 19章1～10節
参照教理問答 子どもと親のカテキズム 問1

※今回の黙想は、問1を二回に分けて扱います。
ぜひ、12日分と合わせてお読みください。

〈一番大切なこと ①神〉

カテキズム全体を規定するのが問1です。そこで、私たちにとって一番大切なことは何かを問います。「私たち」が主語で、その私たちは「神の子」と定義されます。その子どもたちにとって神さまと共に歩むことが、一番大切なことであるということです。この短い問答において、神さまだけが二度、繰り返されます。つまり、一番大切な主題、決定的に大切なことは、この神だということが、繰り返し唱えられていく間に、説明しなくとも、気付いていただけたと思います。人間にとって一番大切なのは、神さまです。人間にとって、神との関係、つまり神との交わりなしにすべては空虚であり無です。

たとえば、カルヴァンのジュネーブ教会信仰問答の問一は、「人生の主な目的は何ですか」と問い、「神を知ることであります」と答えます。問二は、「どんな理由であなたはそういうのですか」「神はわれわれの中にあがめられるためにわれわれをつくり、世に住まわされたのでありますから。また、神は、われわれの生の源でありますから、われわれの生を神の栄光に帰着させるのはまことに当然であります」と答えます。ついで、問三は、こう続きます。「では人間の最上の幸福は何ですか」「それも同じであります」と答えます。改革派信仰は、まさに徹底的に神に向かうものです。神を主語にして、神に顔を向ける信仰です。

ここで、神を「知る」とは、聖書に用いられる言葉の意味において理解されなければなりません。「アダムは妻エバを知った（ヘブル語：ヤダー）」創世記4:1とは、まさに全人格的な交わりを意味しています。神を知るとは、神との交わりに生きるということに他なりません。また新約においても、たとえば、ヨハネによる福音書

17章3節「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知る（ギリシャ語：ギノースコー）ことです」とあります。ここでも、単に、神とイエスの外面的な知識のことではなく、人格的な知識のことです。そのような知識は、人格的な対話、交流なしには成り立ちません。

したがって、神を知ることこそが、人間にとって一番大切なことなのです。そして、最高の幸福、究極の喜びなのです。まさに、人間のすべての営み、その一切は、神にかかっています。神を知らない人生、それは、暗黒です。したがって、私たちが子どもたちに教えなければならないことの第一のことであり最後のことは、神ご自身とその交わりに生きる幸いについてです。

〈一番大切なこと ②神の子の自覚〉

神を知るとき、同時に起こる恵みは、自分を知ることです。それは、神から教えられてのみ正しく知ることができるものです。カテキズムは、それを「見越して」、ただちに「わたしたちは」「神さまの子ども」と答え「させ」ます。たとえば、アメリカ合衆国長老教会（PCUSA）の子ども向けのカテキズム、邦訳、「わたしたちは神さまのもの」（2002年 一麦出版社）の問一でも、「あなたは誰ですか」と尋ね、「わたしは神さまの子どもです」と答えさせています。私たちのカテキズムの基本の論理は、まず神を教え、同時に自分を教え、またその結果としてどのように信じて歩むべきかを教えるというものです。

神の子の自覚とは、たとえば天理教などにもみられる親なる神とその子どもである人類というものとは異なります。そこには、救済がありません。私たちは、主イエス・キリストの贖いによって神の子とされる、回復されるのです。このように、救われるということは、本来の、あるべき自分自身へと整えられていくことでもあります。つまり、

まことの人でいらっしゃるイエスさまの姿に似せられていくことです。主イエスは、御子なる神、神の独り子でいらっしゃいます。私たちは御子イエスによって、神の子とされるのです。したがって、神と共に歩むといわれる神とは、イエスさまのことです。父なる神の子どもであるわたしは、イエスさまと共に、天国を目指して歩む、それが人間の本分、一番大切なこと、人生の主要な目的です。

〈一番大切なこと ③神と共に歩むこと〉

「子どもカテキズム」は、「道」という概念を用いて全体を構成していました。使徒言行録によれば、今日「キリスト教」と呼ばれている宗教、その現象のことは、「この道」と呼ばれていました。(9:2, 19:9, 23, 22:4, 24:14, 22) あるいは「主の道」(18:25)「神の道」(18:26)もあります。おそらく、使徒たちが福音を、人間の生きる道、神への道として説いたからだと思います。しかし、「子どもと親のカテキズム」は、道といういわば静的な概念ではなく、「歩む、歩み」という動的な概念で信仰の道、キリストの道を描こうとしています。

神を知った私たちは、神の子としての自覚に目覚めます。そして、知れば知るほど、神の子の自覚は深められます。その自覚は、必ず、いわば「動的な自覚」となります。これは、確かに、信仰の世界、神と人間との関係において、人間には義務が生じます。神の御心を知る者、神の恵みを受けた者には当然「しなければならない義務」が生じます。しかし、同時に、信仰の応答は、「することが楽しくてしかたがない」という自発性をも生じさせます。それは、聖霊のお働きにあずかった者たちの実りです。主イエスを受し、神を受する思いは、完全に聖霊が、つまり、外から注がれる思いです。その聖霊を受けた者たちは、心の底から、まさに、本心、本音から歩みたくなる、信じて従いたくなる、させられてしまうのです。ここに神の自由な恵みに対応する自由な人間の応答、解放された人間の応答があります。第一部、第二部では、その恵みの事実を扱い、これを深める方法を扱います。

〈テキストの黙想 文脈〉

与えられたテキストは、ザアカイの物語です。過去、何度も扱ってきましたので、できれば既刊もご参照ください。

ザアカイは、徴税人の長です。まさに、富豪であり有名人だったと思います。しかしそれは、ユダヤ人からの軽蔑と反感、憎しみの代価でした。彼は、それらをものともせず自分の価値観、つまり、信仰のリアリティーではなく目に見えるものにたよるリアリティーだけが真実であるとの信念(信仰)を持って、徴税人の長に上り詰めたのだと思います。つまり、堅固な自己肯定の姿勢があったのです。

しかし、主イエスを自宅に迎え入れ、交わりをいただいたとき、彼は、積み重ねてきたその姿勢を深く揺さぶられることとなりました。遂に、後悔の念に駆られたのです。つまり、罪人としての自覚が育まれたのです。しかし、主イエスは、まさにそのザアカイに、「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから」と宣言されました。どれほど驚き、また喜んだことか、ザアカイの顔をはっきりと想像できるほどです。彼は、そのときから、自分もまた「神の子」であるとの自覚をもって生き直していったと思います。主イエスに救われて、神の子としての自覚を深めること、そこにすべての神の子たちの幸福があります。

〈子どもたちに対して〉

うさぎ(他の人)と比較せず、自分のペースでひたすらゴールでいらっしゃるイエスさまを見つめて歩むカメは、幸いな旅人です。子どもたちも、主の日のたびに、ザアカイのように主イエスのご訪問を受けています。それを気づかせ、共に感謝したいと思います。主イエスは、繰り返し、「あなたは救われた、神の子だ」と宣言してください。教師の喜ばしい務めは、その宣言を代行することです。主イエスと共に、天国を目指して、楽しい子どもの教会が営まれますように。

(相馬伸郎)

4月19日 一番大切なこと・神の子とされて 説教展開例

テキスト

ルカによる福音書 19章1～10節

子どもと親のカテキズム 問1

(単元のねらい)

問1からの説教の二回目は、「神の子」を主題とします。人間にとって最も大切なことは、神を知ることです。父なる神との交わりは、主イエスの贖いを通して、聖霊の交わりによってなされます。そこで起こっている霊の現実、私たちが罪人のままで、父と子と聖霊の交わりの中に招き入れられるという想像を絶するほどの深い交わりです。それは、私どもの罪を御子の贖いによって赦し、一方的に愛の対象としてしまう神の自由な愛の実りです。それほどまでに神は私どもを愛し、交わりを求めておられるのです。私たちは、驚くべき神との交わり、永遠の命を生きる旅路へと呼び出されました。この素晴らしい人生を歩ませるために、子どもたちに神の子としての自覚を深めさせたいと思います。そのために、イエスさまが「あなたは、神の子」と呼びかけておられるその声を届けましょう。

あなたは誰ですか？

今日の説教の題は、「あなたは誰ですか？」としました。先週に続けて、今朝も問一から学びます。最初に、一人一人に考えてほしいと思います。なんと答えますか？

はい、ありがとうございます。一人一人、楽しい答えでした。

先生の質問は、「あなたの名前は？」でも「あなたはどこに住んでいる？」「何歳？」「どこの学校？」「身長は？」「体重は？」でもありませんでした。「あなたは誰ですか？」です。これは、難しいですね。それぞれの答えが間違っているわけではないでしょう。けれども、今朝、僕たち私たちに共通の答えについて、学びたいのです。皆で、このように答えたいのです。それは、「わたしは神さまの子ども」だということです。問1を読みます。皆で、答えを読んでください。

「私たちににとって一番大切なことは何ですか」「答、神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです」「私たち」は「神さまの子ども」だと言っているわけです。

さて、エリコという町にザアカイという大変な金持ちの男がいました。この人は、税金を取る仕事をしていました。この仕事をする人は、ユダヤ

人からはとても軽蔑され、嫌われていました。何故なら、不正な取立てをして、自分のお財布にお金を貯めていたからです。ところが、ザアカイさんは、そんな人びとの視線なんか気にしません。「ふん、何を言われてもかまうものか。お金こそ全てだ。神さまがなんだってんだ。弱虫のやつらが、神さまに頼るんだ。俺様のように強い人間は、神になんか頼る必要なんかないのだ」。こうして、遂に、ザアカイさんは税金取りの中で一番偉い人になりました。

そんなある日のことです。イエスさまがザアカイの住む町にやってきました。エリコの町はもう、大変な騒ぎです。大勢の人びとが口々に言うのです。「イエスさまって、すばらしいお方だなあ。今まで見たこともない先生だなあ。神さまの御言葉を、分かりやすく教えてください、何よりも、悲しんでいる人や苦しんでいる人たちを助け、癒して回っておられるんだ」。

これを聞いて、これまで、神さまの話なんか聞きたくないと思っていたザアカイさんも、そわそわして来ました。「もし、本当にやつらが言うとおりなら、もしかすると、神さまは本当にいるのかもしれないなあ。でも、俺は、騙されやしない

ぞ」。そして、ザアカイは、一度見てやろうと思いました。ところが、人びとは、ザアカイにこそとばかりに仕返しをしました。ザアカイにイエスさまを見せないように邪魔をしたのです。ザアカイさん、背が低く、どんなにジャンプしても見えません。そこで、いちじくの木に登りました。するとどうでしょう。見える見える、イエスさまとお弟子さんたちがはっきりと見えました。

向こうにいたイエスさまは、いちじくの木の上に登ったザアカイの方にやって来られます。まるで、ずっと前からザアカイに会うことを決めておられたかのように、イエスさまは、ザアカイに向かってまっすぐ近寄って来られるのです。

遂に、いちじくの木の下に来ました。すると、どうでしょう、イエスさまは、ぴたっと立ち止まりましたのです。ザアカイの見下ろす目とイエスさまが見上げるまなざしがピタッと合いました。そのときです。イエスさまは、おっしゃいました。「ザアカイさん、急いで降りてきなさい。今日はぜひ、あなたの家に泊まりたいのです」。

ザアカイは、我を忘れるほど、驚きながら、急いで降りてきました。そして、イエスさまを自分の御殿のように大きな家に案内しました。そこには、大勢の召使がいます。美味しいご飯の用意なら、お弟子さんたちの分でも、すぐに用意できるのです。

考えてみると、ザアカイの家に来たことのある人は、徴税人の仲間以外、普通のユダヤ人は誰一人ありません。何故なら、神さまを信じて、正しく生きていこうと考えているユダヤ人なら、ザアカイのことを、神さまからもっとも離れた罪人と考えていたからです。「あんな奴の仲間になんか、絶対になりたくない。あんな奴の家に泊まって食事をするなんてありえない」というのも、ユダヤ人の考えでは、一緒に食事をしたら、その人と本当の友達、家族の一員になることを意味したからです。ですから、エリコの町の人たちはがっかりして、言いました。「イエスさまは罪人の仲間になってしまったのか。なんだ、裏切られた。がっかりした」。

しかし、ザアカイは、夢を見ているような気持で、部屋にいるイエスさまのお話に聞き入りました。イエスさまは、「神さまは人間を偏り見ないで、あるがまま、お救いくださること。神さまの国がもう始まっているから、誰でも神さまに心を向け直し、イエスさまを信じるが必要だ」とお話しくださいました。聞いているうちに、ザアカイの顔は真っ赤になりました。「ああ、俺は、これまで悪いことをしてお金を稼いでいた。俺は、自分が楽しければ、人が悲しんでいても、苦しんでいても、知ったことではなかった……」。遂に、ザアカイは、悟りました。「ああ、神さまは本当におられるのだ。俺は、今、神さまを知った。神さまはこんな俺でさえ憐れんでくださって、このようにそのままの俺を愛してくださるのだ」。そのとき、ザアカイはすっと立ち上がって言いました。「イエスさま、神さま、わたしは財産の半分以上を貧しい人に施します。騙し取ったものは、4倍にして返します。もう、これからは、こんなことをしません」。ザアカイさんは自分のことを罪深い人間だと思いました。そして、そんな生き方はもうしたくないと、決心しました。

そのときです。イエスさまは心の底からうれしそうな御顔で仰いました。「ああ、ザアカイ、よかったね。うれしいよ。皆、よく聞きなさい。今日、救いがこの家に来ました。この人は、アブラハムの子、つまり、神さまの子どもなのです。ザアカイさん、あなたは自分のことを罪人だと思っているね。でも、もう大丈夫。赦されたのだからね」。

さて、イエスさまは、今朝、僕たち私たちのことを何と呼んでくださっているのでしょうか。イエスさまは、「君は、神さまの子どもだよ」とおっしゃいます。だったら、僕たち私たちは、わたしは神さまの子どもだと自分のことを思ってください。先生も神さまの子どもです。だから、みんなと一緒に、今週も天国を目指し、イエスさまと一緒に、みんなと一緒に信仰の歩みを続けたいと思います。それ以上に大切なことは、人間にはありません。

(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] ルカによる福音書 19章9節

「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。」

〈ねらい〉

神さまが自分のことを「神さまの子」としてくれたことを喜び、感謝すること。

〈展開例〉

Q：おはようございます。はい、抜き打ちテストみたいになって申し訳ないんだけど、みんな覚えているかな？ カテキズム 問1 私たちにとって一番大切なことは何ですか。

A：神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです。

Q：素晴らしい！ 先週は、神さまと共に歩むことを勉強したんだけど、今週は、「神さまの子どもとして」という部分を考えていきます。今朝のお話は、何のお話だったかな？

A：ザアカイさんのお話。

Q：そうだね。ではもう一度聖書を読んでみよう。ルカによる福音書19章1～10節だね（輪読）。

Q：ではお話をふり返ります。ザアカイさんは、どんな人だったかな？

A：徴税人！

Q：そうだね。他にもわかることを探そう！

A：エリコに住んでいる（1）、徴税人の頭（2）、金持ち（2）、イエスを見たいと思っている（3）、背が低い（3）、お金をだまし取っていた（8）……etc。

Q：情報が集まりました。ザアカイさんは徴税人の頭で、エリコの町の人からお金をだまし取って、お金持ちになっていました。だけど、イエスさまを見てみたくて、背が低いから木に登ったんだね。ザアカイさんが、普段から町のみんなに優しくしていたら、もしかしたら前に行かせてもらえて、イエスさまを見ることができたかもしれない。だけど、友だちのいなかったザアカイさんは、自分で木に登るしかなかったんだね。こういう話を聞いて、みんなザアカイさ

んについてどう思う？

A：あんまり友だちになりたくない、ちょっと悪い人だけど、みんなに嫌われて可哀相、イエスさまに会いたいと思ったなら、いい人なのかも……etc。

Q：うんうん。その後、木に登って、イエスさまには会うことができたのかな？

A：できた。木に登っているザアカイを、イエスさまが見つけて、声をかけた。

Q：そうだね。声をかけたのは、なんとイエスさまのほうからだった。聖書にも書いてあるね。ザアカイさんは、どんな気持ちだったかな？

A：嬉しかった、びっくりした、ドキドキした……etc。

Q：いろんな気持ちがあったけど、喜んでザアカイさんは自分の家にはイエスさまをお迎えしたんだね。町の人々は、意地悪なザアカイさんと友だちになろうとしなかったから、みんなザアカイさんの家には行ったことがなかったんだね。ザアカイさんはイエスさまに出会って、どうなった？

A：財産の半分を貧しい人に施し、だまし取ったお金も4倍にして返すとイエスさまに言った。

Q：イエスさまに出会って、自分の罪を悔い改め、生きていく約束をしたんだね。みんなも、人からお金をだまし取ったりしたことはないと思うけど、お母さんの言うことを守れなかったり、友だちとケンカをしてしまうことはあるよね。イエスさまはザアカイと同じように、わたしたちにも語りかけてくださいます。

「あなたもアブラハムの子、つまり、神さまの子ども。わたしは、失われたものを捜して、救うために来たのです」イエスさまを信じる者は、神さまのこどもとしてもらえます。みんなも、わたしも、神さまのこども。神さまのこどもとして、喜んで生きていきましょう。

【目標】

神の子とされるとはどういうことなのかを学ぶ。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 改めて御言葉に取り組む**①本来人間は神の子ではない**

神と人間の関係は、創造者と被造物の関係であり、それは父子関係ではない。神は人を創造したのであって、産んだのではない。そして人間は、生来罪人して、神様に背き、神様から離れている存在であり、父と子のような親しさは、本来そこになかった。

②主イエスを介して子となる

神様は、恵みにより、私たちを子どもとするために、御子主イエス・キリストを世に送ってくださった。そのキリストに信仰によって結び付くことによって、私たちは主イエスの友また兄弟となり、主イエスのみしか持ちえなかった神様との親子関係に、キリストによって招かれ、キリストと結び付くことによって、入れていただけるようになった。

③父と子どもという親しい距離感

私たち人間は愛に乏しい存在であるが、そういう私たちの間にあっても、親と子との愛は、最も

固く、安定性があり、揺るがない。そこには無償の愛、また存在論的な肯定と愛が見える。親は、子どもが良い子にしているから愛し、自分の益となることをしてくれるから愛するのではない。子育ての中で子どもから親に送られてくる事柄は、客観的に見れば、多くが親にとっては迷惑なこと、大変なこと、痛みと苦勞を伴うことであるが、親はそれを、迷惑や苦勞などとは感じない。そのような無償の愛が成立する親子関係、それを私たちは、永遠の父である神様との間に持つことができるのである。自分を愛し受け入れてくれる存在としての神様を、私の父と呼ぶことができることは、それ自体が幸せなことであり、私たちの安心と安定の根拠である。

④子どもは父の持ち物を相続できる。

親族でない部外者は、父親の財産を正式に受け継ぐことはできない。それができるのは実の子どもだけである。私たちは、神様の実の子どもとして、父なる神の天国の恵み、永遠の命の恵みを、余すところなく受け継ぐことができ、そのことを既に確約されている。父なる神がお持ちの豊かな富、それは子であるこの私たちの富でもあるのだ。

3. 生徒と一緒に考える

教師自身にとって、「神の子とされる」とは、どんなことなのか？それを生徒と分かち合う。

Q：疑問は解けましたか？

Q：神の子とされるとは、あなたにとってどんなことを意味しますか？

Q：これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト

ヨハネによる福音書 4章7～26節

子どもと親のカテキズム 問2

1. 命の水の源なるキリスト (1～15節)

イエス・キリストこそが、私たちの命を生かす命の水の源であられる。このお方こそ、汲めども尽きぬ命をわたしたちに注ぎ続けてくださる井戸である。キリスト者とはこの尽きぬ命の水脈、あるいは水源のありかを知っている者のことである。そしてこの命の水の源を知っているかどうかということが、人間にとって決定的に大切なことである。

人はだれも幸せを願い、他者との間に愛と平和の関係を築いていきたいと願っている。しかし現実には、必ずしもその願いのとおりになるわけではない。私たちは自己中心の思いから自由になれない。家族や友人や隣り人と理解し合おうと願い、努めるところで、かえって誤解に悩み、言葉が通じないむなしさをかみしめることしばしばである。

主イエスはサマリアの女と対話を重ねていかれる中で、彼女を救いに導かれた。実にこの人こそ、そのような愛の不毛と人間の無力、あるいは限界というものにうちひしがれていた人であった。彼女は真実の愛を築こうとしながら、そのたびに破れ、相手も自分自身も傷つけ続けてきた。この地上では、今なおさまざまな争いや憎しみや敵意がたえない。そうしたこの世の現実、生きることの悲惨から、主イエスは彼女と出会うことによって、彼女を救い出してくださったのである。主イエスは仰せになる。「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」(14節)。

人間にとって大切なこと。なくてはならないただひとつのこと。それは、永遠の命の水の源なるキリストを通して命の神につながって生きることである。キリストを通して父なる神につながっていなければ、私たちはやがてまた渇く。何をしても、どこから求めても、やがては渇く。しかし神

につながっているならば、永遠に渇くことはない。キリストの言葉にとどまる。主の日の礼拝において、あるいは日々の御言葉と祈りの生活において、あるいは御言葉を心に刻むいとなみを重ねていく。そのようにして、私たちは永遠の命の水を受け続ける。そのようにして、私たちの命は確かに生かされる。

ここでサマリアの女もそうしているように、心を開いて、私たちを生かす命の水、すなわち永遠の神との命の交わりを乞い求めたい。主よわたしにもその水をくださいと、主イエスに求めたい。

2. まことの礼拝 (16～26節)

主イエスとサマリアの女との対話は、次第に救いの核心にかかわる局面へと入っていく。すなわち話題は礼拝に移っていくのである。人間にとって最も大切な問題は礼拝である。真にあがめるべきお方をあがめる。真につながるべきお方としっかりつながって生きる。それが人間の命と人生を決めるのである。

主イエスは18節で彼女に仰せになる。「あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない」。

この主イエスの御言葉には、実は隠された意味があるのだという興味深い見解を示す人がある。つまりここでの「五人の夫」とは文字通りの五人の夫ということでもあろうが、もうひとつ五体の偶像の神々のことを言っているのだとの指摘があるのである。サマリアの女はそれまでの不幸な人生の中で、神々をもとっかえひっかえしてきたということである。

流行を追い求めるように神々をも追い求めてやまない人びとは、私たちの国にも少なくない。そして、そうした人生にあってはついに平安を得ることはない。偶像を追い求めることから解放され、真に高価な恵みを与えてくださる主なる神のふところに帰る。そこでこそ人は命を得、平安を得る

のである。

「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」——この命の水とは何か。これは、礼拝の恵みである。礼拝の場で、私たちは主イエスから命の水を受ける。そのとき私たちの魂も生き返るのである。「霊と真理をもって」(24節) 神を礼拝するなら、私たちの心と言葉と行いとが渴きを癒され、うるおってくる。通じなかった言葉が通じるようになる。争いと敵意がとりのけられ、愛と平和とにとってかわる。死の力さえ、この水の命の力には及ばない。まことの神を仰ぎ、永遠の命の水を受けて生きるなら、使徒パウロが言うように「外なる人」は衰えても、「内なる人」は日々新たにされ、強められていくのである。

25節以下を見たい。サマリアの女が、わたしはキリストと呼ばれるメシアが来られることは知っていますと主イエスに問いかけると、主イエスはお答えになる。「それは、あなたと話をしているこのわたしである」(26節)。

それはこのわたしである。「わたしである」は、旧約聖書出エジプト記3章14節とまったく同じ言葉である。モーセが神に、あなたの名を教えてほしいと願ったとき、神は「わたしはある、わたし

はあるという者だ」とお答えになって、ご自身こそ永遠の神、主なる神であられることをあきらかになされた。

その同じ言葉をもって、主イエスはサマリアの女にお答えになったのである。つまり、わたしはあるという者だと彼女に告げられたのである。「言は肉となってわたしたちの間に宿られた」(1章14節)と語られる永遠の神が、今彼女の目の前におられる。

だからこそ、主イエスこそがまことの神殿であられる。このお方が世に来られたことによって、私たちは偽りの礼拝から解放され、まことの礼拝へと招き入れられたのである。

主イエスと出会い、主イエスの御言葉を聞くことによって、それまで暗闇の中に置かれていたサマリアの女は光のもとに招かれた。今あなたの目の前にいる、今あなたと話しているこのわたしこそ、キリストと呼ばれるメシアであるとの御言葉を聞いた時の、この人の驚きと喜びはいかばかりであったことだろうか。命の主はありふれた日の昼下がりに、この行きずりの一人の女性にも出会ってくださり、救いの真理を惜しげもなくあらわしてくださった。キリストは私たちの目の前に、私たちと共におられる。 - (木下裕也)

テキスト

ヨハネによる福音書 4章7～26節

子どもと親のカテキズム 問2

(単元のねらい)

サマリアの女の物語を、「子どもと親のカテキズム」問1、問2を念頭に置きつつ学びたい。4章前半の7～15節を中心に見たが、後半の16～26節、とくに23,24節をも考慮して語りたい。真の神礼拝、永遠の命の恵みへと招かれることがいかに大いなる祝福であるのかを、感謝のうちに覚えたい。

命の水を受けて

私たちの人生の喜び。それは、神さまを知り、神さまをあがめて生きることです。「子どもと親のカテキズム」の問1、問2、問3を読みましょう。

問1 私たちにとって一番大切なことは何ですか。

答 神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです。

問2 神さまと共に歩むとは、どのようなことですか。

答 まことの神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜び、神さまと人に仕えて歩むことです。

問3 神さまと共に歩むために、罪人である私たちに必要なことは何ですか。

答 イエス・キリストを信じ、救われて、神さまの子どもとされることです。

人生の目的は神さまを礼拝することにあります。ただお一人の、生きておられる、まことの神さまがおられます。このお方は天の父なる神さま、そして愛の神さまで。父親が子どもを愛するように、神さまはわたしたち人間を愛してくださいます。父親がわが子をその両腕に抱くようにして、神さまはその腕の中に私たちを抱き、私たちを守り、支えてくださるのです。わたしはあなたを愛しているよ、と途切れることなく私たちに語りかけてくださるのです。

人間の愛をはるかにこえる、人間の愛よりもは

るかに深く、強く、広い愛。そのような愛をもって、神さまは私たちを造ってくださいました。私たちに命を与えてくださいました。この父なる神さまが共にいてくださることを知るとき、神さまの愛のみ声を聞くと、私たちは何も恐れることはありません。この父なる神さまをあがめ、父なる神さまと共に生きる。そこに人間の本当の喜びがあります。幸せがあります。

天の父なる神さまは、私たち人間をそのような喜びと幸いへと招き入れるため、私たちと出会ってくださいます。独り子イエスさまを通して出会ってくださるのです。今朝の聖書の御言葉も、イエスさまとの幸せな出会いをゆるされた人のことを紹介しています。

この人は、サマリアという地に住んでいた一人の女の人です。とてもつらい人生を生きてきた人です。生きる意味も、生きる望みも見出すことができないまま、日々深いむなしさと孤独のうちに過ごしていた人です。

ある日の昼下がりに、この人は水を汲むために、いつものように井戸のそばにきました。イエスさまはその場所で、この人と出会ってくださったのです。

イエスさまはこの人におっしゃいました。「わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」(14節)。

イエスさまは命の水の源であられるお方です。

なぜならイエスさまは人となられた永遠の神であられ、またこのお方とつながることで人は永遠の神、命の主、天の父なる神さまと直接につながることになるからです。

私たち人間にとって大切なこと、なくてはならないただひとつのことは、イエスさまを通して父なる神さまにつながって生きることです。人はこの世の何者からも、永遠の命を得ることはできません。井戸水を飲むと、一時は喉の渇きが癒されるかもしれませんが、また渇きますね。同じように、イエスさまを通して命の主なる神さまとつながっていなければ、私たちはやがてまた人生に渇きます。何をしても、どこから求めても、やがてまた渇きます。

けれども神さまにつながっていれば、永遠に渇くことはありません。私たちの人生は、永遠の命の恵みによって潤われ続けるのです。イエスさまという命の源を見出した人は、流れのほとりに植えられた木のようなものです。この水はため池の水のように底の浅い水ではありません。豊かな水量をたたえて流れる川の流れです。その流れのほとりに植えられた木は、つねにたっぷりとした、豊かな水を吸い上げることができますから、渇くこともしおれることもなく、豊かに身を充実せ続けるのです。

私たちもイエスさまにつながって生きるなら、神さまの命の潤いの中にいつも生かされるのです。私たちが永遠の命の水を受けるための機会は、つねに与えられています。イエスさまは私たちと共におられます。栓をひねるなら、命の水はたちどころに、豊かにあふれ出てくるのです。

イエスさまは、私たちの命を生かす命の水の源です。汲めども尽きぬ命を私たちに注ぎ続けてく

ださる井戸です。サマリアの女は、「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください」(15節)とイエスさまにお願いしました。命の水の源であるイエスさまとつながったのです。そして人生のむなしさ、生まれながらの罪のみじめさから解放され、救われたのです。人生の本当の喜びを知ったのです。

「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」——私たちは礼拝の場で、イエスさまの命の水を受けます。命の神さまを仰ぐとき、私たちの魂も生き返るのです。「霊と真理をもって」(24節)神さまを礼拝するとき、私たちの心と言葉と行いも渇きを癒され、大いなる命の力を受けるのです。死にさえも打ち勝つ命の力を得るのです。

サマリアの女は、それまでの人生において多くの偽りの神々に支配されていました。それがこの人の人生の悲しみのもとでした。天の父なる神さまを知らずに、偽りの神々によって彼女の命と人生も目当てを失い、ちりぢりに引き裂かれていたのです。

しかし今、この人もイエスさまと出会い、父なる神さまのふところに立ち帰り、揺るぎない平安を得たのです。イエスさまに結ばれることで、人は偽りの礼拝から解放され、まことの礼拝へと招き入れられるのです。暗闇の中に置かれていた人が光のもとに招かれるのです。それが、人生の最大の喜びであり、幸いです。

イエスさまはこの人にも、この喜びと幸いを与えてくださいました。私たちにも与えてくださるのです。(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙一 10章31節

だから、あなたがたは食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、
すべて神の栄光を現すためにしなさい。

〈ねらい〉

渴くことのない命の水である神さまとつながり
続け、喜んで歩むこと。

〈展開例〉

Q：おはようございます。礼拝のときにも読みましたが、今日のカテキズム、覚えていますか？
みんなで読んでみましょう。 問2 神さまと
共に歩むとは、どのようなことですか？

A：まことの神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜び、神さまと人に仕えて歩むことです。

Q：みんなは神さまを知っているかな？ 神さまの「栄光」（＝これは神さまの「すばらしさ」というと分かりやすいかな？）をあらわすってどういうことだろう？ 礼拝で聞いたお話には、ひとりの女の人が出てきました。聖書を開いてみましょう（ヨハネによる福音書4章7～26節）。これは、ユダヤ人のイエスさまが、サマリアというところに旅して来て、疲れて井戸の傍に座っている場でした。時間はお昼の12時頃。暑いときでしたね（輪読をする）。

Q：サマリアの女の方は、イエスさまが話しかけてこられたことに驚きましたね。それはどうしてですか？

A：ユダヤ人はサマリア人と交際しないから（9節）。

Q：イエスさまは女の人に何を与えることができるとおっしゃいましたか？

A：永遠の命に至る水（14節）。

Q：イエスさまは女の人の生活を言い当てましたが、どのようなことでしたか？

A：過去に5人の夫があったが、今連れ添っているのは夫ではないということ（18節）。

Q：そのような生活の中で、女の方はどのような気持ちだったでしょう？

A：人を信じられない、さみしい、孤独感……etc.

Q：この女の方は、5人の夫と別れてきたのだから、それまでに様々な出来事があっただろうね。そして、この「5人の夫」というのは「5体の偶像の神々」を表しているとの指摘もあるので。なかなか幸せになれない生活の中で、神さまをも取り替えて生活してきたんだね。

Q：まことの神さまと繋がっていれば、わたしたちは渴くことはありません。そのことを、イエスさまはこの女の人にも教えました。わたしたちも神さまにしっかりと繋がり、それを喜んで生きていきたいですね。

【目標】

神の栄光をあらわすとはどういうことなのかを学ぶ。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方向的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 改めて御言葉に取り組む**①自分の渇きに気付かない私たち**

ヨハネによる福音書4章11,12節。この女性は、今自分が渇いていることに気付いていない。その状況をそのまま見れば一目瞭然だが、渇いているのは自分ではなくて主イエスの方で、水を与えるのは、水を汲む道具と水瓶を持っているこの私の方だろうと思っている。サマリアの女性も、この私たちも、自分が抱えている根本的な渇きに気付かず、そこから目を伏せることもする。

②普通の飲み水ではない水

主イエスのおっしゃる水とは、普通の液体の飲み水ではない。いくら名誉あるヤコブの井戸から汲んだところで、その水を飲んでも、人は誰でもまた渇く。そういう意味での、のどの渇きを潤す水はサマリアの女性のもとにあったかもしれないが、主イエスは、魂の内側の、あなたの命は、渇いていないのか？ 枯れない泉、渇かない命の水脈に、あなたの魂は繋がれているのか？と問われる。

③能動的に自分を開くこと

他の箇所では主イエスは、「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。」と言われた。

病人が、医者に傷ついた幹部を見せなければ、医者には治しようがない。そういう私たち自身が一番問題であるところこそ、主イエスは私たちと出会ってくださる。主イエスは、「あなたの夫をここに呼んできなさい」と言われて、その言葉によって女性に、あなたが深く関わりながら隠しているものを、わたしの前に持ってきなさい。あなたを不安にさせているもの、一番水を必要としている渇いた部分を差し出しなさいと言われた。このあと、主イエスとサマリアの女性との話題は礼拝のことに及ぶが、そういうありのままの私たちが、この心を裸にして神様に会って、そこにある渇きを鎮めていただける場所こそが、礼拝という場である。最初は、主イエスが、このサマリアの女性を必要とされて、夫の問題を通して、彼女の渇きを露わにされたが、この御言葉の終わりでは、この女性の方から主イエスを求めた。彼女自身が隠していたその問題は、最後には、伝道のための証しとして用いられ、彼女の弱さが、最後には神様の恵みの強さを豊かに現わす場所となった。主イエスとの出会いによって、彼女の人生は、それまでとは全く違ったものにされた。主イエスとの出会いとは、こういうもの。一番深い、私たちの一番恥ずかしいところで、主イエスは出会ってくださる。

3. 生徒と一緒に考える

教師自身にとって、「自分の中にある渇き」とは、どんなことなのか？それを生徒と分かち合う。

Q：疑問は解けましたか？

Q：命の水とは何ですか？ その水はどこから来るのですか？

Q：これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト

ヨハネによる福音書 4章31～42節

子どもと親のカテキズム 問2

1. 永遠の命に至る食物 (31～38節)

4章27～42節には、サマリアの女の救いにともなうサマリア伝道の豊かな実りが記されているが、途中に31～38節がはさま込まれており、この部分はまことの食物ということをめぐる主イエスと弟子たちとの対話である。そのように、ひとつの記事の中に別の記事が挿入されているかのようなかたちになっている箇所だが、サマリアでの収穫を語る記事も、食物をめぐる問答も、問いかけている主題は共通している。それは伝道である。ふたつの記事から、私たちは伝道のわざについて大切な事柄を学び取ることができるのである。

まず31～38節である。ここには、食物の理解についての主イエスと弟子たちとの間の顕著なへだたりを見ることができる。主イエスがサマリアの女と会話しておられたちょうどそのとき、弟子たちが帰ってきた。そして、主イエスに食事を勧めた。そのとき主イエスは彼らに、「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」と言われた。彼らはこの御言葉に戸惑ってしまったのである。

食べ物、それは生きる力である。食べ物を摂らなければ、人は生きていくことができない。ただ、弟子たちは肉体、地上の体を支える食べ物の調達をもっぱら考えていた。それで、主イエスのために食事をととのえることで、自分たちの使命は果たされたと思ったのである。お役に立てた、という誇らしい気持ちもあったかもしれない。

しかし、主イエスのお答えは意外なものであった。主イエスは、永遠の命に至る食べ物について語られたのである。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである」(34節)。

この福音書の6章では、主イエスはこのように言われる。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」(35節)。

人はイエス・キリストというパンにあずかるこ

とによって、真の命を生きることができるのである。永遠の命に至る食べ物とは、主イエスご自身である。

このとき弟子たちは、主イエスの御言葉の意味を悟ることができたであろうか。人を永遠に生かす、朽ちることのない食べ物があること、その永遠の食べ物であられるお方が天からくだり、世に來られ、今自分たちの目の前におられ、言葉をおっしゃってくださることを知っていたであろうか。

けれどもやがて、彼らは知ることになるのである。主イエスが十字架に死なれ、死に勝利して復活されたときに、このお方こそ自分たちを生かす食べ物であることを鮮やかに知るに至るのである。

地上の体を養う食べ物だけが食べ物ではない。永遠の命の糧がある。「わたしは命のパンである。あなたたちの先祖は荒野でマンナを食べたが、死んでしまった。しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない」(6章48～50節)。

このことを踏まえつつ、34節の御言葉から大切な事実を確かめたい。それは、委ねられた使命に生きることが生きる力、食べ物となるということである。主イエスですら、わたしの食べ物とは御父の御心を行い、御父の業を成し遂げることでありと言われるのである。

神に仕えること、神から託された務めを忠実に担い、果たすことが私たちの生きる力となる。自分自身を満足させるための人生はいかにさみしい。自分に仕えるために生きるのみでは、根源的な力は湧いてこないであろう。なぜなら、私たちの人生の目的は神を喜び、神の栄光をあらわすことにあるからである。神に仕えて生きることが私たちの喜びなのである。

2. 救いの喜びにかりたてられて (39～42節)

食べ物をめぐる理解だけではなく、伝道の業の

見方についても、主イエスと弟子たちとの間にはずれがあった。「あなたがたは、『刈り入れまでまだ四か月もある』と言っているではないか。わたしは言うておく。目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている」(35節)。

主イエスと弟子たちとは、同じ畑を見ている。弟子たちの目には、刈り入れはまだまだ先のように見える。しかし主イエスの御目には、畑はすでに「色づいて刈り入れを待」つばかりであった。

そしてこの御言葉は、まさに現実となった。長くユダヤ人との敵対関係にあり、憎しみと争いに明け暮れ、また真の礼拝の祝福を忘れ果てていたサマリア人たちが主イエスを信じるに至るのである。まさに、神の大いなる御業である。

しかも、このとき大きな役割を果たしたのは、うしろめたい過去を持つゆえに人目を避けるようにして生きてきた、また愛の不毛に悩み、人を信じることに失望していた一人の女性であった。主イエスのご自身の恵みをもってこの人と出会い、この人に寄り添い、まことの礼拝の真理を語り示し、罪の赦しと永遠の命の祝福を告げ、そしてご自分こそ待ち望まれた救い主であることを明かされたこのひとりの女性によって、サマリア伝道の

道が開かれていったのである。

彼女は主イエスとの対話を終えるやいなや、携えてきた水がめをその場に置いたまま、町に行って主イエスのことを伝え始める。救い主と出会ったことの喜びにかりたてられて、命の恵みに我を忘れて、そのようにしたのである。真に幸いなる人の姿がここにある。

まことに神は、人の目には不思議と映る御業をなさるお方である。サマリアの女は主イエスの証人、伝道者として用いられるのである。人びとから隠れるように暮らしていたつい昨日までの彼女とは別人のようである。人を信じることさえできなかったそれまでの彼女からすれば、驚くべき変化である。命の水の与え手、命のパンであられる主イエスとの出会いは、これほどまでに人を変えるのである。

主イエスをあがめて生きる。主イエスに仕えて生きる。そこでこそ人は人生の真の目的を見出し、生きる力を与えられるのである。主イエスを通して命の神とつながるときに、人は永遠に朽ちることのない喜びを生きる者とされるのである。

(木下裕也)

テキスト

ヨハネによる福音書 4章31～42節

子どもと親のカテキズム 問2

〔単元のねらい〕

神は私たちを救いの恵みへと招いてくださるのみならず、ご自身の器として召し出し、用いてくださる。サマリア伝道のために豊かに用いられたサマリアの女がその証人である。神の栄光のために生きる喜びがわけへだてなく与えられていることの恵みをわかち合いたい。

神さまに仕えて生きる

先週は、イエスさまがサマリアの女を救ってくださったことを見ました。イエスさまがまだこの人と話しておられたそのとき、弟子たちが戻ってきました。そして、イエスさまにお食事をどうぞ、と勧めました。そのときイエスさまはこうおっしゃったのです。「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」(32節)。

弟子たちには、この御言葉の意味がわかりませんでした。それは当然です。弟子たちはこの地上の体を養う食べ物のことを考えていたのですが、イエスさまはそうではなく、神さまがくださる永遠の命の糧のことを言われたのだからです。

イエスさまは言われます。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない」(6章35節)。「わたしは命のパンである。あなたたちの先祖は荒れ野でマンナを食べたが、死んでしまった。しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない」(6章48～50節)。

永遠の命の糧とは、イエスさまご自身のことであったのです。イエスさまは命のパンです。地上の体を養う食べ物だけが食べ物ではありません。地上の食べ物を受けるだけでは、人は救われません。イエスさまは十字架に死なれ、三日目に復活されました。この十字架と復活は、私たちを救うための御業であったのです。このことを信じるなら、私たちは罪を赦され、死に勝利し、永遠に生きるのです。「わたしは復活であり、命である。

わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」(11章25,26節)。

イエスさまを求めること、イエスさまを信じることは、地上の食べ物を得ることよりもはるかに大切なことです。イエスさまを信じて永遠の命を得ること。これが私たちの救いです。

イエスさまはまた、弟子たちにこのようにおっしゃいました。「わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである」(34節)。

食べ物とは、生きる力を与えるものです。食べ物を食べることで人の命は支えられ、生きていくエネルギーが生まれてきます。では、イエスさまにとって生きる力となったのは何であったのでしょうか。

それは、ご自分の使命に生きることでした。イエスさまの使命とは、父なる神さまに従い、神さまから委ねられたご用を忠実に果たすことでした。そのことがイエスさまにとって喜びとなり、また力となったのです。

私たちも同じです。神さまにお仕えて生きること、神さまからいただいた使命を忠実に担い、果たすこと。それが私たちの生きる力となります。なぜなら私たちの人生は神さまの栄光をあらわすためにあるのだからです。もう一度、「子どもと親のカテキズム」の問2を見ましょう。

問2 神さまと共に歩むとは、どのようなことですか。

答 まことの神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜び、神さまと人に仕えて歩むことです。

神さまの栄光をあらわすこと、神さまに仕えて生きること。そこに私たちの喜びがあります。そこで、私たちは生きる力を得るのです。

さて、そのように神さまのご用のために豊かに用いられたのが、あのサマリアの女です。この人はイエスさまを信じるまでは、暗闇の中を歩んでいました。人を信じることもできず、人目を避けるようにして暮らし、生きていくことに希望を持つこともできませんでした。

けれどもイエスさまはこの人にも出会ってくださり、この人をも救ってくださったのです。生きる望みを失っていたこの人が、命の水の源であるイエスさまを知って、命の水を受けて、新しい命によみがえったのです。偽りの神々に支配されていたこの人が、それらの神々から解き放たれて、霊と真理をもってまことの神さまを礼拝する人へと変えられたのです。大いなる救いの恵みへと招き入れられたのです。

それだけではありません。神さまはこの人を、イエスさまのよき知らせを宣べ伝える人、伝道者として用いてくださったのです。サマリアの人び

とは長い間ユダヤ人と争い、平和に生きる道を見失っていました。そして多くの偽りの神々に支配され、真に神さまを礼拝して生きる幸いを忘れ果てていました。

そのサマリア人たちに、イエスさまの福音が伝えられていきます。サマリアの女がイエスさまを伝えたためです。そして、多くの人びとが救われていくのです。

サマリアの女は、自分と話しておられたお方がイエスさま、救い主であられることがわかと、持ってきた水がめをその場所に置いたまま、町へと走り出していきます。そして、人びとに伝えるのです。「さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません」(29節)。

水がめを置いたまま、町へと走っていく。向こう見ずな、そそかしい人だともうかもしれない。けれども、この人はうれしかったのです。イエスさまと出会うことができた喜びに、我を忘れたのです。救われた喜びにかりたてられて、思わず走り出したのです。本当に幸せな人の姿がここにあるのです。

神さまは人を救われるだけではなく、救われた人に神さまに仕えて生きる喜びをも与えてくださいます。どのような人をも、ご自身の栄光のために用いてくださいます。サマリアの女は、そのことの証人です。私たちにも同じ喜びが与えられるのです。(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 4章36節

刈り入れる人は報酬を受け、永遠の命に至る実を集めている。

こうして、種を蒔く人も刈る人も、共に喜ぶのである。

〈ねらい〉

イエスさまのおっしゃる食べものとは、神さまの御心を行い、その業を成し遂げることであることを学ぶ。

〈展開例〉

Q：おはようございます。先週の続きですが、先週はどんな人が出てきたか覚えていますか？

A：サマリアの女の人。

Q：そうでしたね。イエスさまによって、孤独だったサマリアの女の人、本当の神さまを知り、イエスさまを信じるようになりました。実はそのとき、ちょうど弟子達が戻ってきて、ユダヤ人とは仲の悪いサマリア人の女の人と、イエスさまが話しているのをみて驚きました。そのあと、女の方は、町の人々にイエスさまのことを教えに行ったんだね。今日は、その続きの部分です。聖書を読んでみよう（ヨハネによる福音書4章31～42節）。

Q：食事をすすめられたイエスさまは、弟子達にどんなことを話しましたか？

A：「わたしにはあなたがたの知らない食べ物がある」（32節）

Q：そのイエスさまの言葉は、お弟子さんに伝わりましたか？

A：お弟子さんたちは意味が分からなかった。わたしたちが普段食べる食べもののことをイメージしていた。

Q：そうだね。わたしたちも「食べ物」と聞くと、ご飯やお菓子が思い浮かぶものね。では、イエスさまの言う食べ物は何かだったかな？

A：「わたしをお遣わしになった方の御心を行い、

その業を成し遂げることである」（34節）

Q：聖書に書いてあるね。食べ物を食べると、わたしたちは元気になります。生きていく力だね。イエスさまにとっての生きる力、それが神さまから与えられた使命に生きることだね。わたしたちも、神さまにお仕えて生きることができるかな？

A：礼拝をしたり、お祈りをしたり？

Q：そうだね。先週読んだカテキズムを覚えているかな？ 神さまと共に歩むことというのは、神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜び、神さまと人に仕えて歩むことです。みんなが毎週教会に来て、聖書を読んだり、礼拝をまもったり、お祈りをしているのは、神さまの栄光をあらわしていることになるね。神さまを喜んで、神さまに仕えていることにもなるね。

それから、人に仕えるというのは難しいかもしれないけれど、どんなことができるかな？

A：友だちに優しくしたり、兄弟の面倒を見たり、お母さんのお手伝いをしたり……etc.

Q：そうそう！ わたしたちがそのようにすることを、神さまは喜んでくださるんだね。

Q：イエスさまとお話ししたサマリアの女の人、このあと町へ行って、イエスさまのことを町の人に教えてあげました。人を信じられなくて、孤独だった女の人が、すごい変化ですね。

わたしたちも神さまに出会う喜びを、人に伝えていきたいですね。それはまだ難しいなあというお友だちは、自分のまわりのひとに、自分のしてほしいことをしてあげましょう。それも、神さまに仕えることのひとつだからです。

【目標】

神に仕えて生きるとは、ということなのかを学ぶ。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 改めて御言葉に取り組む**① 遣わされるということ**

神を知ることで、人は神に遣わされる存在になる。自分の力で人生を選び取って、生き抜いていくという生き方から、神様によって、この人生、この仕事、この持ち場に、派遣された者として生きるという新しい生き方の方向性がそこで与えられる。最近派遣社員の問題が社会問題化しているが、派遣社員の場合には正社員に比べて給与が安いとか、立場が弱いとか、何かと心細い面がある、しかし、神様から遣わされて生きるとは、逆に力強い後ろ盾の中を生きる生き方である。それは、たとえどこへ行くのか分からなくても、いつも自分の後ろに主イエスがおられる。そこから命を与える渴きを知らない水が絶えず注入されてくる。そういう力強い後ろ盾に支えられて生きること。その後ろ盾を得た人の生き方は力強く、自由であり、喜びにあふれている。まさにサマリア人女性の変化がそれを物語っている。

② 御心を行うとは？

ヨハネによる福音書4章31～34節。主イエスと弟子の会話が噛み合っていないが、主イエスは、ここで何か難しく、高尚なことを語られたのではなく、単純に、おいしい食べ物を食べた時と同じ、嬉しい表情を顔に浮かべられながら、「わたしをお遣わしになった神様の御心を行うことは、御飯を食べることのように嬉しいことなのだ、それは

幸せなことなのだ。これが私にとっての、何よりのおいしい食べ物なのだ」との思いを語られた。「神様の御心を行う」と言うと、それは厳格・厳粛なことで、リラックスできないというか、そのようなイメージで捉えてしまいがちな事柄かもしれないが、根本的に主イエスが捉えておられる、「神の御心を行う」ということは、悲壮感からするようなことではなくて、それは、弟子たちが買ってきた昼御飯を上回る、おいしい、元気の源となっていく食べ物であり、楽しみと、嬉しさと共に受け取る、霊的なご馳走である。

③ 刈り入れとは？

ヨハネによる福音書4章35～37節。目の前にある麦畑は、実際にまだ青かったのかかもしれないが、その麦畑を見ながら、主イエスはこの時そこに、別のものを見ておられる。主イエスの見方とは、あなたたちには、まだ四ヶ月もあって、まだこれを刈り入れるのは無理だと見える、そう思えるかもしれないけれども、神様の御心はそうではない。神様の力は、目の前の現実をも変えられる。私には、目の前の麦畑が刈り入れを待つ、金色の麦畑に見える。既に刈り入れは始まっていて、永遠の命に至る実が、既に集められている、という見方である。即ちここでの刈り入れとは、伝道を通して魂が救われ、回心者が起こされるということの意味している。

3. 生徒と一緒に考える

教師自身にとって、「神に仕える」とは、具体的にどんなことなのか？それを生徒と分かち合う。

Q：疑問は解けましたか？

Q：自分にとっての御心を行うとは、どういうことですか？

Q：自分は、どこに、何のために遣わされていると思いますか？

Q：これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト	ルカによる福音書 24章28～43節
子どもと親のカテキズム 問3	
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問30, 86 ハイデルベルグ信仰問答 問20, 21

問3 神さまと共に歩むために、罪人である私たちに必要なことは何ですか。

答 イエス・キリストを信じ、救われて、神さまの子どもとされることです。

〈子どもと親のカテキズムの解説〉

問1～5は、『子どもと親のカテキズム』全体の構成を示しています。問3は、「第一部 信じて歩む道」の内容をまとめています。

この『子どもと親のカテキズム』の最も大きな特徴の一つは、問1にあらわされています。「問1 私たちにとって一番大切なことは何ですか。」「答 神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです」。

「神様の子どもとして、神さまと共に歩む」ということが、このカテキズムの一つの大きなメッセージです。私たちは「神さまの子ども」とされている事実を確認し、確信へと導かれる。そうすることによって、「神さまと共に歩む」という、主体的な応答的人生へと生活をかけて生きる・歩むことにつながります。この「神さまの子どもとしての主体的応答的人生」へと、カテキズムの学びをとおして、子どもも親も導かれていかれたら本当に幸いです。

「歩む」という表現は、神さまに対して、主体的・信仰的な応答者として、応答的な人生をささげていることを言っています。そうした、主体的な信仰者としての応答的な人生は、何と言っても、「神さまの子ども」とされている、という事実をくりかえし確認し確信していくことが大切です。ここにこのカテキズムの一つの中心的な狙いがあります。

問3では、罪人の私たちが、神さまの子どもとされるためには、イエス・キリストを信じる必要がありますと言われます。イエス・キリストを知り、信じることによって、罪赦され、神さまとの永遠の間柄が回復されます。神さまとの永

遠の間柄が回復されるということは、すなわち、「神さまの子どもとされる」ということです。こうしたことが取り扱われています。

今日はその前半、イエス・キリストを信じることに焦点を当てます。信じるとは、主イエスを、罪を償う救い主として知ること。ただ知るだけでなく、この方ご人格、人生、お働きに全幅の信頼を置いて、信頼（信用）すること。信頼（信用）して、この方のゆえに神の子どもとされたのだから、感謝の応答をささげて生きる（歩む）決意と実行へと促されていくこと。こうした一連の、主イエス・キリストとの人格的な関係性がとても重要になってきます。

問3の「イエス・キリストを信じ」とは、もちろん、「イエスさまこそが私の救い主、メシア、キリスト、私の一切の問題に解決と答えを与えてくださる方である」と、認めることです。聖書を通して、また教会生活や祈りの生活を通して、「イエスこそキリストである」という事実をしっかりと認識することがまずは大切です。

前にも書きましたとおり、その事実を認識したなら、今度はその事実を知り、認識するだけではなく、その事実に関心（信用）を置くことへと導かれます。

その事実への信頼（信用）は、信頼し信用している救い主、主イエス・キリストへの献身へと向かう歩みへと導かれるでしょう。

こうした、「認識→信頼→献身」という一連の心の動きを「信じる」と言います。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

今日の聖書テキストは、大きく分けると二つに

分けられます。前半は24章28節から35節、後半は24章36節から43節です。いずれも、復活の主イエスが弟子たちと再会する場面です。

前半では有名なエマオの途上での出来事が物語られます。

二人の弟子たちは、旧約聖書全体からメシア(キリスト)は苦難を受けた後、栄光に入ることになっている、というエマオへの道すがら、復活の主イエスから説き明かしを受けます。そうこうするうちに、日も傾き、目的地に近づいたところ、主イエスはそのまま先に行かれる様子を示されます。そのとき、二人の弟子たちは、強いて復活の主イエスを引き留めます。それが、「一緒にお泊りください」という言葉です。

「一緒にお泊まりください」：これはヨハネ福音書15章では「わたし(イエス)につながってなさい」(ヨハネ15:4,5,7その他)、「わたしの愛にとどまりなさい」(ヨハネ15:9,10)という言葉と同じです。主イエスは、私たちのかかわりの中で、私たちが主体的に「主イエスにつながる」「主イエスとの愛の交わりの中にとどまる」ことを願い、促しておられます。「一緒にお泊まりください」とは、主の促しに素直に従っている弟子たちの心の姿勢があらわされています。

復活の主イエスと弟子たちのこのやり取りは、主なる神は、私たちに主体的な信仰の応答を引き出されることを示しています。私たちが、主体的に主のかかわりの中に自分を入れるようになる。そういう応答的な信仰者としての姿勢へと主ご自身が促しておられることが、このやり取りの中でもうかがい知れると思います。

「本当に主は復活した」：復活の主イエスは、弟子たちにご自身の復活の姿をあらわされました。弟子たちはその主との再会を喜びました。しかし、復活の主と顔と顔を合わせても、多くの弟子たちは、主の復活を信じられませんでした。そのことは、マタイ福音書でも触れられています。「さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた」(マタ

イ28:16～17)とありますように、復活の主イエスにお会いし、その復活のお姿を肉眼で見たとしても、それだけで、「イエスは苦難を受けて後栄光に入れられるキリスト、救い主で、その方によって、わたしたちの罪は処理され、私たちは救われる」という信仰へと導かれるわけではありません。

「主イエスの十字架と復活が、私たち罪人の救いにとって決定的なものである」という理解は、後に復活の主イエスが、ご自身がお約束くださったご自身の聖霊を弟子たち、私たちに派遣してくださるときに実現します。ルカはそのことを以下の主イエスの言葉で伝えています。「わたしは、父が約束されたものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまでは、都にとどまっていなさい」(ルカ24:49)。ヨハネはさらにはっきりと以下の主イエスの言葉でそのことを伝えています。「しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる」(ヨハネ16:13)。主イエスが、聖霊によって真理を悟らせてくださって初めて、弟子たちも私たちも、主イエスの十字架と死が、私たちの罪の赦しのためのものだったことが分かるようにされるのです。

このように、主イエスは、決定的にはご自身が約束された聖霊をお送りくださるときに、弟子たちをそして私たちを真理へと導かれます。しかし、復活の主は、エマオの途上で旧約聖書の解き明かしをされた時、弟子たちの心を開かれて、ご自分の死と復活について話されました。その結果、二人の弟子たちは、「わたしたちの心は燃えていたではないか」という経験をしました。

今、私たちは復活の主と顔と顔を合わせてお会いすることはできません。しかし、復活の主はご自分の死の意味、復活の意味、罪の赦しと救いとを、今も聖書の言葉をとおして、聖霊によって語ってくださいます。とりわけ聖書の解き明かしを聞いて、その内容に心動かされるとき、今も復活の主は、私たちの所に聖霊というお姿でいらして、救いの確かさを語りかけてくださっています。(芦田高之)

テキスト

ルカによる福音書 24章28～43節

子どもと親のカテキズム 問3

【単元のねらい】

神はキリストによって和解してくださった。信じるだけで救われる幸いを覚えよう。

信じる喜び

【法律違反の罰金】

私は、自動車を運転していて、スピードを出し過ぎてパトカーに捕まったことがあります。法律違反をしたので、罰金を払いました。法律に違反したら、罰金を払わなければなりません。

【イエスさまは罰金を支払ってくださった】

イエスさまは、私たちの罪の刑罰の罰金を、私たちに代わって支払ってくださいました。でも神さまに対する私たちの法律違反は、自動車のスピードを出し過ぎるなんてものではありません。

神さまが人間に与えておられる法律を「律法」と言います。その律法（法律）は、神さまが人間にくださったもので、「力を尽くして、私たちの主である神様を愛し、この神様を第一とする。それと、となりびとを自分を愛するように愛する」ということです。これが、神さまが私たちに与えておられる法律（律法）です。私たちは、この法律を毎日破る違反者です。神さまととなり人を大切にするよりも、すごく自分中心になっています。

こうして、私たちは毎日、神さまの法律を破り続けています。生まれてからずっと、毎日、この神さまの法律を破り続けているから、罰金は、たまりにたまっています。これからも死ぬまで、この法律違反と罰金はたまり続けます。

だから、自分では罰金を支払うことができません。罰金を支払えないと、ずっといつまでも神さまから離れて過ごさなければならない牢屋のような所に入らなければなりません。神さまは私たちが、そんなつらい牢屋に入らなくてもいいように、罰金を私たちに代わって、支払ってくださいま

した。どのようにしてだと思いませんか。

ご自分の一番大切なお子様である、イエス様を人間にして私たちの所に送ってくださることによってです。イエスさまは、私たちに代わって、父なる神さまの法律を完全に守ってくださいました。そんなイエスさまが、十字架にかかって、ご自分の命を私たちのために、身代わりの罰金としてささげてくださいました。イエスさまの命は、限りない値うちのある命です。ですから、罪人全員の罰金を支払っても、まだおつりがくるほどの無限の値打ちのある身代わりの命、無限の値打ちのある身代わりの罰金でした。こうしてイエスさまは、私たちのために、罰金を支払ってくださいました。これがイエスさまの十字架の意味です。

【イエスさまの復活】

こうして十字架にかかったイエスさまが、死んで三日目の朝、よみがえられました。どうしてでしょう。「御子イエスよ、あなたの十字架の死は、全ての罪人のための身代わりの罰金として十分です。わたしは、あなたが支払った、すべての罪人のための身代わりの罰金を、完全に満足して受け入れました。その完全に満足しているしるしとして、あなたを復活させます。あなたの復活は、あなたがささげた身代わりの罰金が、完全にわたし、父なる神を満足させていることの証拠です」。こうして、父なる神さまは、御子イエスをよみがえらせてくださいました。

これが復活の意味です。もちろん、他にもイエスさまの復活には、もっと深い意味があります。でも、私たちの罰金の身代わり、という点でも、

とても大きな意味があります。

【弟子たちに現れる復活のイエスさま】

イエスさまは、本当に復活されたことを弟子たちに分からせるために、復活の後、何度も弟子たちにあらわれられました。その中の一つの場面が、エマオの村へ行くときに弟子たちにご自分をあらわされた出来事です。二人の弟子たちはイエスさまが十字架で死なれたことを悲しみながら、エマオ村に向かって歩いていました。そうすると、復活されたイエスさまが、いつの間にかその二人に寄り添って歩かれていたのです。でも、弟子たちはその御方が復活のイエスさまとは、全然気が付きませんでした。歩きながら、イエスさまは聖書に書いてある、ご自分が苦しみを受けて、栄光に入ることについてお話しなさいました。

そうこうするうちに、三人はエマオの町に近づきました。イエスさまは、そのまま、先に行かれる様子でしたが、二人の弟子は無理に引きとめました。「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と。

「一緒にお泊まりください」とは、「私たちと一緒に居てください。あなたと一緒に居たい、離れたくない、もっと、聖書にある救い主の話を聞かせてください」という弟子たちの気持ちです。

宿に着いて、イエスさまはパンをとり、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになりました。すると、二人の目は今まで見えなかった、「今、一緒にいらっしゃるのは、よみがえられたイエスさまだ」ということが見えるようにされたのです。「イエスさまだ」と分かったとたんに、イエスさまは姿を消されました。

【ほかの弟子たちと共に】

二人の弟子たちは、エマオからすぐに他の弟子たちの居るエルサレムに急いで戻りました。エル

サレムに着いて、他の弟子たちに会うと、他の弟子たちも言っていました。「本当に主イエスは復活されて、シモン・ペトロに現れられた」と。

皆でこう話していると、よみがえられたイエス様ご自身が、弟子たちの真ん中に立って、「あなたがたに平和があるように」と言われました。そして、本当にご自分がよみがえって生きておられることを弟子たちに示されました。魚まで食べてお見せになりました。本当によみがえられたことをはっきりと弟子たちに示すためです。

【私たちと復活のイエスさま】

私たちは今、復活のイエス様をこの目で見ることにはできません。でも、聖書のお話を教会で聞いたとき、イエスさまが私のために十字架にかかってくださったこと、また、私の罪の弁償金としてイエスさまの死は十分に値打ちがあること。その証拠に父なる神さまがイエス様をよみがえらせられたこと。こういうことを聞いて、「イエスさまの十字架の死と復活は、私のためだ」と知り、信じて、とても嬉しくなることがあります。

実はそのとき、復活のイエスさまが、聖霊によって私たちと一緒に居てくださるのです。

あの二人の弟子たちも、イエスさまが、私たちの罪の身代わりのために十字架にかかって死んで、よみがえられたお話を聞いて喜びました。

今もイエスさまは、聖霊によって、私たちの心に語っておられます。「わたしはあなたの罪が赦されるようにと、十字架にかかって命を弁償金としてささげました。このわたしイエスに信頼なさい。わたしの十字架と復活には、あなたのすべての罪を赦し、あなたを父なる神さまの子どもにする力があります」と。今、そう語っているイエスさまの御声に心の耳を傾けましょう。

(芦田高之)

【今週の暗唱聖句】 ローマの信徒への手紙 3章22節

すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。

そこには何の差別もありません。

〈ねらい〉

イエスさまを信じ、救われることの喜びを知ること。

〈展開例〉

Q：おはようございます。今朝は、こどもカテキズムの問3を学びましょう。問3 神さまと歩むために、罪人である私たちに必要なことは何ですか。

A：イエス・キリストを信じ、救われて、神さまの子どもとされることです。

Q：はい、そうですね。覚えられる人は、このカテキズム問3も覚えてみてね。実は、問1でも「神さまの子ども」という言葉が出てきました。みんなは神さまの子どもですか？

A：はい。多分そう。わからない……etc。

Q：ちょっと難しい質問だったかもしれないね。問3では、イエスさまを信じることが神さまの子どもとされることだと教えているね。

Q：イエスさまは、復活されて天に昇られました。だから、今はわたしたちの目には見えません。だけど、イエスさまはわたしたちと共にいてくださいます。今日の聖書はルカによる福音書24章28～43節です。イエスさまは、神さまの律法を守れないわたしたち、罪のあるわたしたちに代わって、十字架で死なれました。それ以外に、わたしたちが神さまに赦される方法はありませんでした。イエスさまが復活されたということは、わたしたちの罪が赦された、信じる者は神さまの子どもですよという意味です。神さまの前で罪人でしかなかったわたしたちが、イエスさまを通して、神さまの子どもとされるなんて、すごいことだね。

では、聖書を読んでみよう。これは、イエスさまが十字架にかけられたあとのお話。お弟子さんのふたりが、イエスさまの話をしながら、エマオという村まで歩いていたとき、復活されたイエスさまが現れ、話に加わり、一緒に歩きました。ところが、お弟子さんたちは、それがイエスさまだと気づけなかった。先月イースターのお話を聞いたね。あのときのマリアさんたちは、お弟子さんたちに「イエスさまは復活した」と教えてあげていたのに、弟子たちは気づけなかったのです。イエスさまは、お弟子さんたちに、旧約聖書に書かれているご自分の話を始められました。その続きです。

Q：お弟子さんたちは、先に行こうとするイエスさまに何と言っていたかな？

A：一緒にお泊まりください（29節）。

Q：そうだね。これは、イエスさまがお弟子さんたちに言っていた「わたしにつながっていないさい」という言葉と同じ言葉なんだ。お弟子さんたちは、あなたとつながりたい、一緒にいたいと心から願っていたんだね。

お弟子さんたちは、イエスさまに気づいたかな？

A：食事のときに気づいたが、イエスさまは見えなくなってしまった（30,31節）。

Q：イエスさまが本当に復活したと、お弟子さんたちは心から喜びました。急いで、他のお弟子さんたちにも伝えに行きました。

イエスさまを信じるということは、イエスさまが十字架にかかり、死なれたのは自分のためだ。わたしの救い主はイエスさまだ、と信じることです。

【目標】

信じることによって与えられる喜びとは、どのようなものなのかを知る。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 改めて御言葉に取り組む**①主イエスに気づかない弟子たち**

ルカによる福音書24章16節に、弟子たちの目が遮られていたことが記されている。なぜか？それは諦めていたからである。彼らは主イエスの十字架の死を知り、ガッカリしていた。主イエスに期待し、従って弟子になったのだけれども、でも結局、あの方は死んでしまった。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になる。主イエスのような方であっても、死んでしまえば、もう終わりであるというのが、私たちの常識であり、弟子たちは、その自分たちの小さな考えや経験の中に、主イエスの力とその言葉を押し込んで決めつけてしまっていた。

②復活された主イエスが聖書を教えてくださることで、弟子たちの目が開かれた

ルカによる福音書24章25～27節。「預言者たちの言ったことすべて」とは、具体的には旧約聖書のこと。その聖書によれば、メシヤ（救い主）は苦しみを受けたのちに栄光に入ると言われている。十字架の死は無意味な幕切れなのではなく、この事によって、神はあなたがたに救いを得させようとされている。そのように主はおっしゃって、旧約聖書の言葉を、弟子たちに教えられる事で、御言葉によって、弟子たちの遮られた信仰の眼を開いてくださる。

③信仰の喜びの根拠

ルカによる福音書24章32～34節。弟子たちは、復活し、生きておられる主イエスと、ここで出会った。そして時を移さず、一目散にエルサレムに戻って行く。主イエスが歩まれ、死なれた場所から、諦めと落胆の中をここまで歩んできた彼らは、もはや落胆の中にはなかった。十字架と復活によってイエス・キリストは、神の救い主独自の仕方、また主イエスにしかできない仕方、死を滅ぼされた。死は終わりではなくなった。私たちの救い主は、今、益々力強く生きて、共におられるということ、彼らは知った。

キリスト者とは、あるキリスト教という理念に迎合した人の集まりではなく、今も生きている一人のお方、復活し、今も生きて働いておられるイエス・キリストに、結び付いて、この方とひとつになって生きている人、そしてこれからも主と共に生き続ける人のことを言う。クリスチャンとは、復活のキリストに出会って、もう死によっては殺されることのない人々のことを言う。信じる喜びとは、私たちの罪の赦しのために十字架に架かり、しかしそこから、私たちの復活の先陣を切って復活された、主イエス・キリストとの出会いと、そこから来る希望、励ましに根拠を置いている。この主イエスを信じる時、この方は私たちに、死やそこから来る落胆に囚われない、命の喜びを与えてくださる。

3. 生徒と一緒に考える

教師自身にとって、「信仰を持つことの喜び」とは、具体的にどんなことなのか？それを生徒と分かち合う。

Q：疑問は解けましたか？

Q：自分にとって神を信じるとは、どういうことですか？

Q：そこに喜びはありますか？

Q：これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト

ルカによる福音書 15章11～24節

子どもと親のカテキズム 問3

参照教理問答

ウエストミンスター小教理問答 問33, 34

問3 神さまと共に歩むために、罪人である私たちに必要なことは何ですか。

答 イエス・キリストを信じ、救われて、神さまの子どもとされることです。

〈子どもと親のカテキズムの解説〉

問1～5は、『子どもと親のカテキズム』全体の構成を示し、問3は、「第一部 信じて歩む道」の内容をまとめています。このカテキズム最大の特徴は、問1にあらわされています。「問1 私たちにとって一番大切なことは何ですか」。「答 神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです」。

今日の問3は、この問1と実に密接な関係があります。「問3 神さまと共に歩むために、罪人である私たちに必要なことは何ですか」。「答 イエス・キリストを信じ、救われて、神さまの子どもとされることです」。

罪人である私たちは、罪が赦される必要があります。そのために、問3の答の前半では、「イエス・キリストを信じ、救われて……」と、罪の赦しと救いの根拠が述べられています。罪の赦しの根拠は、イエス・キリストの十字架の死と復活です。しかし、罪の赦しは「神さまの子ども」とされるために必要な条件と言ってもいいでしょう。

何のための罪の赦しでしょうか。なぜ、罪は赦されなければならないのでしょうか。その答えは、いくつか挙げられるでしょう。しかし、最も大きな罪の赦しの目的は、以下のことでしょう。「神さまと私との本来あるべき間柄が回復されるためである」、また「本来の親子関係へと『壊れた親子関係』が回復されるためである」ということです。

神の家族の一員とされ、永遠に「神さまの子ども」として神さまと共に歩む。ここに罪の赦しと救いの目的があります。地上の親子関係は、良好であってまあ、罪人である親ですし、罪人であ

る子です。そこには完全に良好な親子関係は見出すことはできません。しかし、天の父なる神は完璧な親です。この御方との親子関係の中を、神さまの子どもとして生き生きと応答して生きる。ここに、救われた者の目的、光栄、ゴールがあります。

このカテキズムは、「神さまの子どもとして、神さまと共に歩む」という、信仰者としての非常に主体的な歩み、具体的な生活、生き方が強調されています。そこには、「自分が何者か」という自己認識を明確に持つ必要が出てきます。自分は「神さまの子どもである」という自己認識をどれだけ明確に生き生きと持つことができるか。これは、本当に大事なことです。神さまから子どもとみなされ、神さまの子どもとしての身分が一方的に与えられている。その自己認識を明確に持つとき、この光栄・特権・栄誉にどう応えていったらいいか、という信仰者としての実に前向きな姿勢が生まれてきます。

この実に前向きな姿勢で、力の限り、応答して自分の人生を生き抜いていく。ここに救われたキリスト者が、神さまの子どもとして具体的に自分の人生を、主なる神様にささげて生きていく醍醐味があります。神さまの子どもとされた者として、「食べるにしろ飲むにしろ、何をするにしても、すべて神の栄光をあらわすために」生きる。ここに神の子とされた者の本当の生き甲斐があります。

この光栄な神の子どもとしての人生を日々ささげていくうえで、どうしても必要なことが、「イエス・キリストを信じ、救われて、神さまの子どもとされることです」。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

今日の聖書テキストは、大きく分けると二つに分けられます。前半は15章11節から19節、後半は20節から24節です。大変有名な、いわゆる「放蕩息子のたとえ」です。

前半は、第息子が父の家を飛び出して、放蕩三昧を尽くし、ついに進退極まり、父のもとに帰ることを余儀なくされる過程が物語られています。

後半は、ぼろきれのような状態で戻って来る第息子を、思いがけない熱愛をもって父親は懷に迎え入れる、という次第が物語られています。

今回は三つの黙想の材料を提供いたします。

第一は、第息子の状態です。15章全体が三つの譬によって、「失われたものが、本来あるべき所に戻って行くことの幸い」を物語ります。いずれも原文では「本来ある（＝居る）場所から見失われる、無くなる、いなくなる」という意味です。これは聖書で「滅びの状態」を表現する言葉と同じです。

本来の居場所から逸脱してしまっている。本来居るべき場所からかけ離れたところにいる。これを聖書では、「失われた状態」とか「滅びの状態」といいます。

この第息子は本来居るべき場所である、父のもとから遠く離れて好き放題に生きていました。この、本来の居場所から遠く離れている状態を、主イエスはこのたとえの中で、父の言葉を用いてこう表現しています。「この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ」と。

この本来の居場所から逸脱して生きている状態のことを、主イエスはザアカイの時も同様の言葉を用いて、こう言っておられます。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。人の子は、失われたものを探して救うために来たのである」（ルカ19:9,10）。

第二は、父親の思いがけない迎え入れについてです。自分の所からいなくなって、滅びの状態にある我が子が、自分の所に戻って来る。そして、

本来の親子関係の中に回復される。ここに、父親である神さまの悲願がある。そのことを実現するために、最愛の御子を十字架につけ、罪の贖いをさせ、また、この御子によって失われた状態の我が子呼び集めさせる。この「父・子・聖霊の愛の熱意」が、聖書全体の中心メッセージです。

ですから、失われた状態のこの第息子が戻ってきたとき、父親は思いがけない喜びの行動に出ます。以下のとおりです。「……ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。……父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう』……そして、祝宴を始めた」（ルカ15:20～24）。

失われた状態のものが、父の懷に帰ってきて、再び、親子の状態に回復される。主なる神にとってはこれほど嬉しいことはなく、そのためにだったら、何でもする。そして、そのことが一人の失われた者の上に実現したとき、主なる神は限りなく喜び、祝いの宴が繰り広げられる。ここに、主なる神の悲願を見い出すことができます。

第三は、「放蕩息子」という表現です。英語では、「放蕩息子」のことを“Prodigal Son”と言います。“prodigal”とは「放蕩」という意味もありますが、同時に「度外れた気前の良さ」という意味もあります。私たちは、放蕩三昧の息子のたとえとして、この個所に小見出しをつけて語ります。

しかし、実は神さまこそが、限りない忍耐と、度外れの気前の良さをもって私たちが救われ、神の子どもとなるために、度外れたことをしてくださる、prodigalなお方です。そのために、ご自分の最愛の独り子でさえ犠牲にしてくださいます。そのために、限りない忍耐をもって、私たち失われた状態の神の子どもたちを呼び続け、捜し求め続け、ご自身のもとへ帰って行くのを待ち続けていてくださいます。

私たちが神さまの懷に戻って、神さまの子どもとしての歩みに回復されるのを、度外れた忍耐と気前良さによって、待ち続けておられる、私たちの父なる神こそ“Prodigal God”です。（芦田高之）

テキスト

ルカによる福音書 15章11～24節

子どもと親のカテキズム 問3

〔単元のねらい〕

神の子とされ、神の子として歩むことこそ人生のすべて。神の子の自覚を深めよう。

神の子とされた喜び

【放蕩息子】

皆さん、「放蕩息子」という言葉を聞いたことがありますか。難しい言葉ですね。「放蕩」とは、ぜいたくをして、お金やいろいろなものを自分の楽しみのために使って、好き放題のことをすることです。やってみたいような気がしますね。でも、相当な財産があっても、好き放題のことをやり続けると、財産はついには無くなってしまいます。それも、あっという間に無くなってしまいます。

今日の聖書の箇所は、好き勝手な生き方をした人のお話です。一人の弟息子がいました。この人は、お金持ちのお父さんから、財産を分けてもらって、お父さんの居る所から遠く離れた所に行って、好き放題の生活をしました。そうしたら、あっという間にたくさんのお金が無くなりました。

ちょうどそんな時、野菜やお米が全然とれない、飢饉という天候不順がやって来ました。だれもが食べ物に困りました。外国生活で、お金を使い果たしたこの「放蕩息子」は、だれよりも困りました。豚の世話をして、豚が食べるえさでもいいから食べたいと思うほど、生活に困りました。でも、だれも豚の餌さえくれません。

あるとき、気が付きました。「なんで、僕はこんな所にいるんだろう。食べ物もなく、こじきをしている。お父さんの所に帰れば、お父さんの所で大勢働いている人がある。お父さんの所に帰って、働く人の一人にしてもらったらいんだ」。そう考えたこの息子は、お父さんの所に帰ったら、こう言おうと、練習しました。「おとうさん。私は天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう、息子と呼ばれる資格はありません

ん。雇い人の一人にしてください」。こうして、お父さんのもとに戻って行きました。

【父親の喜び】

息子がお父さんの所に帰ってくると、まだ、その姿は遠くに離れていましたが、お父さんは、それが息子だと分かったのです。たぶん、毎日息子が帰ってくるのを待っていたのでしょう。息子が帰ってくるとしたら、きっとあの方向から帰ってくる、と分かっていた。だから、毎日、そっちの方向を眺めながら、息子の帰りを待っていました。きっと、お金も無くなって、着る物もボロボロで、もう汚れた雑巾のような状態で帰ってくるだろう、とも思っていました。だから、遠くの方でぼろ雑巾のようなかたまりがこちらに向かってくるのを見たとき、すぐに、お父さんは分かったのです。「わたしのあの息子だ!」と。

それで、お父さんの方から走り寄って行って、息子に抱きつきました。息子の体はきっと臭かったはず。豚と一緒にいたし、何日もお風呂に入っていなかったでしょうから。でも、お父さんはそんなことはかまいません。息子の首を抱きしめて、息子の顔にも首にもキスをしました。

息子は、今言わなければと、練習していたことを言いました。「お父さん、私は、天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません……」。

お父さんはこれ以上聞こうとしません。そして、召使いたちに言いました。「急いで一番良い服をもって来て、この子に着せなさい。手には指輪をはめてやりなさい。足にはちゃんと履物もはかせ

なさい。裸足で足もボロボロになっているから。お腹もすいているから、よく太った子牛を連れて来なさい。その牛で盛大なバーベキューをしよう。パーティーだ。この息子は、死んでいたのに生き返ったようなものだ。いなくなっていたのに、見つかって帰って来たんだから。パーティーだ。みんなで喜び、お祝いをしよう！」と。こう言って、大パーティをしてお祝いをしました。

【いなくなっていたのに見つかったのだから】

お父さんの所にいれば、息子は苦勞しなくてもよかったのです。食べる物もあるし、安全だし、お父さんの愛情の中で過ごせるし。お父さんの所から出て行くと、本当に守ってくれる人や、本当に責任もってお世話してくれる人はどこにもいなかったのです。そのことを、この息子は、痛い目や、つらい目にあったり、食べ物がなく死にそうになったりして、やっと分かったのです。自分のことを本当に責任をもって守り、お世話してくれるのは、お父さんだったのだ、と。

イエスさまはこのたとえ話で何を伝えたかったのでしょうか。一つは、このたとえ話で出てくるお父さんは、イエスさまであり、また父なる神さまである、ということです。このイエスさま、また父なる神さまから離れている状態のことを、「この息子はいなくなっていた」と言っています。

聖書で「滅びる」という表現が出てきます。それは、イエスさまや父なる神さまとの関係を持つとしない状態で生きている状態のことを言います。ある人は、お金が自分の面倒を見てくれると思うかもしれませんが、でも、お金は、死ぬ時、いくらたくさん持っていて何の助けにもなりません。他にいろんなものに頼って私たちは生きています。でも、最終的に責任を持って私たちのお世話をしてくださるのは、イエスさまであり、父なる神さまです。

イエスさまによって私たちの罪が赦される。そ

うすると、もう罪のことで、お父さんに対する具合の悪い思いが解決されます。それで、いつでもどこでも、父なる神さまの所に行って、「お父さん」と呼びかけることができます。そういう親子の間柄を私たちに与えたくて仕方ないのです。

その神さまの本心を教えるために、イエスさまはこの「放蕩息子のたとえ」を私たちに語ってくださっています。どんなに父なる神さまに対して悪いことをしていても、また、どんなに父なる神さまから離れていても、私たちが、父なる神さまの所に、また、イエスさまの所に、戻っていかうと決心して戻っていく。そうすると、イエスさまは、また、父なる神さまは、信じられないほどの喜びをあらわしてくださるのです。

神さまは、私たちが神さまに対して「お父さん」と呼んで、私たちが「神さまの子ども」として、神さまと一緒に生きていくことを心から望んでいらっしゃる。私たちが父なる神さまに対して、「神さまの子ども」となるためなら、なんでもする。それが、神さまという御方です。

【とびきり気前のいい神様】

神さまは、私たちが「神さまの子ども」として生きようになるためなら、何でもしてくださると言いました。一番大事な神さまのお子様である、イエスさまを十字架につけて、私たちと神さまの間にある、大きなとても深い溝を埋めてくださいました。私たちが神さまの所に帰って行きにくくなっていることも、私たちの罪や神さまを無視し続けていることも、すべて深い溝をイエスさまによって解決してくださいました。しかも、私たちが、神さまの子どもとして「お父さん」と呼ぶまで、とても忍耐深く待ち続けていてくださいます。

とびきり忍耐深くて、ご自身のお子様であるイエスさままで私たちのために与えてくださる。そんな、とびきり気前のいい御方。それが、私たちの父なる神さまです。 (芦田高之)

〔今週の暗唱聖句〕

ルカによる福音書 15章20節

そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。

ところが、まだ遠く離れていたのに、

父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。

〈ねらい〉

わたしたちの帰ってくるのを待ち望み、帰ってきた時には大喜びしてくださる父なる神さまの愛を知る。

〈展開例〉

Q：皆さんは悪いことをしてしまって、お父さんやお母さんに怒られたことはありますか。

A：(例) 兄弟げんかをする。兄弟をいじめる。親との約束を破る。門限を破る。

Q：今日の物語に出てくる一人の息子もお父さんに対して悪いことをしてしまいました。それは何でしたか。

A：お父さんから財産をもらって旅に出ました。しかし、それを全部遊びのために無駄遣いしてしまったのです。

Q：みんながこういう悪いことをしてしまったらどうするかな。

A：(例) 正直に言って謝るかな。むしろ悪いことをしてしまったら、それを何とか隠しておきたいと思うかもしれません。ばれたらしかられると思うからです。例えば、悪いテストの答えは隠しておきたいとか……。

Q：この息子はすぐにお父さんのところに帰りませんでした。どんな仕事をしたでしょう。

A：豚の世話です。豚は当時、汚れたものとされていました。彼はお腹がすくあまり、豚の餌さえ食べたいと思いました。

Q：その時、彼は我に返って思いました。どういうことを思ったのでしょうか。

A：「自分はこんなに腹ペコで死にそうだけれど、お父さんのところにはたくさんの食べものがあるじゃないか！」

Q：では彼は前と同じように自分が子どもとしてお父さんに受け入れてもらえると思ったのでしょうか。

A：いいえ。「お父さんに対してこんなに悪いことをしてしまった自分はもう息子と呼ばれる資格はない。雇い人の一人にしてもらおう」と思ったのです。

Q：では彼はその通りお父さんの雇い人になったのでしょうか。

A：いいえ。お父さんは息子の帰りをずっと待っていてくれました。そしてまだ遠くにいる息子を見つけて、走り寄り、抱きしめました。そして息子のために盛大なパーティーを開き、息子の帰りを喜び祝ったのです。

〈結論〉

神さまはここに出てくるお父さんのようなお方なのです。わたしたちがどんなに悪いことをしようとわたしたちの帰りをずっと待ち続け、帰ってきたならば大喜びしてくださるのです。それほどに神さまはわたしたちを愛してくださっています。そしてイエスさまはそのために、つまりわたしたちが罪赦され、神さまの子どもとなることができるために来てくださいました。本当はわたしたちが受けなければならなかった神さまからの罰をイエスさまが代わりに受けてくださったのです。イエスさまによって罪赦され、神さまの子どもとされる。これほどうれしいことはありません。

【目標】

自分が神の子として、歓迎されていることを知る。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 改めて御言葉に取り組む**①父のあまりにも深い息子への愛と許容**

ルカによる福音書15章11,12節。ここまでこの譬えを読んだ時点で、少々不自然に感じるのは、なぜ父が弟息子の無礼な要求にもかかわらず、財産を与えてしまうのか？ということ。そうせずにいれば、弟息子が身勝手な放蕩生活に身を持ち崩すことはなかったのではないかと。財産を与えるこの時点で、父親には弟息子の良くない行く末が、予想できていたはずである。しかし父は、強いて息子を家に留まらせはしない。父親には、これによって弟息子が苦痛にさらされると分かっているながらも、自分の愛を、愛する息子に無理強いするようなことは、できないのである。父親は息子からの侮辱を受け、痛みを負いながらも、弟息子を家に留め置かない。それは、たとえそれが息子のどんな身勝手であっても、その人生に口を挟むことを差し控えてしまうほどに、父はあまりにも息子を、深く愛し、尊重しているからである。

②父親の優しい歓迎

ルカによる福音書15章20～24節。弟息子は自分が地元の村に入るなり、両手を広げて、こちらに駆け寄ってくる父を発見する。そして弟息子がまだ、謝罪の言葉さえも口にしていない先から、父は、既に和解の接吻をして、彼に赦しを保証してしまう。叱るなど、とんでもない。父は喜びと共に息子を腕に抱き締めた。父を裏切った弟息子

が、今完全に赦されている。腕力ではなく、父親の愛が弟息子を抱き込んで、圧倒している。弟息子はその愛に抱きしめられて、無条件降伏して、もはや、もう何も求めずに、ただその優しさを受け取った。父はそれを指して、「この息子は、死んでいたのに生き返った。」と喜びの声を上げる。息子は、もう一度父の息子として戻ってきた。大きな優しさに包まれる時、どんな人でも、どんなに大きな失敗を犯した人でも、人は新しく生き直すことができる。

③神を知るとは優しさに出会うこと

キリスト教にとって、神を知るということは、何かの悟りを開くということではなく、特別な知識を手に入れるということでもなく、また何かの儀式のようなものを通過しなければならないということでもない。キリスト教において神を知ることとは、神の優しさに自分を開くということである。そして、神様の優しさに出会うということとは、自分が神様に受け入れてもらえるということを体験することにはかならない。神様の優しさに基づく私たちの受け入れは、連絡先を教えてくださいとか、友達になってくださるとか、そんなレベルではなく、私を、実の子どもとして受け入れ、私の家族、そして神様が私の父親になってくださるという、深い受入れである。そこには、神様による、この自分の全面的な肯定があり、全面的な、私に対する、赦しがある。

3. 生徒と一緒に考える

教師自身にとって、「神の子とされていることの恵み」とは、具体的にどんなことなのか？それを生徒と分かち合う。

Q：疑問は解けましたか？

Q：あなたにとって、神様はどんな存在ですか？

Q：神様に、優しい父親というイメージを当てはめて考えることができますか？

Q：これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト	使徒言行録 2章37～42節
子どもと親のカテキズム	問12, 34, 35, 44
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問88 ハイデルベルク信仰問答 問65～67

〈聖書テキストの解説と黙想〉

ペンテコステ、聖霊降臨祭を迎えるにあたって、約束の聖霊が降られることで引き起こされた出来事、特にペトロの説教を聞いた人びとに引き起こされた出来事に着目して思い巡らしましょう。

今回の聖書テキストを読んで、かつての私が心惹かれたのは、ペトロの説教を聞いた人々が大いに心を打たれたこと、それと、説教を聞いて約三千人もの人びとが洗礼を受けて、エルサレム教会員となったことでした。私が信徒の頃、80年、90年代、特に日本がバブル期の頃ですが、アメリカや韓国の教会成長論が日本でも流行し、私も影響を受けていた時期がありました。もし、自分が牧師だったら、ペトロのように多くの人びとを回心へと導くような説教をしたい！と望んでいました。しかし、あれから20年以上が過ぎ、社会状況も変化し、何よりも自分自身が神学校で訓練され、牧師とされて伝道と牧会で厳しい現実と直面する中で、この聖書テキストの読み方も違って来ました。

「子どもと親のカテキズム」は、「聖霊なる神さま」という章立てで、聖霊の教理を聖書全体から整理してくれています。まず問34です。

問34 イエスさまがなしとげてくださった救いは、どのようにして私たちのものとなるのですか。

答 私たちは自分の力で救いを手に入れることはできません。ただ聖霊なる神さまの働きによって、救いは私たちに与えられ、私たちのものとなります。

聖霊は、三位一体の神さまですが、父、子、聖霊でお働きに秩序があることを次におぼえましょう。

問12 三位一体の神さまは私たちの救いのためにどのように働かれますか。

答 父なる神さまは救いを計画し、子なる神さまは救いをなしとげ、聖霊なる神さまはその救いを私たちのうちに与えてくださいます。私たちの救いは初めから終わりまですべて神さまの恵みの働きです。

聖霊は、父なる神さまの救いのご計画に従い、イエスさまによる救いを私たちに与えるために働いてくださいます。そういうお働きの秩序の中で、聖霊も三位一体の神さまですが、御心のままに働いてくださるのです。つまり、私たち人間がそのお働きを自由に操作できるような存在ではないということです。私たちにはいろんな願いがありますが、全ては御心のままにです。

ペンテコステ、ユダヤの五旬祭の日に（使徒2:1）、三位一体の神さまのご計画通りに、約束の聖霊が降っておいでになりました。聖霊は、完全に純粋な霊で、目に見えないお方ですから、神さまの約束のとおり降っておいでになったことを知らせるために、目や耳に非常にセンセーショナルな仕方で出現なさいました（使徒2:2,3）。そして、聖霊は御心のままに働かれるお方であることを知らせるために、ペトロをはじめガリラヤ人の弟子たちが、他の国々の言葉で、イエスさまのことを証言し始めたのです（使徒2:4～11）。

それを聞いた人びとの中には、彼らが昼間からぶどう酒に酔っているのだとあざける者もいました（使徒2:12,13）。この誤解を解くために、12使徒を代表して説教したのがペトロでした。伝道は、人びとの誤解を解くことから始まると言われますが、まさにペトロの説教は伝道説教の模範と言えるでしょう。と同時に聖霊によってこの地上

に形造られたキリスト教会最初の説教と言えます（使徒2:14～36）。以上のような教理的黙想を前提に、今回の聖書テキストを読みましょう。

2:37 人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」と言った。

ペトロの説教を聴いた人びとの中には、50日前、ポンティオ・ピラトの法廷で、イエスさまに対して「十字架につけろ、十字架につけろ」（ルカ23:21）と叫んだ人もいたことでしょう。自分たちが十字架にはりつけにし、殺してしまったのは、神さまから遣わされたキリストであると思いついて、心打たれたのです。もちろん、聖霊のお働きを受けて、です。つまり、彼らの心に罪の自覚が生じたのです。

2:38 すると、ペトロは彼らに言った。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます」。

聖霊のお働きについて、「子どもと親のカテキズム」にさらに尋ねてみましょう。問35です。

「問35 聖霊なる神さまは、どのようにして私たちに救いを与えてくださるのですか。」

答 聖霊なる神さまは、私たちのうちに働いて、罪人と認めさせ、悔い改めて、イエスさまを信じるようにしてください。その信仰を通して、私たちを主イエス・キリストに結び合わせて救いを与えてくださいます」。

教理的には罪人が悔い改めることが出来るのも、罪赦されるのも、全ては、聖霊のお働きがあってこそです。そして、水による洗礼は、聖霊を注がれて、罪赦されたことのしるしです。しかし、ペトロは、「どうしたらよいのですか」という人びとの切実な問いに答えたのでした。罪を悔い改めることこそが今求められているのです。ペトロは、何も教理的に間違ったことを言ったのではありません。救われるために決断を迫ったのです。神学講義をしたのではないのです。

2:39 この約束は、あなたがたにも、あなたがた

の子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。

聖霊が注がれて、罪赦されるという約束は、神さまが招いてくださったことの結果であることが言われています。神さまによる選びのあらわれです。

2:40 ペトロは、このほかにもいろいろ話をして、力強く証しをし、「邪悪なこの時代から救われなさい」と勧めていた。

50日前は、イエスさまを見捨て、イエスさまが十字架で殺された直後は、他の弟子たちと一緒に引きこもっていたぐらいです。そんなペトロが、群衆に向かって、イエスさまのことを力強く証言したのです。聖霊の力によるとしか言いようがありません。

2:41 ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。

ペトロの説教を聴いた人びとが、罪を悔い改め、イエスさまを信じるようになって洗礼を受けました。その数は三千人ほど。聖霊による奇跡です。聖霊がご計画に従い御心のままに働かれたからです。三千人とは言いませんが、このような奇跡が起こったら、日本の教会は変わります。しかし、このペンテコステの出来事は、この地上にイエスさまの教会をはっきりと形造るための特別な奇跡です。最初のペンテコステ特有の出来事です。説教の実を結んでくださるのは、聖霊なる神さまです。数ではなく、説教を聴き続けている、特に目の前の子どもたち一人一人に聖霊が働いてくださることを祈り求めましょう。

2:42 彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。

聖霊によって形造られたキリスト教会の特徴があげられています。結局、みことばと礼典と祈りをもってイエスさまに結ばれている（「子どもと親のカテキズム」問48）愛の共同体が、私たちキリスト教会です。（長谷川潤）

テキスト

使徒言行録 2章37～42節

子どもと親のカテキズム 問12, 34, 35, 48

〔単元のねらい〕

今年も、ペンテコステ、聖霊降臨祭を迎えました。今回は、教会論的な視点からでなく、主に救済論的な視点から、聖霊の御業をおぼえましょう。聖霊の力強い御業に期待しながら、子どもたちの前にイエス・キリストがことばによってリアルに描かれますように。ことばによってイエス・キリストを伝えることにさらに修練したいと、ペンテコステにあたって改めて思われています。

聖霊による奇跡！！

子どもの教会（日曜学校）のお友だち、おはようございます。

さて、きょうは、ペンテコステです。4月5日にイエスさまが私たちの罪の赦しと永遠の命のために十字架で死んで復活してくださったことをお祝いしましたね。イースター（復活祭）です。その日から数えて、きょう、6月7日は50日目。今頃、日本の反対側のイスラエルでは、五旬祭といって小麦の収穫のお祭りをやっていると思いますが、キリスト教会では、約束の聖霊がおいでになって、キリストの教会が誕生したことをお祝いしています。聖霊降臨祭です。今からおよそ2000年の昔、イスラエルで、やはり、五旬祭を行っている日曜日のことです。復活なさったイエスさまが天に昇られる直前に約束なさったことが実現したのです。約束の聖霊が天から降っておいでになったのです。その様子は、「使徒言行録」の第2章1節から書き留められています。きょうは、「使徒言行録」の第2章37節から読みました。

イエスさまを見捨てたペトロは、聖霊によってカづけられ、みんなの前で、イエスさまのことを伝えました。みんなが、十字架につけて殺したイエスさまこそ、罪からの救い主キリストです！と伝えたのです。そうしたら、それを聴いていた人びとが「どうしよう？」と思って、ペトロにたずねました。なぜって、自分が神さまからのキリストを十字架につけて殺してしまったと自覚したからです。つまり、自分の罪深さを思い知ったの

です。自分は、神さまのみ子を殺すといった本当に取り返しのつかないことをしでかしてしまっただけ！

そのように心動かされた人々に、ペトロは勧めました。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます」。この時、この勧めを受け入れて、洗礼を受けた人が三千人ほどあったと書いてあります(2:41)。

ところで、きょう、ペンテコステは、普通、教会の誕生日です。きょうは、みんなで、教会の誕生をお祝いする日です。だけど、その教会も、聖霊が産んでくださいました。イエスさまの約束のとおり天から降っておいでになった聖霊が教会を形造ってくださいましたのです。ですから、それからおよそ2000年も近く、この地上にキリスト教会があるのは、また、この〇〇市に〇〇教会があるのは、目には見えない聖霊なる神さまが今も働いておられることの目に見えるしるしです。

その聖霊の一つの大きなお働きが、教会を形造って、保ってくださいますが、きょうは、その聖霊のお働きの中でも、私たち一人一人に行われるお働きをお話ししましょう。

さっき、ペトロの説教を聴いた人びとが、心動かされて「どうしよう？」と思って、ペトロにたずねたとお話ししました。実は、これってものすごい奇跡なのです。

みんな、奇跡というと、旧約聖書だと、海が真っ二つに分かれて、海の底に道が出来たお話を思い出すかもしれません。モーセの時です。あるいは、新約聖書だと、やはり、イエスさまかな？ イエスさまが病気を治されたり、悪霊を追い出されたり、嵐の海を静められたりといった奇跡でしょう。そういう奇跡は、人びとをビックリさせるでしょう。けれども、本当は、こういう奇跡はそんなにビックリするような奇跡ではないのです。何でもできる神さま、イエスさまだったら朝飯前です。私たちが本当にビックリしなければならない奇跡が実はあるのです。どんな奇跡かという、それが、人間が神さまに対する罪を認めること、罪を自覚することです。誰か人に対する罪ならば、あきらめて認めることがあります。だけど、神さまに対する罪を認めることが絶対にできないのが、人間なのです。

聖書は、人間誰でも罪人と教えています。人間が罪人になったのは、最初の人間アダムとエバの時です。最初、神さまは、人間を罪人に造られたわけではありません。しかし、最初の人間が、悪魔に誘惑されて、神さまの戒めに背くことで、人間は罪人になってしまいました。神さまに対する罪を絶対に認めることができないことは、罪を犯した直後の神さまとのやり取りにはっきりと示されています。アダムは、エバのせいにし、エバは、悪魔、蛇のせいにしました。自分の罪を絶対に認めなかったのです。罪を犯しても他人のせいにしてしまったのです。この傾向は今も同じです。人間は誰でも、神さまに対する罪を絶対に認めない。

人に対する罪も最初は認めない傾向が人間にはありますね。

そんな人間が、ペトロの説教を聴いて、自分の罪を認めたのです。ペトロの説教というのは、十字架につけられ殺されたイエスさまこそ、罪からの救い主キリストという証言ですが、このことを聴いて罪を自覚した。このことは、聖霊が働いてくださらなければ、絶対に起こらない奇跡です。もっと言うと、聖霊が働いてくださらないと、説教を聴くことはありません。そして、説教を聴いて心動かされることはもちろんありませんが、悔い改めることはありませんし、洗礼を受けることもありません。罪人が洗礼を受けて、教会の一員になる、このことは、昔も今も起こり続けている、聖霊による奇跡です。私たちが本当にビックリすべき出来事です。

けれども、神さまにとっては、やはり、朝飯前なことをおぼえましょう。神さまは、いろんな奇跡を起こすことがおできになります。ですから、石のように硬い心を肉のように軟らかな心に変えることもいとも簡単におできになるのです。聖霊は、神さまが選ばれ、招いてくださる人に働かれて、奇跡を起こしてくださるのです。

今も、聖霊は働いてくださっています。みんなが、聖書のお話に耳を傾けていてくれるのも、聖霊が働いておられるからです。さあ、きょうは、聖霊をおぼえるペンテコステ、聖霊降臨祭です。みんなを罪から救って、とっともすばらしい天国に入れようと、いつも働いてくださる聖霊なる神さまをおぼえて感謝をしましょう。（長谷川潤）

〔今週の暗唱聖句〕 使徒言行録 2章4節

すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

〈ねらい〉

ペンテコステに降った聖霊が人々を悔い改めさせ、イエスさまによる救い（罪の赦し）へと導いてくださったことを覚え、感謝しつつ聖霊のお働きを祈り求める。

〈展開例〉

Q：ペンテコステ（五旬祭）とは何の日でしょう。

A：聖霊が降ったことを記念する日です（「聖霊降臨日」とも言われます）。復活されたイエスさまは天に昇られる前、弟子たちに聖霊が降ることを約束されていました（使徒1:8）。その聖霊がペンテコステの日、弟子たちの上に降ったのです。

Q：聖霊が降った時、弟子たちは何をしましたでしょうか。

A：いろいろな国の言葉で神さまの偉大な業を語り始めました（使徒2:4～11）。

Q：人々が突然いろんな言葉で話し始めたらみんなはどう思うかな。

A：きっとびっくりするよね。当時のそれを聞いていた人たちもとてもびっくりしました。そして中には「あの人たちは、お酒に酔っているのだ」とばかにする人々もいたのです（使徒2:12, 13）。

Q：ペトロさんはそういう人たちに向かって何と言いましたか。

A：「この人たちは酒に酔っているのではありません。そうではなく旧約聖書の約束通り神さまが聖霊を注いでくださったのです。その聖霊に満たされて彼らは語っているのです」（使徒2:14～21）。

Q：またペトロさんが語ったのはそれだけではありませんでした。誰のことをお話しましたか。

A：イエスさまのことですね。

「イエスさまは神さまから遣わされた方でした。しかしあなたがたはそのイエスさまを十字架につけて殺してしまいました。しかし、神さまはそのイエスさまを復活させ、メシア（真の王）となされたのです」（使徒2:22～36）。

Q：ペトロの説教を聞いた人々はどのような反応をしましたか。

A：大いに心を打たれ、「わたしたちはどうしたらよいのですか」と言いました（使徒2:37）。

Q：ペトロは何と答えましたか。

A：「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます」（使徒2:38）。

〈結論〉

こうしてペトロの話聞いた多くの人々、何と三千人もの人々が洗礼を受け、仲間に加わったのでした。これは驚くべきことです。

わたしたち人間はなかなか自分の罪を認めようとしません。しかし、ペンテコステに降った聖霊のお働きによって多くの人々が自分の罪を認め、悔い改め、イエスさまのことを信じたのです。そうして罪を赦していただけたのです。

ペンテコステに降った聖霊は今も働いておられます。聖霊のお働きによってわたしたち一人一人にイエスさまが成し遂げてくださった救い、罪の赦しが与えられるのです。このことに感謝しつつ、これからも聖霊のお働きを祈り求めてゆきたいと思えます。

【目標】

聖霊降臨の意味ついて理解する。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 改めて御言葉に取り組む**①神様はどこにおられるのか**

ペンテコステは、その「神様とはどんなお方か」ということを考えると同時に、特に、「神様はどこにおられるのか」ということを考える時。宇宙よりも大きな神様は、同時に、今からおよそ2000年間にユダヤ人として地上に生まれた、イエス・キリストに等しい神であり、しかもその神が、ペンテコステの日より、御自分の霊を私たちの内側に送ってくださり、この小さな自分のこの小さな胸の中、魂の中に、宿ってくださった。天におられる神様が、空よりも広い、宇宙よりも大きい神様が、誰よりも近い間合いに入ってきてくださって、私の心の内側に宿って、そこで生きてくださる。それが、ペンテコステに起こった奇跡。

②カラフルな聖霊

そしてその神様の霊は、私たちを画一化するモノトーンな霊ではなく、強制力を持って働く霊でもなく、私たちの多様性を用いてくださるカラフルな霊。私たちの間に生まれる違いは、しばしば

私たちの一致を妨げる大きな壁になる。考え方が違う、理解が違う、立場が違う、出身が違う、実績が違う、能力が違う。言葉の違いの他にもある、色々な違いが、分裂を生み、中心と辺境を生み、仲間外れを生み出したりする。けれども私たち一人一人に宿ってくださって、そこでカラフルに働いてくださる聖霊なる神様は、ここは中心で、ここはそうでないとか、あなたの国籍や、しゃべっている言葉は重要だけど、その他の人は重要ではないとか、そういう線引きを決してなさらない。

教会という場所は、不思議な場所である。集っているそれぞれの出身やバックボーンも全く様々で、老若男女、いろいろな年代の方が集っている。そういう意味で、私たちは本当にバラバラだが、しかし「ひとつなる」キリストの霊を内に持つ、「違う」人間の集まりである。その違いは、私をさらに豊かにする違いであり、それは、それぞれの人がキリストの御霊によって神様から与えられた違いであり、豊かさであり、それは私たちが互いに喜び合うことのできる喜びである。

3. 生徒と一緒に考える

教師自身にとって、聖霊を受ける、聖霊に宿っていただくということは、如何なることなのか、自分の経験を生徒と分かち合う。

Q：疑問は解けましたか？

Q：聖霊なる神とは、どんな神様だと思いますか？

Q：これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト

使徒言行録 2章41～47節

子どもと親のカテキズム 問4

参照教理問答

ハイデルベルク信仰問答 問86～91

問4 神さまの子どもとして歩む生活で、だいじなことは何ですか。

答 神さまが、ご自分の子どもとして集めてくださった教会の生活を大切にすることです。毎週主の日に神さまを礼拝し、祝福をいただき、世界に送り出されて神さまに仕えて歩むことです。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

ペンテコステの出来事の後、ペトロの説教を聞いた人びとは、大いに心を打たれて、ペトロとはかの使徒たちに、「わたしたちはどうしたらよいのですか」(2:37)と尋ねた。

そして使徒たちの勧めに従い、悔い改めて、キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦され、聖霊によってキリストとひとつに結び合わされて、キリストの体である教会となった。

実にキリストを信じるとは、教会になることなのであり、それ以外ではない。「仲間に加わった」(41)とは、キリストを介してつながりあうキリストの体の一部分同士となった、という意味に他ならない。

それは、キリストの復活の命をいただいて、「神の子ども」とされた者たちが、キリストを筆頭とする「神の子どもたち」同士として、父の御前に生きようになった、という意味だとも言い得る。

そのように、信じる私たち、神の子どもとされた私たちこそ教会である。契約の子どもたちはこのような意味での教会の一部分（教会全体と親と本人の信仰告白への歩みを通して）であり、また未信者の子どもたちは洗礼を受けて教会の一部分となるように召されている存在である。

召されている存在は、真実の召しの中にあるなら、必ず信仰告白、洗礼を経て教会となる。教会は先に召された者として、召されている子どもたちのためにこの福音の約束を聞き続け、またこの福音の約束を告げ知らせ続ける。「この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいてすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与え

られているものなのです」(2:39)。

それでは教会は、どのようにして福音の約束を聞き取り、そしてまた福音の約束を告げ知らせるのだろうか。それはただ、「教会の生活を大切にすること」によってであり、それは具体的かつ単純に言うと、「毎週主の日に神さまを礼拝し、祝福をいただく」ことによる。

初めに立ち上がった教会が、どのようにして教会の生活を始めたか。この日のテキストは、その姿を鮮やかにそして簡潔に明らかにしている。

「使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」(42)。「使徒の教え」とは、ペトロの説教(14～36)から知られるように、旧約聖書からのキリストについての説教である。後に、この使徒の教えには、礼拝で朗読される使徒からの書簡が加わり、やがて旧新約聖書全体からの朗読と説教となる。

「相互の交わり、パンを裂くこと」とは、聖餐（主の晩餐）である。聖霊においてキリストの肉と血に与るとき、聖餐（主の晩餐）の食卓を共に囲むとき、そこに生まれる出来事は何か。キリストとひとつとされている恵み、キリストを介してつながりあうキリストの体の一部分同士とされているという恵みを、目に見える形で味わうということである。キリストとひとつにされている私を深く味わうとき、キリストにおいてひとつとされている兄弟姉妹を発見する恵みを知るのである。

「祈ること」。これは、キリストがそのように生きられ、そして弟子たちに教えられた（授けられた）主の祈りのように、「アッバ、父よ」と呼んで祈る、それまでとは全く違う、新しい祈りによる祈りの生活が始まった、という意味である。い

まだ神殿に行って祈る生活習慣が残ってはいるものの(46前半)、何よりもそれぞれの家の礼拝で祈ることが中心になっている点も新しい(46後半)。

このようにして御言葉が朗読されて説教され、共に聖餐(主の晩餐)の食卓を囲み、祈りを合わせる、家の教会の礼拝こそが、初めの立ち上がった教会によって営まれた、教会の生活である。

この生活の特徴として、この日のテキストから、二つの点を挙げておきたい。

第一に、「恐れ」である。「すべての人に恐れが生じた」(43)と言われる。この「恐れ」(使徒の中では他に5:5, 5:11, 9:31, 19:17)は、恐怖ではなく畏怖の念のことである。

「皆が預言しているところへ、信者でない人か、教会に来て間もない人が入って来たら、彼は皆から非を悟らされ、皆から罪を指摘され、心の内に隠していたことが明るみに出され、結局、ひれ伏して神を礼拝し、『まことに、神はあなたがたの内におられます』と皆の前で言い表すことになるでしょう」(一コリ14:24, 25)と言われる。真実の神礼拝は、何よりも神を知らぬ者に、畏怖の念を与える厳かなものなのである。

「教会の生活」を子どもたちが知り、そして生きるとは、何よりも、子どもたちが生きる他のどの共同体においてもまったく味わうことのできない、神の御前に生きる畏怖の念を味わうということである。

第二に、「一つ」である。43節から47節には、同じ意味を含み込む言葉が重ねられている。「皆一つになって」「共有し」「分け合った」「心一つにして」「集まって」「一緒に」「一つにされた」。

ユダヤ人共同体の中にも、当然のことだが、このような意味での「一つ」性があっただろう。しかし教会が持つような意味での「一つ」性は、今までも存在しなかったし、これからも存在しないであろうと、このテキストは語るのである。

特にこの他に見られない「一つ」性をもたらすもの、あるいは「一つ」性を教会外に示すものは、

「毎日ひたすら心一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美」(46, 47)すること、すなわち御言葉と聖餐(主の晩餐)と祈りによる礼拝生活であったことを心に刻みたい。

「教会の生活」を子どもたちが知り、そして生きるとは、何よりも、子どもたちが生きる他のどの共同体においてもまったく味わうことのできない、「一つ」性を味わうということである。

日曜学校の教師が、礼拝の生活においてこそ最も深い「一つ」性を味わい、そのことに喜びを覚えているなら、子どもたちはそこに驚きを感じるに違いない。しばしば私たちが陥る一つの誘惑は、子どもたちにこの「一つ」性を、安易な仕方でも味わわせようとするのではないだろうか。この世が「一体感」を感じさせるために提供する様々な手段の強さを思う時、キリストと一つにされており、それ故にキリストの体としてお互いに一つである真実な「一つ性」の強さをこそ、大胆率直に語るべきであろう。

〈日曜学校教師に対して〉

御言葉の朗読と説教、聖餐(主の晩餐)の食卓、祈り。これによって形づくられる礼拝という「教会の生活」は、初めの教会から主の導きによって始められ、代々の教会においても変わることなく続けられてきて、今に至る。

主が私たちを、子どもたちに「教会の生活を大切にすること」を語るようにと召しておられる。そうであれば、子どもたちに何を語るかを祈り求める際に、何よりも問われるのは、教師一人一人が、どれほど「教会の生活を大切に」しているかであろう。

キリストと一つにされていることを喜び、キリストの体とされていることに畏怖の念を覚え、「毎週主の日に神さまを礼拝し、祝福をいただく」かなければ生きていけないことを、子どもたちの前で心から言いあらわす子どもの礼拝を、「心一つにして」造り上げていきたい。(安田直人)

テキスト

使徒言行録 2章41～47節

子どもと親のカテキズム 問4

〔単元のねらい〕

「神さまの子どもとして歩む生活」の中で、最も大事なものは「教会の生活」、すなわち「毎週主の日に神さまを礼拝し、祝福をいただく」ことである。「神さまを礼拝」することの中心には何があり、どうしてそれが大事で、また子どもたちにとって必要な祝福であるのかを、御言葉に従って伝えたい。

神さまが礼拝で祝福をくださいます

さっきみんなで読んだ「子どもと親のカテキズム」問4に、「主の日」という言葉が出て来ましたね。今までにも、何回も聞いた言葉かもしれませんが、改めて考えてみましょう。

主の日。これは、イエスさまの日という意味です。昔の神さまの民にとっては、土曜日が神さまを礼拝する安息日でした。ですが、イエスさまが十字架に死なれ復活された日、救いが成し遂げられた日が日曜日でしたので、この日曜日こそが、復活のイエスさまにお目にかかる日、神さまを礼拝する日に変わりました。

そして、イエスさまは、復活して天におられ、まことの王さまとして、すべてを統べ治めておられます。イエスさまのものではないところはどこにもなく、イエスさまのものではない日も一日もありません。そういう意味では、どの日もイエスさまの日、主の日です。

私たちは、それで、どの日にも神さまを礼拝することができます。どの日も、主の日だからです。そして中でも、イエスさまが復活なさった日曜日には、特別に喜んで神さまを礼拝するのです。

ところで、神さまを礼拝するとは、一体何をすることなのでしょう。聖書には、イエスさまを信じて、洗礼を受けて、イエスさまとひとつにされた人たちが、どんなことをして、神さまを礼拝したのかが書かれています。

もう一回読んでみましょう。使徒言行録2章42節です。「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、

パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」。

「使徒の教え」とは、神さまの御言葉である聖書と、聖書の説教のことです。イエスさまを信じることで、私たちに起こる、一番大きな変化は、神さまがお語りくださることを、喜んで聞くことができるようになる、ということなんですね。

昔、神さまに背いたアダムとエバが、神さまを恐れて隠れてしまい、神さまの呼びかけてくださる声も聞くことができなくなってしまったと、創世記に書かれています。

でも、イエスさまを信じて、罪を赦していただき、イエスさまのお命をいただいて、神さまの子どもとされるなら、私たちは喜んで、神さまの前に進み出て、神さまの声を聞くことができるようになるのです。

神さまの御言葉こそ、私たちがどのように生きたらよいか、どのように神さまを愛し、人を愛したらよいかを教えてくれるものです。

この神さまの語りかけを聞くことができれば、私たちは安心して、毎日の学校や、おうちでの生活に出発することができますね。

「相互の交わり、パンを裂くこと」とは、聖餐式（主の晩餐の礼典）のことです。みんなの中には、聖餐式を見たことがある人と、ない人がいるかもしれません。見たことがない人は、是非、共同礼拝に出席して見てほしいと思います。

聖餐式では、イエスさまが最後の晩餐の時になさってくださいたとおりに、牧師先生によってパンが裂かれ、杯が配られます。「これはわたしの

体である」「これはわたしの血である」とイエスさまはおっしゃいました。その通りに、聖霊が働いてくださって、イエスさまの肉と血に与ることができるのが聖餐式です。

食べるパンも、飲む杯も、実際に、与る人の口を通り、おなかに入って、その人自身の肉と血になります。聖餐式を通してイエスさまは、それほどまでに、あなたと私はひとつだよ、と語りかけてくださるのです。

多分、みんなが、聖餐式の様子を見ると、本当にイエスさまの前で、イエスさまの肉と血に与り、イエスさまとひとつにされていることを知った人がどんな姿を取るか、見ることができます。

自分の罪のために死なれたイエスさまのことを思って、涙を流す人がいます。イエスさまが死の力を打ち破って復活され、そのお命を与えてくださったことを思って、喜ぶ人がいます。厳かな、そして畏れに満ちたひとときを見つめることができますでしょう。

そしてきっと、ああ、私も、僕も、この聖餐式に与りたいなあ、あのパンを食べ、杯から飲みたいなあ、と思うに違いありません。

「祈ること」。祈りは、それまでのユダヤにもありました。どこの国にも祈りはあります。けれども、ここでの祈りとは、イエスさまが弟子たちに教えてくださり、私たちに授けてくださった、あの主の祈りを祈るということです。

主の祈りは、「天にまします我らの父よ」という言葉で始まります。「父よ」。イエスさまは、「アッパ、父よ」と祈られました。「お父さん」と呼びかけて祈っておられたのです。そして弟子たちにも、私たちにも、私を信じて、私の命に生きるなら、あなたも神さまの子どもとなる。「アッパ、父よ」と呼びかけて祈ることができるようになる、と約束してくださったのです。

最初の教会の人びとは、このようにそれまでにはなかった、今もどの世界にもない、新しい祈りを祈り始めました。「お父さん」と呼んで祈ることほど、自分が神さまの子どもだ、ということが

はっきり分かる時はありません。

このようにして、神さまは、私たちを、毎週、イエスさまが復活なさった主の日に、礼拝に招いてくださいます。カテキズムに「教会の生活」という言葉が出て来ましたね。これは、教会での生活という意味ではありません。イエスさまとひとつにされた私たちこそが教会です。私たちの生活、それが「教会の生活」です。

神さまの子どもとされ、イエスさまとひとつにされた教会である私たちの生活。それは、何よりも「お父さん」の声にしっかりと聞いて、ありがとうございますと言いつつ聞いて、涙を流しながらごめんなさいと言いつつ聞いて、一週間を「お父さん」に従って生きていこうと決心することです。勇気を与えられて、歩く道が分かって、歩き出すことです。

神さまの子どもとされ、イエスさまとひとつにされた教会である私たちの生活。それは何よりも絶えず、イエスさまとひとつにされているお恵みを聖餐式を通して、繰り返し繰り返し知り、心に感じ、体で味わっていくことです。皆さんも、きっと見ているだけで、感じ取ることのできるお恵みがあると思います。

神さまの子どもとされ、イエスさまとひとつにされた教会である私たちの生活。それは何よりも「アッパ、父よ」「お父さん」と呼んで祈り続ける生活です。隣で、一緒に「お父さん」と呼んで祈っている人がいたら、その人は、あなたと同じ神さまの子どもであることが分かります。どんなにケンカをしていても、兄弟（姉妹）ほど、強いきずなはありませんよね。

イエスさまのお命をいただいて、神さまの子どもとして、毎週礼拝を続けていくと、私たち教会がどんなに強くひとつとされているかが分かってきます。

自分が誰かをすることは、とても大事です。そしてあなたは、何よりも、神さまを礼拝する教会なのです。
(安田直人)

〔今週の暗唱聖句〕 使徒言行録 2章42節

彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。

〈ねらい〉

神さまの子どもとして歩むにあたっては、教会の生活、すなわち主の日の礼拝において主からの祝福をいただくことが大切であると教える。

〈展開例〉

Q：みんなはなぜ教会に来るのでしょうか。

A：(例) お父さんお母さんに連れられて何となく？ しかし、わたしたちが神さまの子どもとして歩んでいくためには教会が必要であり、大切なのです。

Q：では教会とは何でしょうか。

A：(例) もともと教会は建物のことではありません。昔は今のような立派な建物はありませんでした。クリスチャンになった人たちは誰かの家に集まっていたのです。でも教会は確かにありました。教会とは「神さまがご自分の子どもとして集めてくださった人々の集まり」のことです。

わたしたちはイエスさまを信じて、神さまの子どもとされますが、その後一人ぼっちで歩んで行くのではないのです。そうではなく、同じように神さまの子どもとされた仲間たち、つまり教会と共に、その中で歩んで行くのです。

Q：教会は何をするのでしょうか。

A：(例) 何よりもまず礼拝ですね。イエスさまが復活された日曜日を「主の日」と呼び、この日に集まって礼拝をささげています。

Q：では礼拝では何をしますか。

A：(例) 日曜学校の礼拝ではお祈り、讃美歌、聖書のお話、献金など。そしてその後の礼拝では聖餐式というものを行っています。これらのことは教会が誕生して以来、ずっと続けて行わ

れているのです。

Q：なぜこのようなこと(御言葉・聖餐式・祈り)をするのでしょうか。

A：それはそれらのことを通して神さまがわたしたちに祝福を与えてくださるからです。わたしたちは自分の力で神さまの子どもとして歩んでいくことはできません。神さまが恵みを与え、養い育ててくださるからこそ歩んでいけるのです。

Q：なぜ御言葉を聞くのでしょうか。

A：聖書の御言葉を通して神さまは今もわたしたちに語りかけてくださいます。弱いわたしたちは道を誤りそうになりますが、神さまの御言葉がわたしたちの行く道を照らし、導いてくれます。

Q：なぜ聖餐式が行うのでしょうか。

A：聖餐式で使われるパンとぶどう酒は十字架につけられたイエスさまの体と血を表しています。それらをいただくことによって、自分たちの罪のためにイエスさまが死んでくださったことを覚え、イエスさまと一つにされていることをますます確信させられるのです。そしてイエスさまが成し遂げてくださった救いを共に喜び祝います。

Q：なぜ祈るのでしょうか。

A：神さまの子どもとされたわたしたちはイエスさまと同じように神さまに向かって「お父さん」と呼びかけることができます。そして父なる神さまは祈り求めるわたしたちによいものを与えてくださいます。特に聖霊を与え、わたしたちを強め、導いてくださいます。

【目標】

教会生活の大切さを知る。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 改めてカテキズムに取り組む

①「教会とわたし」の切り離せない関係

とても大切な大前提は、私たち自身が教会であるということである。他の誰かではなくてこの私が、教会というキリストの体に、具体的に組み込まれている。私は教会の屋根を支えている壁の一部、柱の一つである。よって教会は、私の存在とは別のところに別個にあるのではなくて、私の存在と重なっている。教会は私の存在の一部なのであり、私は教会の存在の一部となっている。さらにその教会は今のこの世界におけるキリストの体となっている。キリストは教会という体によって、この地上を歩き、踏みしめ、キリストは教会を通して、この世界で具体的に働かれる。「キリストの体」とされているのは、この世界の中でただ、「教会」という組織だけである。

②「教会とわたし」の切り離せない現実

そのように、私たち自身が教会であり、私の存在が教会の存在と重なっているならば、当然教会は罪を背負った、旅の途上の、まだゴールインしていない教会である。その意味で、教会は「私の罪の現実」と結び付いており、「私の罪の現実」をその内側に含んでいる。その私たちの罪や欠けを含み込んでいない教会を想定したり、夢見たりすることはできない。したがって教会は当然、求める者であり、道を誤る者、労苦する者、苦悩する者、不信仰者、罪人、未熟な者、ゴールに至っていない人生の旅人たちからなる教会である。教会はそれ以外ではありえない。だから教会は、「完

成」してしまったら教会ではなくなることになる。もし不完全さのない、「完全な教会」があるとしたら、誰もその教会には入れなくなるし、当然そこには私の座る場所もない。

けれども、教会には十字架がある。そこには、不完全さと罪を赦し、その様な者たちを愛して受け入れてくださる主イエス・キリストの十字架が立てられている。だから教会は、「わたしの罪の現実」と結び付いてはいるが、その事実よりももっと強力に、キリストの十字架による贖いの現実にも結び付いており、守られている。そこに教会にこそある、守りと希望がある。

③教会の大切さ

教会はキリストの体である故に大切なものである。体の一部の器官が痛めば、体の全体が痛み、一部の器官が喜び、また素晴らしい働きをするならば、その頭であるキリストを始め、体のすべての器官が喜びを共にしてくれる。体はその一器官である「わたし」に常に血液を送ってくれる。根幹にある骨で、体は私を支えてくれる。そして体は、他のものでは代替できないかけがえの無さで、「わたし」に居場所を用意してくれ、「わたし」の賜物を用いてくれる。私が、教会の包容力のある、多様性に富んだ信仰の中に庇護されている事実を知るのは、心の重荷であるどころか、それは常に大きな救いであり、信仰的後ろ盾である。「教会」は、そのような「わたし」の、感動的な居場所なのである。よって、「教会」と「わたし」とは、互いに依存し合い、かつ互いに奉仕し合うことによって、互いに成長し、互いを豊かならしめ合うのである。教会形成は、自己形成とひとつである。

3. 生徒と一緒に考える

教師自身にとっての、「教会につながることの大切さ」を、生徒と分かち合う。

Q：疑問は解けましたか？

Q：これから、この教会をどんな教会にしてゆきたいですか？

テキスト

ルカによる福音書 10章38～42節

参照教理問答

子どもと親のカテキズム 問4

問4 神さまの子どもとして歩む生活で、だいじなことは何ですか。

答 毎週主の日に神さまを礼拝し、集めてくださった教会の生活を大事にすることです。毎週主の日に神さまを礼拝し、祝福をいただき、世界に送り出されて神さまに仕えて歩むことです。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

まず最初に、この日のテキストの置かれている位置に注目したい。マルタとマリアの物語は、律法の専門家とイエスの対話と引き続く「善いサマリア人」のたとえ話の後に置かれている。また、マルタとマリアの物語は、イエスによる「主の祈り」の伝授という画期的な出来事の前に置かれている。この脈絡に沿って理解することから見てくるものを、見つめてみたい。

「善いサマリア人」のたとえ話は、イエスを試そうとした律法の専門家の問いかけから始まる。彼は、「何をしたら永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」と問う。イエスは直接に答えず、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどのように読むか」と問い返す。律法の専門家は、イエスを試すはずの問いによって、自分が試されることになったのである。

そしてその試しは、見事に彼を撃った。「神である主を愛し、隣人を自分のように愛する」ことなど、人にはできないからである。それで彼は自分を正当化しようとして、「わたしの隣人とは誰ですか」と問いを重ねる。

イエスがたとえ話で示したのは、「わたしの隣人とは誰か」と問うこと自体が間違っており、どのような条件もなしに、具体的に倒れ伏している人を助ける存在になることが、「わたしが隣人となって隣人を愛することである」という真理であった。

これこそが真実にカテキズムの語る「神に仕える」道であり、それは隣人に仕える道、被造世界に仕える道に繋がっている（問5）。

このイエスの教えを受けて、「わたしが隣人となって隣人を愛する」ことへと真っ先に進んでいったのが、マルタである。彼女は、伝道の旅路に就かれているイエスと弟子たちの一行（それはルカ10章の脈絡からすると途方もなく多い）の世話をしようとする。「マルタは、いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていた」。

ところが、マルタのこのイエスの教えに従おうとする「わたしが隣人となって隣人を愛する」という行動は、あっという間に挫折する。しかも、最も彼女の近くで共に生きてきたマリアの存在と行動によって。

マリアは、イエスの足もとに座って、その話に聞き入っていた。マルタは、一人でせわしく立ち働いている。マルタからすれば、マリアもまた、自分同様、「隣人となって隣人を愛する」べきである。この考えに既に陥穽が潜んでいる。自分の行いこそが、イエスの隣人となる行為だと信じ込んでいるからである。

そしてマルタは、その穴に落ち込んでいく。マリアを責める心に支配されたマルタは、愛そうとしたイエスを責めることになってしまい、つまり思い描いていた正反対の姿を取るにいたるのである。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください」。ここにはっきりあらわれているのは、愛の挫折である。

イエスは、そのとき、マルタのしようとしたことそのものに反対したのではなかった。しかし、マリアのしていることと比べること、自分のしていることのみが愛であると考えることには明確に反対された。

そして、いつも、愛に挫折する時に立ち帰るべきところは、ひとつだけであり、それは私の声に聞くことだと教えてくださったのである。「わたしは隣人となって隣人を愛する」道は、ただイエスの足もとに座って、その話に聞き入る時にのみ、挫折から立ち直って歩み続けられる、そのような道なのである。そのような意味で、「必要なことはただ一つだけである」ことを知らねばならない。

そのようなイエスの教えに心打たれた弟子たちは、イエスが絶えず、父との交わりの中で父の御声に聞き入り、父に祈っていることを思い起こさざるを得なかった。イエスの教えに聞き入り、そうして父なる神の御声に聞くためには、何が必要なのか。御声を聞き、そして祈りかける、相互の交わりである。

そのことに気付いた弟子たちに、イエスは、主の祈りを教えられた。それは、弟子たちが知っていた、それまでのユダヤ人の祈りとは違う、ヨハネの祈りよりも、更に新しいものだった。

何よりも、その新しさは、次の点にあるだろう。第一に、「父よ」という呼びかけで始まること。ここにあるのは明確に、「アッパ、父よ」(マルコ14:36)と呼んで祈られたイエス自身の祈りの呼びかけの伝授である。この呼びかけは、永遠の神の子であるキリストの発し得るものというよりは、人となられ、「神である主を愛し、隣人を自分のように愛する」道をまっとうされ、それ故に十字架の滅びの死の後に、復活の神の子としての新しいお命に復活させられた、私たちの初穂としての神の子イエスの発し得る呼びかけである。それで、イエスを信じて復活の命を注がれ、神の子とされた私たちもまた、「アッパ、父よ」と呼ぶことができるのである(ロマ8:15、ガラ4:6)。

第二に、祈りの短さ。仰々しい呼びかけの言葉抜きに、端的に「お父さん」と呼びかけて始められる親しい祈りの言葉は、同様に端的な内容である。そこには短いけれども、一切が含み込まれている。そして、それ故にこそ、私たちは、親しく、そして短く、日々に、折々に、しかも継続して祈ることができると言い得るのである。

神の御言葉は、聞いた者を、信じ生きることへ、そのことを通して神の栄光をあらわすことへと促すまで働きをやめない。そして、聞くことに応じてまず起こるのは、人間においてそうであるように、父の語る言葉をオウム返しに語り始めるということであろう。言葉は人の全体を規定する。聞く言葉によって、人は形造られる。そして形造られたその存在の中からしか、人は言葉を発することができない。

御言葉を聞いて、そして祈るという循環そのものが、イエスによって既に生きられ、そしてそのイエスによって私たちに与えられているということ。これは大きな恵みである。

この地点に立って初めて、挫折を繰り返しながら、なお「隣人となって隣人を愛する」、私たちの日々の生活が始まっていくのである。

〈子どもたちに対して〉

神は、私たちがキリストとひとつに結び合わされて、キリストの体である教会となり、毎週主の日に礼拝することを通して、祝福をお与えくださる。御言葉、礼典、祈りの循環の中で、私たちはキリストとひとつであることを確信させられ、そしてキリストにおいて父の御言葉を聞き、キリストにおいて父に祈るのである。これこそが、礼拝の最も基本的な祝福である。

この祝福を受け取ることによってのみ、私たちは世界へと出発することができる。「神である主を愛し、隣人を自分のように愛する」こと、「隣人となって隣人を愛する」ことができる。絶えず挫折を繰り返しながら、それでも立ち上がる力は、ここからしか生まれてこないのである。

「主の足もとに座って、その話に聞き入って」、そして主が伝授してくださった祈りを繰り返して祈ること。その祝福によってあなたがたは神に仕えて生きることができる。そこから初めて、隣人に仕えて、被造世界に仕えて、人として生きることができる。

子どもたちに、このイエスの指し示された真理と恵みを語りたい。(安田直人)

テキスト

ルカによる福音書 10章38～42節

子どもと親のカテキズム 問4

〔単元のねらい〕

子どもたちのすべての生活は、礼拝でいただく神の祝福によってのみ営むことができる。なぜなら、世界とそこに満ちるすべてのものは神のものであり、神の御心に従い、神によって送り出されて生きる時にのみ、すべての生活の意味を知ることができるからである。子どもたちの生きている、複雑で、罪に満ちた世界の中で、教会の生活を大切にするときに見えてくるものを、御言葉に従って伝えたい。

神さまが送り出してくださいます

みんなは、イエスさまがお話しくくださった、「善いサマリア人」のたとえ話を知っているでしょう。あの時、イエスさまはいじわるな律法の専門家の質問をきっかけに、隣人を愛するとはどういうことを教えてくださったのです。

「わたしの隣人とは誰ですかと考えてはいけません。あなたの前に困っている人がいたら、何の条件もなく、ただ助けてあげなさい。そうしたら、あなたはその人の隣人となります。そうしたら、隣人となって隣人を愛することができるでしょう」。

それは、まったく新しい、神さまを愛し、隣人を愛する歩みでした。イエスさまの教えてくださいました愛に、心を打たれて、マルタは働き始めたのです。

イエスさまとお弟子さんたちが、私の村においでになる。神さまの福音を告げ知らせる尊いお働きのために、長旅を続けてきて、疲れておられるに違いない。ちゃんとした寝場所をつくって差し上げよう。べこべこに、お腹が空いておられるに違いない。たくさんのおいしいご飯を用意して差し上げよう。

そう考えて準備をしている内から、イエスさまとお弟子さんたちの喜ぶ顔が心に浮かんできます。心が弾みます。イエスさまが教えてくださいましたとおり、隣人となって隣人を愛するって、なんて素晴らしいんだろう。

そして、イエスさまとお弟子さんたちが到着しました。全員は入れませんが、イエスさまには真先に休んでいただかねばなりません。「さあさあ、イエスさま、お待ちしていました。どうぞ家にお入りください」。

そして、マルタは、準備していたものを取り出しながら、イエスさまに何をお出ししようか、どんな順序で進めようか、一所懸命に考えました。一番、イエスさまが喜んでくださるようにしたい。そのために、せわしく立ち働きました。

そうすればするほど、自分が考えて計画し、実行していることで、イエスさまを愛することになるのだという気持ちが強まっていきます。

そんな時です。せわしく立ち働いているマルタの目の端に、ちょっとした光景が写りました。イエスさまです。ああ、イエスさまのために働いているんだ。ところが、そのイエスさまの足もとを見ると、マリアが座り込んでいて、イエスさまのお話を聞いているではありませんか。

その瞬間、マルタの心は、はじけてしまいました。なんてこと！私がこれほど一所懸命になってイエスさまを愛して、イエスさまにお仕えて、イエスさまが喜びになることをしようとしているのに！ こんな大切なことは他にはひとつもないのに！ それを手伝わないで、ぼーっと座り込んでいるだなんて！

普段のマルタだったら、お客さまで、しかも愛してやまないイエスさまに向かってこんなことを

言ってしまうなんてことはなかったでしょう。けれどもはじけてしまったマルタの口からは、次々と言葉が飛び出してしまいました。

「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください」。こんな失礼なことはありません。マリアをそっと陰に呼んで言うならともかく、愛しているはずのイエスさまに、まるでイエスさまが妹マリアに話しかけているから悪いんだ、注意してくれないから悪いんだ、そんなふうに突っかかってしまったのです。

愛することは、何と難しいのでしょうか。イエスさまは「隣人となって隣人を愛する」ようにと教えてくださいましたが、そのとおりになろうと思ったとたん、マルタがしてしまったのはその正反対のことでした。

マルタを見つめて、イエスさまはおっしゃいました。「あなたがわたしを愛そうとしてくれたことは良く知っている。同時に、マリアもわたしを愛してくれたのだ。わたしの話を聞くことによって。そして実は、わたしの話を聞くことこそが、愛するために、必要なただ一つのことなのだ」。

この後、マルタがどうしたのか、今朝の聖書には書かれていません。きっと、愛することに失敗したり、愛することで傷ついたりするたびに、イエスさまの御声を聞こう、神さまの御言葉を聞こう、そう決心したに違いありません。

そして、マルタがどうしたのかは書いていないのですが、このマルタとマリアの家で起こった出来事の後で、弟子たちがイエスさまにお願いしたことがある、と続きの箇所を書いてあります。「祈りを教えてください」。

きっとお弟子さんたちは、イエスさまとマルタとマリアの姿を見ながら、「ああ、いつもイエスさまは、父なる神さまの御声を聞いていらっしゃるなあ。そして聞かされた時に、神さまとお話しなさって、お祈りしておられるなあ」ということに気付

いたのだと思います。

本当に神さまのお言葉に聞くということは、それを受け止めて、お返事しなければならない。お話しが始まらなければならない。そこから、一步一步の生活もつくられていくんだ。そうしてお弟子さんたちは、「祈りを教えてください」と、イエスさまにお願いしたのです。

この時、イエスさまが弟子たちに教えてくださいましたのが、「主の祈り」です。私たちが毎週礼拝でお祈りしている「主の祈り」。みんながうちでも毎日お祈りしている「主の祈り」。

「父よ」。イエスさまはいつもそういうふうになんかに呼びかけてお祈りなさいました。「アッパ、父よ」「お父さん」。

みんなも、お父さんと親子げんかしている時には、お父さんの言うことなんか絶対聞くんかと思うでしょう。でも嬉しくて、「お父さん」って抱きつく時には、お父さんのお話しする言葉が、心にどんどん入ってくるんだと思います。

神さまの御言葉に聞く。イエスさまのお話に聞き入る。その時には、まずお祈りしなさい。イエスさまは、そうなさり、そしてそうできるように、私たちの耳を開き、祈りをお与えくださいました。

毎週の礼拝で、私たちがしていることは、このことです。神さまの御言葉に聞く。イエスさまのお話に聞き入る。そして聞いたことに応えて、お祈りをする。

そして、愛することに失敗したり、愛することで傷ついたりすることから、もう一度、勇気を与えていただいて、出発するのです。

今日のカテキズムの最後に、こう書いてありました。「毎週主の日に神さまを礼拝し、祝福をいただき、世界に送り出されて神さまに仕えて歩む」。みなさんを、神さまが、イエスさまが、送り出してくださいます。もう一度、神さまに仕えて、愛する歩みを始めなさい。私たちのすべての生活は、神さまによって送り出されているものなのです。（安田直人）

〔今週の暗唱聖句〕

ルカによる福音書 10章41,42節

あなたには多くのことに思い悩み、心を乱している。

しかし、必要なことはただ一つだけである。

〈ねらい〉

主イエスの御言葉に聞くことこそ、隣人を愛し隣人に仕えて生きていく上で最も大切なことであることを伝える。

〈展開例〉

Q：神様はわたしたちがどのように生きていくことを望んでおられるでしょうか。

A：「心を尽くしてあなたの神である主を愛し、隣人を自分のように愛する」(ルカ10:27参照)。

Q：今日のお話で旅をしているイエスさまをもてなしたのは誰でしたか。

A：マルタ。

Q：マルタはなぜそうしようとしたのでしょうか。

A：イエスさまをもてなしたいという思い、「隣人を愛そう」という思いからそうしたのだと思います。

Q：しかしマルタは途中から、いら立って怒ってしまいました。それはなぜでしたか。

A：妹のマリアがイエスさまの足元に座ってその話を聞いていて、自分だけにもてなしをさせていたから。

Q：わたしたちにもこのようなことはありませんか。

A：(例) 自分はちゃんと家のお手伝いをしているのに、兄弟はさぼってやらない。自分はちゃんと教室の掃除をしているのに、さぼっているクラスメイトがいる。

Q：いらだったマリアはどうしましたか。

A：イエスさまに文句を言った「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせています

が、何ともお思いになりませんか。手伝ってくださるようにおっしゃってください」(ルカ10:40)。

マルタは初め「イエスさまを愛し、イエスさまに仕えよう」という思いからもてなしを始めたのですが、結果的には妹のマリアばかりでなくイエスさまをも批判することになってしまったのです。

Q：そのようなマルタに対してイエスさまはどのように答えられましたか。

A：「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

Q：わたしたちも「あれもしなければ、これももしなければ」と思い悩み、心を乱してしまうことがあるのではないのでしょうか。しかし、イエスさまは「必要なことはただ一つだけである」と言われます。それは何ですか。

A：それはマリアがしたことですね。つまりイエスさまの足もとに座って、イエスさまの言葉を聞くということです。

〈結論〉

イエスさまは今日の箇所ですべてわたしたちが隣人のために仕えること、働くことそれ自体を否定しておられるわけではありません。しかし、その時にも本当に必要なただ一つのことを「主であるイエスさまの御言葉に聞くこと」だということを忘れてはいけません。それこそイエスさまを愛するため、そして隣人を愛し、仕えるためにも何よりも必要なことなのです。それゆえわたしたちは毎週の礼拝において御言葉を聞き、そこからこの世へと送り出されていくのです。

【目標】

主イエスが大きな力をもって、私たちを行くべき所に送り出してくださっていることを知る。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 改めて御言葉に取り組む

①主イエスによる派遣の根拠

マタイによる福音書28章18節。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。」「天と地の」というこの言葉は、私たちが考えたり想像することのできる物事のすべてを含み込む言葉。主イエスは、地上と天上の、その全権を握っている。この世界で起こるすべてのこと、私たちの周りで起こるすべてのことについてはもちろんのこと、死んでから人はどこに行くのか。そちら側の私たちが目にするのできない世界のことにしても全て。死の力も、死後のことも、もちろん永遠の命を与えるということも、全部を主イエスは自由にできる。主はその全権を握っておられるということ。この方が、私たちを送り出してくださる。

②私たちが世界に送り出される目的

マタイによる福音書28章19節。「すべての民を弟子にする」とは、すべての人を主イエスがお持ちの権威の影響下に置くということ。権威というとても言葉が硬いが、その内容は、一言で言えば全地を包む神様の愛。その愛を、すべての民に伝えること。疑う者さえもその愛に招く、いや、疑うような者だからこそ、愛を持って支え、守る。これが主イエスに送り出されている、週の弟子たちの使命。

③送り出されるものへの約束

暗唱聖句：マタイによる福音書28章20節。この時、12人いた弟子は、1人欠けていた。弟子の一人だったユダが、十字架の前に主イエスを当局者たちに売り渡し、そのあと首を釣って自殺してしまっていた。さらに、主イエスも十字架に架かって死んでしまった。弟子たちはこの時ボロボロだった。弟子たちの心の内には、これまで一体何をやって来たのか？ あの3年間は無駄だったのか？これからどうなってしまうのだろうか？という思いがあったはずである。その弟子たちに与えられた約束が、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」という、復活した後の主イエスからの言葉だった。私たちは丸腰で送り出されるのではない。先は見えなくても、主イエスが、私たちのすべての日々の中に、共にいてくださるという未来は、確かに約束されている。「いつも」と訳されている言葉は、「すべての日々に」という言葉。嬉しい日も悲しい日も、不安な日にも、生まれた日も地上での死を迎える日も、世が終わるまで、そのすべての日々に、主イエスは共にいてくださる。これが、世界にこれから出ていく弟子たちに対して語られた、主イエスの約束であり、これが、このあとの世界全体と、歴史の全体に通用する法則であると宣言されている。この派遣には、何の予算的裏付けも、具体的な戦略も付されていないが、「主がいつも共にいてくださる」ということさえあれば、十分であるし、そのことに勝る裏付けは何も存在しないのである。

3. 生徒と一緒に考える

教師自身は、今どこに、何のために神によって送り出されているのか、それを証し、生徒と分かち合う。

Q：疑問は解けましたか？

Q：あなたが神様から特別に遣わされている場所は、どこだと思いますか？

Q：これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト ルカによる福音書 10章25～37節
子どもと親のカテキズム 問5
参照教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問39, 88
ハイデルベルク信仰問答 問86

問5 神さまが私たちに求めておられることは何ですか。

答　神さまを愛し、家族や友だちを愛し、神さまが造られたものを大切にして、祈りつつ歩むことです。

〈子どもと親のカテキズムの解説〉

問1～5は、『子どもと親のカテキズム』全体の構成を示しています。問5は、「第三部 感謝しつつ歩む道」に対応しており、そこに含まれた「二 愛に生きる道」と「三 祈りに生きる道」の内容を簡潔に言いあらわしています。

実際に「二 愛に生きる道」で取り扱っているのは、神が愛の生活の規準として示してくださった「十戒」です。十戒を要約するならば、神を愛し、隣人を愛するということになりますが、隣人については子どもたちにわかりやすいように「家族や友だち」と表現されています。もちろん、これは、隣人が「家族や友だち」に限定されるということではありません。

さらに、このカテキズムでは、神が造られた世界をも大切にすべきことが述べられています。この点について、ウェストミンスター小教理問答など、伝統的なカテキズムは明瞭に語りませんが、聖書は神が人間にご自身の創造された世界の支配を託されたと語っています（創世記1:28）。人間は、良い管理者として、神が造り、今も所有されている世界を大切に取り扱いなければなりません。

「三 祈りに生きる道」に対応する部分については、次週、取り扱います。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

【KEY1 聖書本文を語る】

〔STEP1〕 聖書本文を読む。

ルカによる福音書10章25～37節を何度か繰り返して読みます。

〔STEP2〕 この個所のテーマは何か？

神の子どもとして神と共にある「永遠の命」の歩みをなすために、聖書（律法）を通して神が求めておられることは、神を愛することと隣人を愛することです（27節）。それを実行することの大切さが教えられています（28, 37節）。

〔STEP3〕それをどのように展開しているか？

律法の専門家がイエスを試そうとして、永遠の命を受け継ぐ方法を尋ねます。イエスが律法に何と書いてあるかを尋ね返すと、彼は律法の要約を正しく答えます。しかし、それを実行することに関して問題があり、「わたしの隣人とはだれですか」と自分を正当化しようとします。イエスは、たとえ話によって、祭司やレビ人といった主に仕える血筋の者ではなく、傷ついた人への憐れみを実行したサマリア人が、その人の隣人になったことを示し、同じように実行するように命じられました。

【KEY2 神の福音を語る】

〔STEP1〕 この個所で神はご自身について何をあらわされたか？

神は、ご自身と共にある「永遠の命」に生きるために、神を愛し、隣人を愛することを求めています。また、神は、そのことを知っているだけではなく、実行することを求めています。

〔STEP2〕 前後の章は、神について何と言っているか？

8章までで、イエスご自身が病気の人を癒し、

悪霊に取りつかれた人から悪霊を追い出して、人びとの隣人になられたことが語られていました。9章の初めと10章の初めでは、イエスをご自身に従う弟子たちにも、病いを癒し悪霊を追い出す権能を与えて、彼らを遣わされました。神を愛し、主に従う者たちを、主は人びとの隣人となるために遣わされます。

〔STEP3〕 聖書全体を通しての神の働きに、この箇所はどのように関係しているか？

神の国の完成は、神のご支配が被造世界全体に回復されることを意味します。神の国は、神の民が神の求められることを実行して神のご支配を実現することを通して、この地上において姿をあらわします。教会そしてクリスチャン一人一人が、神を愛し、隣人を愛することは、ごく小さな働きのように見えますが、神が造られた世界の終末的な回復に向かう重要な意味を持つものです。

【KEY3 子ども達の信仰と生活のために語る】

〔STEP1〕 この個所に登場する当時の人びとの必要は何だったか？

律法の専門家は、「永遠の命」を受け継ぐのに、神を愛し、隣人を愛するように神が求めておられることを知っていたが、それを実行しないでいました。

〔STEP2〕 私たちの教会の子どもたちに似たような必要があるか？

神を愛することよりも学校の秩序を守ることが重んじられ、隣人を愛するよりも自分の点数を上げることを最重要課題とする社会の中で生きている子どもたちには、知識として、神を愛し、隣人を愛することを、神が最も重要なこととして求めておられることを確認することも、欠かすことができないでしょう。

〔STEP3〕 この聖書箇所の「その時」から、私たちの教会の「今」へ橋をかける。

イエスは、神を愛し、隣人を愛することを神が求めておられると知っているだけでは十分でないことを教えられました。神が求めておられることを実行してこそ、神の子どもとして、神と共にある「永遠の命」の幸いを豊かに味わうことになります。傷つき、困っている人に近づき、必要な助けを与えることは、この世の価値観で考えれば、自分に不利益となるように思えたとしても、神の国の価値観ならば、聖霊の働きによって、救いの完成に向かう歩みとなります（問83参照）。

（テモテ指導者訓練「聖書の説教」モジュールを参考に項目を立てました）。 …（大西良嗣）

テキスト ルカによる福音書 10章25～37節
子どもと親のカテキズム 問5

【単元のねらい】

問5は、「第三部 感謝しつつ歩む道」の内容を簡潔に言いあらわしています。今回は、その前半部で、「二 愛に生きる道」に対応する部分を取り上げます。

神さまを愛し、家族や友だちを愛します

【物語り】

ある時、聖書にとっても詳しい「律法の専門家」がイエスさまのところにきました。

「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるのでしょうか？」

イエスさまを試そうとして、こんなふうに質問をしたのです。イエスさまは、こう答えられます。

「聖書には何と書いてありますか？ あなたは、律法の専門家として聖書をよく読んでいるはずだけれど、聖書はどういうふうに教えていると理解しているのですか？」

さすがは律法の専門家です。イエスさまにそのように尋ねられて、

『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』と書かれています」と答えました。

さっき読んだ『子どもと親のカテキズム』に書いてあったことと同じだね。「神さまを愛し、家族や友だちを愛し」ということだね。これが、神さまの子どもにされた私たちが、神さまと共に歩いていく「永遠の命」の歩みのために、神さまが求めておられることなんだね。

イエスさまは、律法の専門家の答えを聞いて、「正しい答えだ」とおっしゃいました。律法の専門家は、神さまが求めていらっしゃるものがちゃんとわかっていたんだね。

けれども、問題がありました。イエスさまは、「正しい答えだ」とおっしゃって、「それを実行しな

さい」と言われました。ただ知っているだけではなくて、それを実際に言いなさいと言われるのです。

律法の専門家は、痛い所を突かれたと思ったかもしれないね。あんまり、「隣人を自分のように愛する」ということをしていなかったかもしれないね。だけど、「隣人」って、いったい誰のことだ！それがわからなければ、「愛しなさい」と言われたって愛せないではないか！ そうだ、こう質問しよう。

「では、わたしの隣人とはだれですか？」律法の専門家は、もう一度、質問をしました。私が愛すべき「隣人」をイエスさまが決めてくださったら、私はその人だけを愛したら良いことになると思ったのかもしれないね。

イエスさまは、この質問について、たとえ話で答えになりました。

【善いサマリア人の譬え】

ある人が、エルサレムからエリコへ向かって旅をしていました。ところが、強盗に襲われて、服をはぎ取られ、殴りつけられ、半分死にそうになっていました。

その人が、死にそうになって倒れていると、ちょうどそこへ、神さまの神殿で仕える祭司が通りかかりました。祭司は、聖書をよく知っていました。「隣人を自分のように愛しなさい」という神さまの戒めもよく知っていたことでしょう。しかし、その人を見ると、その人を避けるようにして、道の反対側を通って、去っていきました。

次に、レビ人がやって来ました。レビ人も、先祖代々、神さまの神殿で働いてきた人たちです。聖書をよく知っていて、「隣人を自分のように愛しなさい」という戒めもよく知っていたことでしょう。しかし、レビ人も同じように、その人を見ると、その人を避けるようにして、道の反対側を通って、去っていきました。

次に来たのは、サマリア人です。ユダヤ人たちは、サマリア人は聖書のことがよくわかっていないと考えて、嫌っていました。ところが、この人は、その人を見ると、かわいそうに思って、近寄って来ました。そして、傷に油とぶどう酒を注ぎました（薬の代わりでしょう）。包帯をして、自分のろばに乗せて、宿屋まで運んで、看病してあげました。次の朝には、自分は旅を続けなければならないので、宿屋の主人にお金をわたして、「この人を看病してあげてください。このお金よりもっとかかったら、帰りに足りなかった分を払います」とまで言いました。

【物語り】

イエスさまは、律法の専門家に言われました。「この3人（祭司、レビ人、サマリア人）の中で、だれが強盗に襲われた人の隣人になりましたか？」

律法の専門家は答えます。「その人を助けた人です」。

けがをして倒れていた人を、かわいそうに思って、近づいて行って、実際に助けた人こそが、その人の隣人になったと、律法の専門家にもわかりました。

イエスさまは、「あなたも同じようにしなさい」と言われます。「神さまを愛すること」と「隣人を愛すること」を、神さまが求めておられます。そのことを知っていることは大切です。しかし、知っているだけではなくて、それを実際に行うようにイエスさまは言われます。

【結び】

私たちにとって、隣人とは誰でしょうか？

「子どもと親のカテキズム」には、「隣人」という言葉ではなくて、「家族や友だち」と書かれていました。「家族や友だち」は、確かに「隣人」です。私たちは、「家族や友だち」お父さん・お母さんや、お兄さん・お姉さん・弟・妹を愛せていますか？ どんなお友達でも愛せていますか？ なかなか難しいですね。わざと怒らせるようなことを言ってしまったたり、困っているのに助けようとしなかったり、悲しんでいるのに知らんふりをしてしまったたり、私たちは「家族や友だち」でさえも、十分に愛することができません。

実は、隣人というのは、「家族や友だち」だけではありません。イエスさまがお話しされたサマリア人のように、知らない人であっても、困っていて、助けを必要としている人に、私たちの方から近づいていき、できるかぎり助けてあげることが、実は「隣人」になることです。そんなふうにして、あなたたちも同じように隣人になりなさいと、イエスさまは教えられます。

実は、そのようにして、神さまの求めておられることを実際に行うことで、私たちは神さまと共にいることを豊かに味わいます。さらに、神さまの子どもとして、神の国をこの地上にあらわしていくこととなります。私たち一人一人のすることは、本当に小さいけれど、神さまはそのすべてを用いて、神の国を押し広げご自分の計画を進めてくださっています。誰かを助けて隣人になることは、自分の得にはならないように思えますが、神さまが共にいてくださり、聖霊なる神さまが働いてくださっていることを豊かに経験することになるのです。神さまを愛し、隣人を愛する、この2つの愛を実行する道を、共に歩いていきましょう。

（大西良嗣）

〔今週の暗唱聖句〕 ヨハネによる福音書 15章12節

わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。

〈ねらい〉

キリストの憐れみによって救われたのものと
して、困っている人を憐れみ、その人の隣人となる
真の愛に生きようと励ます。

〈展開例〉

Q：分厚い聖書にはたくさんのことが書かれてい
ますが、その中でも一番大切な教えは何でしょ
うか。

A：『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、
思いを尽くして、あなたの神である主を愛しな
さい、また、隣人を自分のように愛しなさい』（ル
カ10:27）

Q：今日のお話に出てくる律法の専門家もそのこ
とを知っていました。イエスさまはそれに対し
何と言われましたか。

A：「正しい答えだ。それを実行しなさい。そう
すれば命が得られる」。知っているだけでなく、
実際にそれを行うことが大切だと教えられたわ
けです。

Q：律法学者はさらに「では、わたしの隣人とは
誰ですか」とイエスさまに質問をしました。な
ぜでしょうか。

A：自分を正当化しようとして。つまり自分が律
法を守っている正しい人間だと示すためです。

隣人を愛すると言ってもその「隣人」とは自
分にとって誰なのか。そのことがはっきりしな
いと自分はその掟を守っているとは言えませ
ん。そこでわたしにとっての隣人とは誰なのか
を聞き、愛すべき「わたしの隣人」を限定し
ようとしたのです。

Q：みんなは自分にとっての隣人とは誰のことだと
思いますか。

A：家族、また学校や教会での仲の良い友達かな。

Q：でもそういう人たちだけがわたしたちの隣人
なのでしょうか。その人たち以外は愛さなくて
よいのでしょうか。

A：いいえ。そうではないことをイエスさまはサ
マリア人の譬えで示されたのですね。

Q：道で倒れている人を助けたのは神殿で働く祭
司やレビ人ではありませんでした。むしろユダ
ヤ人から嫌われ敵と見なされていたサマリア人
でした。なぜこのサマリア人は助けたのでしょ
うか。

A：それは倒れている人を見て憐れに思ったから
です（ルカ10:33）。内臓が揺り動かされるよ
うな気持ちになった、胸が痛んだのです。いて
もたってもいられなくなり、助けたのです。

〈結論〉

イエスさまは律法学者に対して「誰が強盗に襲
われた人の隣人になったと思うか」と尋ね、律法
学者は「その人を助けた人（憐れみを行った人）
です」と答えました。

大切なことは自分を正当化しようとして、「“誰
が” 愛すべきわたしの隣人か」を問うことではあ
りません。そうではなく、「このわたしが” その
人の隣人となる」ということです。そのような愛
に、憐れみに生きるということです。

わたしたちは神さまの憐れみ、イエスさまの憐
れみによって救われ、神さまの子どもとされてい
ます。そのことによってわたしたちは自分を正当
化することから解放されます。そして隣人を憐れ
み、隣人を愛する生き方へと招かれているのです。

【目標】

愛に生きるとは、どのような生き方なのかを掴む。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 改めて御言葉に取り組む**①隣人とは？**

隣人という言葉は、英語ではネイバーという言葉で、これは近さを意味する。そして日本語では、隣り合う人と書いて、隣人と読む。聖書の中には、この隣人という言葉がたくさん出てくるが、聖書は、人と人が物理的に近いという状態、空間的に近くにいる状態を指して、それを隣人だとは呼ばない。聖書は、物理的に近さが隣人関係を成立させるのではなくて、そこに愛が通い合っているかどうか、ということをもって、そこに隣人関係が結ばれているのか否かを、測っている。確かに、都会の雑踏の中に入ると、とたんに沢山の人の目に映られて、沢山の人の目と空間的には近づき合うことになるのですが、その雑踏の中に、私たちは隣人を見つけ出せない。沢山の人の目と隣り合っているのに、しかし自分は今一人なのだと感じる。その時その人々は、私の目には人と映らず、モノとか、背景とか、自分が歩くのを妨げる障害物のように映ってしまう。いくら周りに人がいても、その人と、人間として、人格として隣り合っていないければ、そこに隣人がいるとは言い切れない。

②人の隣人になれない自分

世知辛い世の中にいて、自分の心もその価値観に染まっている。その中で私たちは、自分で自分の責任を負うだけで、もう精一杯で、とても他人の人のことなどにかまっている余裕がなく、今や

隣人は、競争相手になっている。負けられないために、勝つために、人のことなどにかまうばかりか、むしろ、人を蹴落としていかなければ、自分の未来が開けていけないというような、考え方に縛られてしまう。そんな中では、私たちは、人と隣人になるどころか、その存在を拒否して、そこから離れ、自分の殻に閉じこもることによって、自分を守るようになる。またそこでは、自分の時間や、力や、お金や、そして自分の心の中にある愛情を、他人のために注ぐことの意味が、分らなくなる。そして隣人のために自分の心を開いていくことが、怖いことになる。他人に対して自分自身を開いていけば開いていくほど、その時には自分の心が傷つけられやすくなり、実際に傷つく。

③隣人になってくださる神様

しかし聖書は、神が私たちの隣人となってくださったことを語る。聖書を開いて分かることは、実はこの私にも、私を愛するあまり、私のために命まで惜しまなかった隣人がいた、友がいたということ。神様が、神の御子、主イエス・キリストが、小さな私に寄り添ってくれている隣人だったのだということ。人を愛し、人の隣人になる時、この主イエスの愛を、実感を持って味わうことができる。与えたら無くなるのが愛なのではなくて、愛は、人に与えることによってこそ与えられ、人を愛する中でこそ、ますます自分の内に豊かにされていくものである。

3. 生徒と一緒に考える

教師自身にとっての、「隣人になる」というチャレンジはどこで生じるのか？ 隣人を得た喜びを感じたことがあるか？ 自分の経験を生徒と分かち合う。

Q：疑問は解けましたか？

Q：神様があなたに、この人の隣人になるようにと送ってくださった人とは誰だと思いますか？

Q：これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト	マルコによる福音書 1章35～39節
子どもと親のカテキズム 問5	
参照教理問答	ウェストミンスター小教理問答 問39, 88 ハイデルベルク信仰問答 問86

問5 神さまが私たちに求めておられることは何ですか。

答 神さまを愛し、家族や友だちを愛し、神さまが造られたものを大切にして、祈りつつ歩むことです。

〈子どもと親のカテキズムの解説〉

問1～5は、『子どもと親のカテキズム』全体の構成を示しています。問5は、「第三部 感謝しつつ歩む道」に対応しており、そこに含まれた「二 愛に生きる道」と「三 祈りに生きる道」の内容を簡潔に言いあらわしています。

前週は、「二 愛に生きる道」に対応した内容を取り扱いました。今回は、「三 祈りに生きる道」に対応した内容を取り扱います。

「三 祈りに生きる道」では、祈りについての基本的・根本的なことが取り扱われた後、キリストが祈りの手本として教えてくださった「主の祈り」が取り上げられています。

キリストによって救われ、神の子どもとされた私たちに、神が求めておられる感謝の応答として、「十戒」と「主の祈り」が取り上げられる構成は、ハイデルベルク信仰問答と同じです。今回の説教箇所としては、キリストご自身が、愛を示す宣教のお働きをなさりながら、祈る時間を取り分けておられたことを示す箇所が選ばれています。「愛に生きる道」と「祈りに生きる道」は、切り離すことができません。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

【KEY1 聖書本文を語る】

〔STEP1〕聖書本文を読む。

マルコによる福音書1章35～39節を何度か繰り返して読む。また、その前後を読んで、文脈を確認する。

〔STEP2〕この個所のテーマは何か？

イエス・キリストは、祈りの時を取り分けながら、各地での宣教の働きをされた。

〔STEP3〕それをどのように展開しているか？

イエスは、宣教活動のさなか、朝早く起き、町（おそらくカファルナウム）を出て、人のいないところへ行かれ、祈っておられた。弟子たちが見つけると、「他の町や村へ行こう」と言われ、ガラリヤ中で福音を宣べ伝え、人びとを癒された。

【KEY2 神の福音を語る】

〔STEP1〕この個所で神はご自身について何をあらわされたか？

神は、町や村を歩き巡って宣教するために、イエスを遣わされた（38節）。神は、忙しい福音宣教や愛の業のさなかにあっても、祈りによってご自分との十分な交わりを持つことを望んでおられることを、イエスの模範を通して示された。

〔STEP2〕前後の章は、キリストについて何と言っているか？

神の子イエス・キリストが福音を宣べ伝え始められた。カファルナウムでは、会堂に入って教えられ（21節）、悪霊を追いつ出し（25～26, 34節）、病気を癒された（31, 34節）。今日の個所の後でも、重い皮膚病の人を清め（40～42節）、中風の人を癒し（2:11）、癒しの業と宣教が続けられた。

〔STEP3〕 聖書全体を通しての神の働きに、この箇所はどのように関係しているか？

キリストの癒しの業を伴う福音宣教を通して、神が王として支配される神の国が来ていることが示された (1:15)。神の国の進展は、キリストに従う者たちの福音宣教と愛の業によって、今も継続されている。それは、単なる知識の伝達や、人道的な働きによってなされるのではない。キリストに倣う祈りを通して、神との交わりの内になされ、神ご自身が完成へと向かわせるお働きである。

【KEY3 子ども達の信仰と生活のために語る】

〔STEP1〕 この箇所に登場する当時の人びとの必要は何だったか？

神の御心を尋ね求めることよりも、人びとのニーズに応えることを優先していた (37節)。

〔STEP2〕 私たちの教会の子どもたちに似たような必要があるか？

学校などで教えられる道徳教育では、ただ人との関係で良いことをすることだけが教えられる。しかし、人に対して厚意で行ったことも、悪く受

け取られることがあったり、良い結果に結びつかなかったりして、落胆させられることがある。また何かしてあげたいと思っても、自分の能力ではできないこともある。人との関係だけでは、限界がある。

〔STEP3〕 この聖書箇所の「その時」から、私たちの教会の「今」へ橋をかける。

愛をおこなって生きるときに、祈りを通して神との良い交わりを持つことの大切さを、主は教えられる。キリストは、人びとが大勢押し寄せるほどの忙しさの中にあっても、祈るための時間を取り分け、父なる神さまとの交わりを十分にとって、さらなる宣教の業へと進まれた。キリストご自身のやり方は、救いに入れられた私たちが愛に生きる上での手本となる。主との祈りの対話を通して、賛美と感謝、願いをささげ、さらには迷いや落胆をも打ち明けながら、主の業に向かう励ましを得つつ歩んでいこう。

(テモテ指導者訓練「聖書的説教」モジュールを参考に項目を立てました)。 (大西良嗣)

テキスト

マルコによる福音書 1章35～39節

子どもと親のカテキズム 問5

〔単元のねらい〕

キリスト教信仰は、単なる知識でも、道徳でもない。そこには、主との人格的な関係を欠かすことができない。祈りは、主との人格的対話であり、キリスト教信仰において本質的なものである。救いとは、祈りという主との人格的交わりに回復させられること（和解）だとも表現できる。救われて主の民・神の子どもとして受け入れていただいた私たちは、感謝の応答として愛に生きるが、それは決して義務感に満ちた重苦しいものではない。むしろ、祈りによって主と共に歩むことを体験する場となり、祈りを通して愛に生きることを繰り返し励まされることになる。それゆえ、愛に生きる道と、祈りに生きる道は、切り離すことができない。

祈りつつ歩みます**【物語り】**

朝早く、まだ日が昇らないうちというのは、とても静かです。空気がひんやりとしていて、時折、遠くで鳥の声が聞こえるかもしれません。東の空が、ほんの少しだけ明るくなってきて、もうすぐ夜が明けることはわかりますが、通りを歩いている人は誰もいません。ただ、イエスさまだけが、一人で歩いて、村を出ていられました。

その前の夜は、遅くまで、大勢の人が、イエスさまに病気を治してもらおうとして、イエスさまが泊まっておられたペトロさんの家に詰めかけて来ていました。イエスさまは、いろいろな病気にかかっている人たちを、一人一人癒されました。また、悪霊に取りつかれた人たちからは、悪霊を追い出されました。

おそらく今日も、大勢の人が、イエスさまのところにやって来ることでしょう。イエスさまの評判は、すでに知れ渡っていましたので、休む暇がないほどに、次々と人びとがイエスさまのもとを訪れていました。

イエスさまが一人になることのできる時間は、もしかしたら、こんなに朝早く、夜の明ける前しかなかったのかもしれません。イエスさまは、一人で村を出て、人のいないところへ行き、そこで祈っておられました。

イエスさまは、とても熱心に、神さまの福音を伝えていました。聖書のことを教えていました。そして、人びとの病気を癒したり、悪霊を追い出したりして、苦しんでいる人たちを助ける愛を実践されていました。それだけで、十分に神さまのためのお働きをしていると言うことができそうです。立派に、神さまの願っていらっしゃることを行っていると言えそうです。

けれども、イエスさまは、ただ父なる神さまの願っていらっしゃることを行うだけではなくて、父なる神さまと二人でお話ししたいと思われたわけです（問85）。それで、わざわざ、人がまだ起きていない時間に村を出て、人のいないところで祈られました。どんなことを祈られたのかは、聖書に書かれていないのでわかりませんが、神さまへの賛美や感謝、願いごと、他の人たちのためのとりなしなどを祈られたことでしょう（問88）。とても親密に、二人だけの時間を楽しまれたに違いありません。

イエスさまのお弟子さんたちは、朝目が覚めると、イエスさまがいらっしゃらないので、驚いたことでしょう。そうこうしているうちに、イエスさまを尋ねて人びとがやって来ます。ペトロさんや、ほかのお弟子さんたちは、慌ててイエスさま

を探しにいきました。

村から出て、しばらく行った人気のない所で、イエスさまが祈っておられる姿が見えます。

「イエスさま！何をしていますのですか！みんなが探しています！今日も大勢の人が来ているのですから、急いで戻ってください！」

ペトロさんがそんなふうに大声で呼びかける様子が目に浮かびます。

けれども、イエスさまは、こんなふうにお答えになりました。

「近くの他の町や村へ行こう。そこでも、わたしは神さまのこと伝え、聖書を教える。そのためにわたしは来たのだから」。

イエスさまは、父なる神さまに、いろいろとお祈りなさったことでしょう。そうして、同じ町でお働きを続けるのではなく、他の町や村へ行かれることを決意されました。父なる神さまがイエスさまをお遣わしになった目的は、一つの町だけでなく、もっと多くの町や村で、神さまのご支配が確かにここに来ていることをご自身のお働きを通して示すことだと悟っておられました。

イエスさまは、この後、ガリラヤというその地方のあらゆる町や村へ行って、ユダヤ人たちが集まる会堂に入って教えられました。それから、悪霊を追い出したり、病気を癒したりということも、ガリラヤ中の町や村でなさいました。

父なる神さまと二人きりになって祈る時間を、わざわざ作りながら、この働きを続けられたわけですから、へとへとに疲れてしまうこともあったことと思いますが、それでも、父なる神さまと一緒に、このお働きをしているのだというふうに、いつも感じることができただろうと思いま

す。

【結び】

救われて神さまの子どもとされた私たちは、イエスさまと同じように、お父さんである神さまのお働きをしていきます。神さまが喜ばれるように、家族や友だちを愛します。困っている人を助けたり、悲しんでいる人を慰めたりします。実は、そのお働きは神さまご自身のお働きなので、神さまも一緒に働いてくださっています。お祈りをしながら、神さまのお働きをするとき、神さまも確かに一緒に働いてくださっていることに気づかされることがよくあります。

困っている人を助けようとしても、私たちにはどうしても助けられないこともあります。私たちの力だけで助けなければならないとしたら、絶望するしかありません。でも、祈ることができる私たちは、私たちよりもっと力のある神さまがお働きくださるようお願いすることができます。どうしたら良いかわからない時も、祈りながら、神さまの願っておられることを考えます。祈りがすぐに応えられないこともありますが、力ある天のお父さまに祈ることができる私たちには、希望がなくなってしまうことは決してありません。

神さまの子どもにされた私たちは、人間のお父さんとお話するように、天のお父さまである神さまとお話します。うれしかったこと、悲しかったこと、心配なこと、お願いしたいこと、本当に自由に、お話ししていいのです。いつもお祈りしながら歩むことで、いつでも神さまと一緒にいてくださる喜びをたくさん味わっていきましょう。

(大西良嗣)

[今週の暗唱聖句]

テサロニケの信徒への手紙一 5章17節

絶えず祈りなさい。

〈ねらい〉

神さまの子どもとして神さまの御心になんて歩む——愛に生きる——ためには祈ることが大切であると教える。

〈展開例〉

Q：わたしたちはイエスさまを信じることによって神さまの子どもとされます。神さまはそのわたしたちに何を求めておられるのでしょうか。

A：神さまを愛し、隣人を愛して生きることですね。そのような愛のために働いていくことです。イエスさまもそのように働かれました。人々に神さまの福音を宣べ伝え、病気の人々を癒していかれました。

Q：ではそのように神さまに従い、愛に生きていくことは自分の力や努力だけでできるのでしょうか。

A：いいえ。わたしたちの力は弱く、神さまの助けや導きを必要としています。

Q：イエスさまは忙しいお仕事の中で、朝早く起きて、人のいないところで何をしておられましたか。

A：お祈りです。

イエスさまにはわたしたちとは比べものにならない力がありました。しかし、そのイエスさまも自分の力に頼って、自分の思うままに働いていかれたわけではありません。静かな場所で父なる神さまにお祈りする時間を大切にされたのです。

Q：お祈りするとはどういうことかな。

A：神さまの子どもとされたわたしたちが父なる神さまと交わり、お話することです。

Q：みんなにもお父さんやお母さんがいますね。どんなことをお話ししますか。

A：学校であった楽しいこと、逆に悲しかったことを話したりするかもしれません。困ったときには何かを頼んだり、お願いしたりするでしょう。何か良いものをもらったときには「ありがとう」と言うでしょう。悪いことをしたら「ごめんなさい」と言いますね。

お祈りもそれと同じです。わたしたちは神さまの子どもとして神さまに親しく語りかけることができるのです。神さまはそのわたしたちの祈りに耳を傾けてくださいます。

Q：なぜ祈ることが必要なのでしょうか。みんながお父さんやお母さんに何も話さなかったらどう思われるかな。

A：きっとお父さん、お母さんは寂しく思うでしょう。それと同じように、父なる神さまもわたしたちが神さまにお祈りすること、お話しすることを望んでおられるのです。そして神さまはわたしたちの祈りに答えて、わたしたちに必要なもの、良いものを与えてくださるのです。

〈結論〉

神さまの子どもとして神さまに喜ばれる歩みをするためにはお祈りすることがとても大切です。忙しいお仕事の中で祈られたイエスさまの姿にそのことが示されています。わたしたちは祈ることによって、神さまの御心を尋ね求め、神さまからの恵みをいただきます。そのことによって神さまの御心になんて歩いていくことができる。神さまの求められる愛に生きていくことができるのです。いつも神さまに祈りつつ、歩んでいきたいと思います。

【目標】

祈りの力、主イエスの祈りによって守られていることを学ぶ。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 改めて御言葉に取り組む

①上から下への、神による祈り

聖書において祈りとは、単純に下から上に、私たちが天に向かって投げかけるというものではない。むしろキリスト教では、祈りは下から上に上るよりも強く、上から下へ降りてくる。主イエスは、朝暗いうちから祈られた。私たちは、神様によっていつも祈られている、神様によって祈りに覚えていただいている、そういう私たちであり、そういう中を、今も私たちは歩んでいる。その中で私たちは今朝もまた、その神様に祈られている中で、それぞれ布団から起きあがって、この場所までの道も守られて、教会に集まって来ることができた。

②私たちの祈りの前提としての主イエスの歩み寄り

主イエスが、私たちのために祈ってくださることは、私たちにとって、この上なくありがたいことであり、力づけられることである。なぜなら私たちは、祈り祈られるという親しい関係をいつも求めている。私たちにとって一番辛いのは、寂しさを感じることであり、自分の孤独を感じる時。よって誰もが、親しく一つになれる交わりというものを、本当に必要としている。しかしなかなかそれが、したくても出来ない部分がある。信頼を裏切られることのへの恐れ、自分が傷つくことのへの恐れなどが先行し、親密さを必要としながらも、そこから遠ざかる私たち。しかし、こう

いう傷や不器用さや、問題を抱えている私たちと、まず主イエスが、とても親しく寄り添ってくださる。この方が、私たちのためにいつも絶えず祈ってくださっているということを知って、励まされたい。この主イエス・キリストは、私たち一人一人と親しい結び付きを持ちたい、私たちがいつも求めているその一体感で私たちと一つになりたい、どうかそのようにして、御自分とこの私たちを結び付けてくださいと、主イエスは父なる神様に、自ら祈ってくださっている。

③主イエスの御名によって（主イエスを介して）祈ることができる幸い

戦場で兵士が死に向かうときに、最後に叫ぶ叫びは、「お母さん！」という叫びなのだそう。人は、優しさ、暖かさを、本能的に母親に求める。なぜなら母こそが、常に自分の味方で、自分を守るために寄り添ってくれる。そして、自分の叫びに十分に答えて、傷をいやし、優しさを与え、涙に答えて孤独を癒やしてくれる存在だと、皆が知っているから。しかし、私たちは母にもまसार、呼びかける相手を知っている。それが、主イエス・キリストの名である。主イエス。この名前を呼ぶ時に、この方の愛が、母親にまさるとも劣らない優しい愛で私を受け入れてくれ、確実な保護の中に入れてくださる。この方が、この私の恐れや傷を理解して、この心を内側から抱きかかえてくださる。それが、キリストの御名で祈る時に成立する。そのような親しい、安心できる祈りの関係を、主イエスと持って欲しい。

3. 生徒と一緒に考える

教師自身にとっての、「隣人になる」というチャレンジはどこで生じるのか？ 隣人を得た喜びを感じたことがあるか？ 自分の経験を生徒と分かち合う。

Q：疑問は解けましたか？

Q：一人でいる時に祈った経験はありますか？

Q：これからの一週をどんな一週間にしたいですか？

テキスト

ペトロの手紙二 1章16～21節

子どもと親のカテキズム 問6

参照教理問答

ウェストミンスター小教理問答 問2,3

問6 まことの神さまを知り、神さまと共に歩む道は何によってわかりますか。

答 神さまの言葉である聖書によってです。御言葉は私たちの道の光です。

〈カテキズム解説〉

子どもと親のカテキズムは、問1から問5までが「はじめに」と題する序論で、問6から本論である第一部「信じて歩む道」に入ります。第一部では、神がどのようなお方であり、どのような働きをされるか、私たちが神について信じるべき内容が記されています。その上で、その冒頭の問6と問7は「道の光としての聖書」という項目にまとめられており、私たちが神について知り、信じるべき事柄が、他ならぬ聖書の中に語られていることが示されています。この項目を常に意識することによって、このカテキズム全体が聖書に則っていること、私たちの信仰がただ聖書によって導かれることを確認することができますし、信仰生活において常に聖書に立ち返る良い習慣を身につけることができます。

問6は、今回と次回の二回に分けて扱います。特に今回は、答えの前半「神さまの言葉である聖書によってです」という部分を扱います。次回は答えの後半部分「御言葉は私たちの道の光です」の部分に焦点を当てて扱う予定です。次回の箇所を扱うときには今日の箇所も合わせて確認してください。

私たちはみな、神についての素朴な知識を持っています。キリスト者でなくても、人は自分たちの生命の源に対する畏敬や、人生を守り導く存在に対する信頼の思いを心の中に持っています。けれども、それら自然に与えられた知識だけを通して、私たちが正しい信仰を持ち、十分に自らの生涯の歩みを整えることができるわけではありません。どんなに知識を探求しても、どんなに修行を重ねても、人が自分で獲得した知恵と言葉では正

しい神を十分に見出すことはできません。そのような無力な人間に対して神の側から、神ご自身について知らせる神の言葉が与えられます。それが聖書です。

キリスト者にとって、聖書が神の言葉であるというのは当たり前のことのようにですが、このことをしっかりと確かめることによって、私たち自身の信仰の基盤が強く据えられますし、その信仰を他の人びとに伝えるときにも確かなよりどころを持つことができます。

聖書の素晴らしさはさまざまな面から述べることができますが、私たちが聖書に絶対的な信頼を置き、聖書の示すところに従うには、単に素晴らしいというだけでなく、聖書が人を従わせる権威を持ったものとして受け入れられるものでなくてはなりません。聖書が他のすべての書物やすべての言葉と異なる特別な権威を持つのは、それが神の言葉だからなのです。

聖書が神の言葉であるということの理由として、聖書自身が最もはっきりと述べているのは、それがイエス・キリストについての証言であるということです。それは、歴史上実在した一人のお方についての確実な証言であると同時に、そのお方が神の子であり、十字架において私たちの贖いを実現した救い主であるということの証言です。

旧約聖書のように、直接イエス・キリストについて言及していなかったとしても、この条件に当てはまるから聖書と呼ばれるのですし、逆に、教会のさまざまな聖書外の文書や伝説のように、イエス・キリストの名前に触れていても、その十字架における救いについての証言でなければそれは聖書と認められないのです。

このことは、今度はわたしたちが聖書を読むときの読み方にも影響を与えます。私たちは聖書を読むときに、直接であれ間接であれ、イエス・キリストの十字架を教えるものとして聖書を読む必要があります。イエス・キリストと直接関係ないような聖書の箇所にもその救いが指し示されていたり、その救いを持たない人の悲惨さなどが教えられていることを念頭に読むと良いでしょう。

この問6の特に前半は、旧「子どもカテキズム」では、問5に相当します。教案誌の1号、13号、29号、45号なども参照してください。

〈聖書テキストの解説と黙想〉

この手紙の当時、教会は既に地中海世界のあちこちに広がると同時に、世代が入れ替わってきており、直接イエス様を知らない信徒たちが増えてきていました。キリスト者を名乗りつつ「自分勝手に解釈」した旧約聖書の理解に基づいた「巧みな作り話」をもって教える人びとが少なからず存在し始めていたのです。

ペトロは、そのような自分勝手な解釈に基づく主張に対して、自分たちが教え伝えているのは、自分たちが目撃した「キリストの威光」であり、それを宣言し保証する神の声であったことを主張します。そして、聖書の預言が神の言葉であるからには、神の声が宣言した救い主キリストを証するものとして解釈されるべきであると主張するのです。

ここで述べられている「聖書」とは、こんにちでいう旧約聖書のことです。この手紙が記された頃には、当然のことながら新約聖書はまだこんにちのような形ですべてが出来上がっていた訳ではありません。しかしやがて新約聖書の各文書が作られ、旧約聖書と同様に神の言葉として解釈されるべきもの、むしろ旧約聖書の預言の実現として

聖書を完成させるものと理解されました。旧約新約が合わさって、やがて来る明けの明星であるキリストを指し示す「ともし火」として受け入れられたのです。

このように、聖書がこの世界の星の数ほどある諸々の本と根本的に異なるものであること、すなわち、神によって語られた神の言葉であり、わたしたちを救う救い主を提供し、その救いを確実なものとして教えること、それ故に、私たちはその言葉に対して真摯な信仰と誠実な知恵をもって向かい合う必要があること、絶えず自らを照らすともし火として傍らに置くべきことを心に留めたいものです。

〈子どもたちに対して〉

現代は、多様な価値観が存在し、それぞれが自分の選ぶところによって、自分の意志でさまざまな選択をする時代です。どれか一つの価値観に絶対的に従わなければならないと押し付けられることは健全ではありませんし、子どもたちからも拒絶されてしまうことでしょう。しかし、聖書の言葉は確かな神を指し示すものであり、実際に人を救い、人の生涯を導く神の言葉です。ペトロ自身をはじめとして、数えきれない程の人びとがこの言葉によって生かされ、この言葉に従って歩み、救われた者の恵みと喜びを受け取り、誠実な姿勢でそれらを証言してきました。どんなに時代が変わろうとも、私たちは必ずこの聖書の言葉に慰めと導きと喜びを見出すことが可能ですし、聖書の言葉は決して揺らぐことなく変わらずに私たちを支えてくれる力なのです。

子どものときからこの神の言葉を良く学び、良く従って日々を送ることがどんなに大きな恵みであるか、その確かさを伝えることができればと思います。
(長田詠喜)

テキスト

ペトロの手紙二 1章16～21節

子どもと親のカテキズム 問6、参照：問49

参照教理問答

ウェストミンスター信仰告白 第1章

〔単元のねらい〕

私たちの生活は、教会だけに留まらずすべての面において、根本的に聖書によって導かれ、支えられています。なぜなら、聖書は神の言葉であり、それは、聖書が私たちの救いであるキリストの十字架を指し示し、その救いの言葉が、現に私たちの生活を支える輝きを持っているからです。私たちの命であるが故に、私たちは順調なときも逆境にあっても聖書に立ち返り、聖書によって導かれて力を与えられることが重要なのです。聖書を神の言葉として心から誠実に向かい合うことが大切です。

聖書は大切な言葉**聖書は何を教えるか**

イエス様が天に帰られてから、ずいぶんと年月が過ぎました。教会もずいぶん増えてきて、教会に集まる人たちもたくさんになってきました。ペトロは相変わらずあちこちの教会でイエス様のことを教え伝えていましたけれども、年月が過ぎれば過ぎるほど、イエス様と直接会ったことがある人、その教えを直接聞いたことがある人たちは段々と少なくなってきました。その代わりに、教会の中でも聖書を勝手に読んで、ぜんぜん違う教えを教える人たちまであらわれてきたのです。「その教えはペトロ先生が教えている教えと違いますよ」というと「ペトロ先生は、上手に作り話をしてるんだ。わたしが教える方が本当の教えなんだ」などと言う人までいたのです。ペトロは教会に手紙を送り、そんな人たちに迷わされてしまわないようにと教えました。聖書の中には色々なお話が教えられていて、中にはとても難しいお話もあるのですが、それらのお話は勝手に意味を考えてしまっってはよくないのです。最も大切なことは、私たちが救ってくださるイエス様です。聖書は、イエス様について教えているのです。

ペトロは、自分たちが間違いなくイエス様を見たこと。それも単なるイエス様でなく、神の子として宣言され、神様の誉れと栄光をお受けになる方として見、その宣言を聞いたことを証言します。

更に、このイエス様についての神様の宣言は、神様から直接与えられた預言の言葉として、私たちを照らすともし火であることをも宣言します。聖書には、イエス様について、イエス様が神の子であり、私たちの救い主であることが教えられているのです。そして、その言葉は、神様の言葉としてしっかりと聞かなければならない言葉なのです。

聖書はイエス様を伝える

聖書の中にはさまざまな本があります。イエス様の教えと働きを伝えている福音書をはじめ、旧約聖書にはアダムやノア、アブラハム、サムソン、ダビデなどの有名な人、素晴らしい人が出てきますし、中には眉をひそめるような人物や出来事も出てきます。どんなふうに読んだら良いのか難しい話もいくつもあります。昔からさまざまな人たちがその物語やお話をいろいろと説明し、教えてきました。中には今日のペトロの手紙の中に出て来る人びとのように、聖書の教えを「自分勝手に解釈」する人たちもいました。「聖書に書いてあるから」といって、人を傷つけたり、不安に陥れたりするような教えを語る人もいたのです。

けれども、ペトロが教えるように、聖書の内容が、イエス様を教えているものだということがわかっていれば、私たちは、「自分勝手な解釈」に

迷わされてしまうことはありません。新約聖書だけでなく、イエス様が出てこない、旧約聖書のあらゆる物語も、いろいろな仕方でイエス様を指しているのです。

私たちが聖書を読むときには、いつもイエス様を心に留めて読んでいけば良いのです。また、聖書の話の聞くときには、イエス様と結びつけて聞いていけば良いのです。そうすれば、万が一、間違った勝手な教えを聞いたときには、それが間違いであることを見分けることができます。

聖書はわたしたちの光

聖書が神様の言葉であるということは、その内容が神様の救い、つまりイエス様の十字架を指しているということだけでは済みません。神様ご自身の言葉なのですから、私たちは神様ご自身に向かい合うように、聖書の言葉に向かい合います。神様は、私たちのすべてをご支配なさり、教え導いてくださるお方であり、従わせるお方です。また、私たちを深い愛で包み、守ってくださるお方です。ですから私たちは、神様の愛を喜ぶように

聖書の言葉を喜び、神様の知恵で教えられるように聖書の言葉で知恵を与えられ、神様のご支配に従うように聖書の言葉に従うのです。

大好きな人から手紙をもらったなら、私たちはわくわくしながらその手紙を読むでしょう。尊敬する先生から話しかけてもらったならば、そのお話を忘れないように真剣に耳を傾けるでしょう。私たちを愛し救ってくださる、私たちを大好きな神様が、私たちに語りかけてくださる言葉が聖書です。ですから、私たちは聖書の言葉をわくわくしながら、真剣に聞くのです。

そのように誠実に聖書の言葉に向かい合うとき、聖書の言葉は必ず私たちを照らし出します。ペトロをはじめとして、聖書の中に登場する人たちはみな、この神の言葉に信頼を置き、それによって道を示され、支えられてきました。聖書はそのことを証言しています。私たちは聖書の言葉を大切にすることで、私たち自身の生活を神様の恵みに満ちたものとする事ができるのです。

(長田詠喜)

[今週の暗唱聖句]

詩編 119編 105節

あなたの御言葉は、わたしの道の光
わたしの歩みを照らす灯。

〈ねらい〉

まことの神さまを知り、神さまと共に歩むためには神さまの言葉（聖書）によって道を照らしてもらう必要があることを教える。

〈展開例〉

Q：カテキズムと一緒に学んでいます、わたしたちにとって一番大切なことは何だったでしょうか。

A：神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことです（問1）。

Q：ではどうやったら神さまと共に歩むことができるのでしょうか。

A：まず神さまとはどのようなお方であるのか知る必要がありますね。

Q：ではどうやったら神さまのことを知ることができるのでしょうか。初めて会った人と知り合いになるために何をしますか。

A：自己紹介をしますね。名前や年齢や好きなものを言ったりします。実はわたしたちも神さまのことを知るためには神さまに自己紹介してもらう必要があるのです。わたしたちが勝手に頭の中で神さまはあんな方かな、こんな方かなと考えていてもだめです。

Q：では神さまの自己紹介はどこで聞くことができるのでしょうか。

A：わたしたちは今、直接この耳で神さまの声を聞くことはできません。でもわたしたちは確かに神さまの言葉を聞くことができます。それは

聖書に神さまの言葉が記されているからです。

Q：聖書はいろんな時代の、いろんな人々によって書かれました。なぜそれが神さまの言葉なのでしょう。

A：それは聖書というのは人々が神さまの霊（聖霊）に導かれて記したものだからです。それゆえ聖書の本当の著者は聖霊であり、神さまご自身とすることができのです。

その聖書によって、わたしたちはまことの神さまがどういうお方であるのかを知ることができます。またそれだけでなく神さまと共に歩む道がどういう道であるのかを知ることができます。

Q：みんなは真っ暗なところを歩いたことがあるかな。

A：家を真っ暗にすると自分の家でも歩くのが難しいね。壁や物にぶつかったりして危険です。実は聖書の御言葉なしに生きていくというのは、そういう暗闇の中を歩いていくようなものなのです。御言葉なしではわたしたちはどちらに進んでいけばよいのか、どうやって生きていけばよいのかわからないのです。

もちろん、聖書以外にもこうやって生きていけばよいという教えはあるでしょう。でもそれは命に至る道、天の御国に至る道ではないのです。その道を教えているのは聖書だけなのです。それゆえ、御言葉こそわたしたちの道の光、わたしたちの歩みを照らす灯なのです。この聖書の御言葉に照らされて神さまと共に歩む道を歩んでゆきましょう。

【目標】

主の御言葉について考える。

1. 説教を深めるために

Q：説教を聞いて新しく発見したことは？

Q：わからなかったことは？（分級では教師が一方的に教えるのではなく、ここで出された生徒の疑問を大切にしつつ、時間を対話的に導いてゆけるならば理想的である）

2. 改めて御言葉に取り組む

①聖書とは

ペトロの手紙二1章20節。聖書とは、神様の御意志が人間の言語で記された驚くべき書物。なぜそのような神の言葉の言語化が必要だったのか？その理由は、神様が御自身の意志を人間に伝えるため。よって聖書は、その目的に適う仕方、その言葉を通して、神様の御意志が誤ることなく人間に伝わり、理解される必要がある。つまりその意味で、聖書は誤読されたり、誤解されたり、勝手に解釈されてはならず、神様からのメッセージを正しく汲み取るように読まれ、理解されなければならない。

②神様は聖書を通して何を人間に語られるのか？

聖書の中心点は、私たちがそれを探るより先に、聖書自身が語っている。聖書自身が、「これが最も大切だ」と語ることを大切にしながら、それを掴まなければならない。当該箇所のほかには、ヨハネによる福音書5章39,40節、コリントの信徒への手紙一15章1～3節、テモテの信徒への手紙二3章15節など。

聖書は、「キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与える」書物（テモテの信徒への手紙二3章15節）。聖書は、この知恵を人間に伝えるための書物であるため、キリストへの信仰以外のものを獲得することを目指して聖書を読んでも、また神様による救いの獲得以外

のことを目指して聖書を読んでも、そこから救いに導く知恵以外の知恵を引き出そうとしても、それは本来的な聖書の用い方ではなく、そのような読み方では、聖書が伝えようとするところを読み取れない。

③主の御言葉の卓越性

主の御言葉、これほど真実で、嘘のない、変わらない、重みのある言葉はない。テレビで話される言葉、新聞の言葉、教科書の言葉などと聖書の御言葉を比べて考えてみるならば、その圧倒的な質の違いは歴然としている。それはどういう質の違いなのか？踏み込んで議論できれば面白い。御言葉が蜜のように甘いと言われるのはなぜか（エゼキエル3:3、黙示録10:9）？それは、聖書の言葉が、私たちに永遠の命の救いを与え、私たちを罪とその報酬である死から救う言葉だからである。それは全てのみ言葉について妥当する。聖書の言葉が、私たちの救いのために語られた甘い言葉、私たちを潤し喜ばせる言葉であることを知りたい。

3. 生徒と一緒に考える

教師自身にとって、聖書の言葉と何か、その重要性、奥深さを生徒と分かち合う。

Q：疑問は解けましたか？

Q：聖書はあなたにとって何ですか？教科書？参考書の中のひとつ？困ったときの人生マニュアル？

Q：聖書の言葉は特別だと思ったことはありますか？

Q：聖書から神様の声を聞き取ることができますか？

Q：聖書の御言葉を、ほかのテレビや新聞や教科書などの言葉と比べてみましょう？どこか違うところはありますか？

Q：あなたが今持っている聖書の御言葉を、今週どのように使っていったらよいでしょう？

2015年7～9月カリキュラム (第58号)

— 『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル 第1年—

月 日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参照教理問答
		聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
7月5日	人生の光	問6	ウ小2, 3
		ヨハネ4:43～54	詩編119:105
	生きておられる神は、聖書を通して今も具体的に導かれる。光の中を歩もう。		
12日	聖書の内容	問7	—
		テモテニ3:15～17	テモテニ3:15, 16
	聖書は、神と信仰生活について記された愛の手紙。福音的に読み、味わおう。		
19日	三位一体の神さま 人格としての神	問8	—
		ヨハネ4:1～26	ヨハネ4:24
	神は人を対話の相手として創造された。神とお話する歩みを深めよう。		
26日	三位一体の神さま 神の属性	問8	—
		ヨハネ4:1～26	ヘブライ13:8
	霊にして、永遠、不変、偏在の生ける唯一の神なくして被造物なし。		
8月2日	唯一の神	問9	ウ小5
		申命記4:32～40	申命記4:35
	まことの神はただおひとり。この神のみを神とする幸いを知ろう。		
9日	偶像礼拝の空しさ	問10	ウ小47, 48
		イザヤ44:9～20	レビ19:4
	偶像を求め、あふれる社会の中で、神の悲しみを思い、真の礼拝を求めよう。		
16日	三位一体・神の本質	問11	—
		マタイ28:16～20	ヨハネ4:16
	いのちと愛の交わりの内にいます三位の神と交わる至福を求めて生きよう。		
23日	三位一体・神の経綸	問12	ウ告白8:6, 8
		エフェソ1:3～14	テモテニ1:9
	真の神が全存在をもって、人間を救われる。救いの神とその確かさをたたえよう。		
30日	父なる神の本質	問13	子ども11、ウ大10, 11
		マタイ6:25～34	ヨハネ1:18
	キリストの父であるゆえに私たちの父となって下さった主権者をたたえよう。		
9月6日	創造者なる神	問14	ウ小9、ウ大15、ハイデ26
		創世記1:1～5	コリント二4:6
	無から良いものを創造された神の恵みをたたえ、善きものらしく生きよう。		
13日	摂理の神	問15	ウ小11、ハイデ27, 28
		エステル4:1～17	エステル4:14b
	歴史を創造し、支配する神のよき力を信頼し、へこたれず、安心して生きよう。		
20日	父なる神の親心	問16	ウ小11、ハイデ1
		ローマ8:28, 30、ヘブライ12:5～11	ローマ8:28, 30
	父なる神は、神の子のためにどんなことでも益に変えられる。神のみに頼ろう。		
27日	人間・神のかたち	問17	ウ小10
		創世記1:26～28	詩編8:4, 5
	神のかたちに似せられた自分と他者の尊厳を知り、輝く人間、人生を求めよう。		

2015年度 年間カリキュラム (第57～60号)

— 『子どもと親のカテキズム』に基づく二年サイクル—
(2015年4月～2016年3月)

	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
2015年 第57号	4月5日	復活祭	復活されたキリスト	
	4月12日		神と共に歩む	問1
	4月19日		神の子とされて	問1
	4月26日		神を知る喜びに生きる	問2
	5月3日		神と人に仕えて歩む	問2
	5月10日		イエスさまを信じる	問3
	5月17日		神の子とされた喜び	問3
	5月24日		呼び出されて生きる	問4
	5月31日		派遣されて生きる	問4
	6月7日	聖霊降臨祭	キリストの教会のはじめ	
	6月14日		愛に生きる	問5
	6月21日		祈りに生きる	問5
	6月28日		神の御言葉	問6
第58号	7月5日		人生の光	問6
	7月12日		聖書の内容	問7
	7月19日		人格としての神	問8
	7月26日		神の属性	問8
	8月2日		唯一の神	問9
	8月9日		偶像礼拝の空しさ	問10
	8月16日		三位一体・神の本質	問11
	8月23日		三位一体・神の経綸	問12
	8月30日		父なる神の本質	問13
	9月6日		創造者なる神	問14
	9月13日		摂理の神	問15
	9月20日		父なる神の親心	問16
	9月27日		人間・神のかたち	問17

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム
第59号	10月4日		人間・神と人と共に	問17
	10月11日		人間の使命	問18
	10月18日		人間・罪の起源	問19
	10月25日		罪とは何か	問20
	11月1日		罪人の悲惨	問21
	11月8日		罪人の歩み	問22
	11月15日		わたしの罪 神の怒りと裁き	問23
	11月22日		完全な堕落 キリストの贖罪	問24
	11月29日	待降節	救い主の約束	問25
	12月6日	待降節	二性一人格	問26
	12月13日	待降節	キリスト・真の神	問27
	12月20日	降誕祭	キリストの降誕	(問26)
	12月27日		キリスト・真の人	問28
2016年 第60号	1月3日	新年	教会と共に歩む一年	(問4)
	1月10日		イエス・キリストとは	問29
	1月17日		キリストの高い状態と低い状態	問30
	1月24日		祭司なるキリスト	問31
	1月31日		預言者なるキリスト	問32
	2月7日		王なるキリスト	問33
	2月14日		聖霊・ただ恵みによって	問34
	2月21日		聖霊・キリストとの交わり	問35
	2月28日		救いとは何か	問36
	3月6日	レント	聖化の歩み	問37
	3月13日	レント	救いの確かさ	問38
	3月20日	受難週	十字架のキリスト	
	3月27日	復活祭	復活のキリスト	

救済史に基づく二年サイクル

	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム	バックナンバー
2015年 第57号	4月5日	復活祭	復活されたキリスト		
	4月12日		世界の創造	創世記1:1～2:3	第30, 54号等
	4月19日		人間の創造	創世記2:4～25	第30, 54号等
	4月26日		人間の墮落	創世記3:1～24	第9, 54号等
	5月3日		カインとアベル	創世記4:1～16	第30, 46号等
	5月10日		ノア契約	創世記6:5～9:17	第37号
	5月17日		バベルの塔	創世記11:1～9	第21, 37号等
	5月24日	聖霊降臨祭	キリストの教会のはじめ	使徒2:37～42	
	5月31日		アブラハム契約	創世記11:27～12:7	第38, 55号等
	6月7日		イサク誕生	創世記18:1～15, 21:1～8	第38号等
	6月14日		キリストの名による宣教	使徒3:1～10	第27, 53号等
	6月21日		教会への迫害の始まり	使徒4:1～22	なし
	6月28日		教会の理想的姿と問題	使徒4:32～5:11	第18, 27号
第58号	7月5日		教会組織のはじめ	使徒6:1～7	なし
	7月12日		教会の殉教者のはじめ	使徒6:8～7:60	第12, 27号
	7月19日		エルサレム外への宣教はじめ1	使徒8:1～25	なし
	7月26日		エルサレム外への宣教はじめ2	使徒8:26～40	第7, 12, 29号
	8月2日		パウロの回心	ガラテヤ1:11～24	なし
	8月9日		異邦人への使徒・信仰による義	ガラテヤ2:1～21	なし
	8月16日		天上のキリスト	黙示録1:9～20	第28, 54号
	8月23日		あらゆる国民による賛美	黙示録7:9～17	第32号
	8月30日		新しいエルサレム	黙示録 21:22～22:5	なし
	9月6日		キリストの再臨	黙示録22:6～21	第28号
	9月13日		ハンナの祈り	サムエル上 1:1～20	なし
	9月20日		サムエルエルへの主の語りかけ	サムエル上 3:1～21	第8, 20, 41号
	9月27日		サウル、王とされる	サムエル上 8:1～10:27	第41号

年・号	月 日	教会暦・行事	主題	子どもカテキズム	バックナンバー
第59号	10月4日		主に従わなくなるサウル	サムエル上 14:47～15:35	なし
	10月11日		ダビデ、油を注がれる	サムエル上 16:1～13	第42号
	10月18日		ダビデとゴリアト	サムエル上 17:1～58	第25, 42号
	10月25日		ダビデを憎むサウル	サムエル上 18:6～30	なし
	11月1日		サウルを敬うダビデ	サムエル上 24:1～23	なし
	11月8日		ダビデ、神の箱をエルサレムへ運ぶ	サムエル下 6:1～23	なし
	11月15日		ダビデ契約	サムエル下 7:1～17	第42, 56号等
	11月22日		ダビデの罪	サムエル下 11:1～12:24	なし
	11月29日	待降節	救い主の約束	問25	
	12月6日	待降節	子なる神・二性一人格	問26	
	12月13日	待降節	子なる神・真の神	問27	
	12月20日	降誕祭	キリストの降誕	(問26)	
	12月27日				
2016年 第60号	1月3日	新年	教会と共に歩む一年	(問4)	
	1月10日		少年イエス	ルカ2:41～52	第23号
	1月17日		洗礼者ヨハネの証言	ヨハネ1:19～34	第11号
	1月24日		主が誘惑を受ける	ルカ4:1～13	なし
	1月31日		主が来られた目的	ルカ4:16～30	なし
	2月7日		主が病人を癒す	ルカ4:38～41	なし
	2月14日		漁師を弟子にする	ルカ5:1～11	第47号
	2月21日		敵を愛しなさい	ルカ6:27～36	第29号
	2月28日		五千人にパンを与える	ルカ9:10～20	なし
	3月6日	レント	山上の変貌	ルカ9:28～36	なし
	3月13日	レント	主の晩餐	ルカ22:14～23	なし
	3月20日	受難週	十字架のキリスト		
	3月27日	復活祭	復活のキリスト		

主を喜び祝うことこそ、
あなたたちの力の源である



〈執筆・編集者よりひとこと〉

●今号より編集に加わることとなりました。大切な働きを少しでも担えればと願っています。

(長田詠喜)

●『子どもと親のカテキズム』を用いたカリキュラムによって、子どもたちが、神さまの子どもとして、神さまと共に歩むことの喜びを豊かに知っていくことを願っています。各教会での取り組みが、主によって祝福されますように。(大西吉嗣)

〈あしがき〉

●第57号をお届けします。今号も多くの方々のご協力をいただきました。神様と執筆・読者の皆様に心からの感謝を申し上げます。

●『子どもと親のカテキズム』の解説の原稿を3回にわたってお寄せくださった牧田吉和教師(山田教会牧師)に感謝いたします。今年秋には、大会教育委員会として、カテキズム解説を皆様にお届けする予定です。

●「教会学校教師のための神学講座」として、吉田隆先生の「全生活にわたる感謝〜『十戒』を生きる」を連載します。これはかつて成人課の教案として掲載されたものの再掲です。子どもたちのためのみならず、70周年宣言に備えるためにも、教師会での学びにお用いください。再掲を許可してくださった吉田隆先生に感謝いたします。

●「教会学校訪問」を執筆をしてくださった関キリスト教会の皆様感謝いたします。

●今号から、『子どもと親のカテキズム』を用いたカテキズムカリキュラムになります。まだお買い求めいただいていない教会は、大会教育委員会を通してくださると、定価540円(税込)のところ、400円(ただし送料別)で、お買い求めいただけます。

問い合わせは、大会教育委員会と教案誌編集部を兼ねている、安田直人(田無教会)まで。

E-mail: naoto@yasudafam.com

●長田詠喜教師の説明にもありますように、救済

史カリキュラムの表を、巻末につけてあります。対応する過去の巻がある場合には、指示があります。それぞれの教会学校の状況に合わせて、カテキズムカリキュラムだけではなく、救済史カリキュラムも用いたいとお考えの場合、参考にしてくだされば幸いです。

●今号から、大会教育委員会発行となった教案誌の最大の変化は、『子どもと親のカテキズム』の採用と共に、何と言ってもIBUKIによる新しい表紙デザインです。このためにお働きくださった中村未生兄、高橋乃亜兄に感謝いたします。今後、表紙のみならず全体のデザインも変更することができれば祈っています。ただし、正確な移管の日付が4月1日のため、奥付が変わるのは58号からになります。背表紙は一足先に衣替えです。

●日本キリスト改革派教会の教育機関紙『リジョイス』の「いのちのパン」についても、ご意見をお寄せください。教案誌編集部から提供させていただきます。それぞれの祈りの場が主の祝福に満たされますように。

●教案誌のためにご奉仕くださる方を募っています。ぜひ、編集部にお気軽に声をかけてください。問い合わせは相馬伸郎まで。

E-mail: iwanoue@me.ccnw.ne.jp

〈購読の申し込み〉

●『教会学校教案誌』をぜひご購入ください。

教案誌はバックナンバーもあります。第44号までは一部500円で販売しています(品切れの号もあり)。

●教案誌購読受付と送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。副読本『主は羊飼』(800円)のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所 辻幸宏まで

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

E-mail: yukihiro.tsuji@nifty.ne.jp

☆ 執 筆 者 一 覧 ☆

まえがき	相馬伸郎（名古屋岩の上教会牧師）
芦田高之（新浦安教会牧師）	木下裕也（名古屋教会牧師）
巻頭説教	芦田高之（新浦安教会牧師）
岩崎 謙（神港教会牧師）	安田直人（田無教会牧師）
カテキズムカリキュラムオリエンテーション	長谷川潤（四日市教会牧師）
相馬伸郎（名古屋岩の上教会牧師）	大西良嗣（滋賀摂理教会牧師）
救済史カリキュラムについての説明	長田詠喜（新所沢伝道所宣教教師）
長田詠喜（新所沢伝道所宣教教師）	分級展開例
『子どもと親のカテキズムについて』(3)	小学科上級 坂尾連太郎（南与力町教会牧師）
牧田吉和（山田教会牧師）	坂尾亜海（南与力町教会信徒）
教会学校訪問	中学科 吉岡契典（板宿教会牧師）
関キリスト教会日曜学校教師会	イラスト作画
教会学校教師のための神学講座	表紙 中村未生（春日井教会信徒・IBUKI）
吉田 隆（神戸改革派神学校校長）	高橋乃亜（湘南恩寵教会信徒・IBUKI）
聖書黙想・説教展開例	本文 岡野美佳（青葉台キリスト教会信徒）
二宮 創（太田伝道所宣教教師）	

☆ 編 集 部 ☆

相馬伸郎（長）	名古屋岩の上教会牧師
芦田高之	新浦安教会牧師・大会教育委員会
大西良嗣	滋賀摂理教会牧師・大会教育委員会
長田詠喜	新所沢伝道所宣教教師・大会教育委員会
安田直人	田無教会牧師・大会教育委員会
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会『教会学校教案誌』
2015年4・5・6月号（季刊）
第57号
2014年2月25日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部
	名古屋岩の上教会 牧師 相馬伸郎
	〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
	Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
頒価	900円（本体価格）

Reformed Church in Japan
Board of Education

